山形県埋蔵文化財センター調査報告書第23集

大坪遺跡
第2次発掘調査報告書

1995

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

大坪（おおつぼ）遺跡
第2次発掘調査報告書

平成7年3月

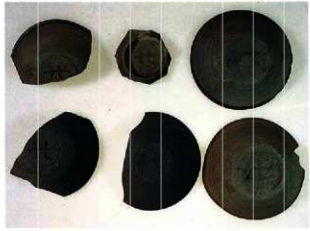
財団法人　山形県埋蔵文化財センター

灰陶器碗・皿

赤焼土器・鍋(22-241)

赤焼土器・三脚鉢(22-242)

墨書土器「导」



墨書土器「廿」

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、大坪遺跡の調査成果をまとめたものです。

大坪遺跡は山形県の北部に位置する遊佐町にあります。遊佐町は県内有数の稲作地帯であり、北に鳥海山を望み、月光川河口には吹浦漁港をひかえて、豊かな海山の幸に恵まれたところです。調査では、発掘区の中央部で南から北に蛇行しながら流れる河川跡が検出され、その両岸に建物跡が多数確認され、当時の居住景観が具体的にわかってきました。岸辺には土器等の投棄場もあり、9世紀後半と推定される遺物が出土しました。なかでも、甘味料として平安京に貢進されていた甘葛の負担者を記録した木簡や灰釉陶器、多様な墨書土器は学問的に貴重な資料として注目されます。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されますようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　木場清耕

例　言

1　本書は山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所の県営ほ場整備事業(月光川上流地区)に係る「大坪遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は山形県教育庁文化財課の調整を得て、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　大坪遺跡（ＡＹＺＯＴ）　遺跡番号 2,110
所在地　山形県飽海郡遊佐町大字野沢字大坪
調査期間　発掘調査　平成６年４月１日～平成７年３月31日
　　現地調査　平成６年５月９日～平成６年９月７日
調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター
発掘調査・整理作業担当者

調査研究課長	佐々木洋治
主任調査研究員	尾形　與典
調査研究員	斎藤　俊一
嘱託職員	渡辺　薫
嘱託職員	黒沼　幹男

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区、遊佐町教育委員会等関係機関の協力を得た。
　報告書作成に当たっては、国立歴史民俗博物館教授平川南氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5　現地調査における平面図(1/40・1/100)の作成は空中写真測量によっても行い、その業務を株式会社パスコに委託した。また、現地において採取した火山灰等の自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して報告を受けたものである。

6　本書の作成・執筆は、斎藤俊一、渡辺薫、黒沼幹男が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

7　出土遺物、調査記録類については財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。

ＳＢ……掘立柱建物跡　　ＳＫ……土壙　　ＳＧ……河川跡
ＳＤ……溝跡・畝状遺構　　ＥＢ……柱跡　　ＳＰ……ピット・小穴
ＳＡ……杭列・板材列　　ＳＸ……性格不明遺構
ＲＰ……登録土器　Ｐ……土器　Ｓ……礫　Ｗ……木製品　Ｍ……金属製品

2　遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲したが、建物跡等については本書で新たに付したものがある。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構平面図中の方位は磁北を示している。
(2) 今調査区に設定したグリッドの南北軸はＮ－16°02′－Ｅを測る。
(3) 遺構実測図は1/20・1/40・1/60・1/80・1/100・1/400で採録し、各々にスケールを付した。
(4) 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土はＦを付して区別した。
(5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
(6) 遺物実測図・拓影図は1/4・1/6縮尺で採録したが、古銭については原寸とした。各々にスケールを付した。実測図で遺物番号前に●印があるものは須恵器を表している。また、実測図中の次の各スクリーントーンは黒色処理、墨痕部分、漆塗部分、炭化部分を表している。
(7) 遺物観察表中の計測値で(　)内の数値は図上復元による推定値を示す。
(8) 遺構覆土の色調記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の経過……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　自然環境……4
　2　歴史的環境……4
　3　遺跡の層序……5

Ⅲ　検出遺構と出土遺物
　1　遺構・遺物の分布……6
　2　掘立柱建物跡……10
　3　板材列……16
　4　土壙……17
　5　溝跡……22
　6　河川跡
　　(1)土層について……24
　　(2)検出の捨て場について……24
　　(3)捨て場出土遺物について……25
　7　グリッド内出土遺物……50

Ⅳ　まとめと考察
　　(1)墨書土器について……60
　　(2)墨書文字について……61
　　(3)遺跡の性格について……62

付編「大坪遺跡出土木簡の釈文と解説」……69

報告書抄録……71

挿　　図

第1図　遺跡概要図……2
第2図　遺跡位置図……3

第３図　遺構配置図……7
第４図　ＳＢ１～６掘立柱建物跡……12
第５図　ＳＢ８～12掘立柱建物跡……13
第６図　ＳＢ13～14・16～17掘立柱建物跡……14
第７図　ＳＢ15・18～20掘立柱建物跡……15
第８図　板材列平面図・断面図……16
第９図　土壙平面・断面図・出土遺物(1)……19
第10図　土壙平面・断面図・出土遺物(2)……20
第11図　土壙平面・断面図・出土遺物(3)……21
第12図　溝跡平面・断面図・出土遺物……23
第13図　ＳＧ１河川跡土層断面図……25
第14図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場・出土遺物(1)……26
第15図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(2)……27
第16図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(3)……28
第17図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(4)……29
第18図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(5)……30
第19図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(6)……31
第20図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(7)……32
第21図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(8)……33
第22図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(9)……34
第23図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(10)……35
第24図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(11)……36
第25図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(12)……37
第26図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場・出土遺物(1)……38
第27図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場出土遺物(2)……39
第28図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場出土遺物(3)……40
第29図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場出土遺物(4)……41
第30図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場出土遺物(5)……42
第31図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場出土遺物(6)……43
第32図　ＳＧ１河川跡Ｆ－11グリッド捨て場出土遺物……44
第33図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場・出土遺物(1)……45
第34図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場出土遺物(2)……46
第35図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場出土遺物(3)……47
第36図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場出土遺物(4)……48
第37図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場出土遺物(5)……49
第38図　グリッド内出土遺物(1)……50
第39図　グリッド内出土遺物(2)……51
第40図　墨書文字・記号集成……65

表

表－1　火山灰検出遺構一覧……9
表－2　掘立柱建物跡観察表……11
表－3　遺物観察表(1)……52
表－4　遺物観察表(2)……53
表－5　遺物観察表(3)……54
表－6　遺物観察表(4)……55
表－7　遺物観察表(5)……56
表－8　遺物観察表(6)……57
表－9　遺物観察表(7)……58
表－10　遺物観察表(8)……59
表－11　墨書土器出土地点一覧……64

図　版

図版1　調査区全景・遺構検出状況
図版2　調査区遠景・河川跡・掘立柱建物跡板材列検出状況
図版3　土壙・溝跡土層断面
図版4　河川跡F－4G・F－9G・D－7G捨て場
図版5　出土遺物(1)
図版6　出土遺物(2)
図版7　出土遺物(3)
図版8　出土遺物(4)
図版9　出土遺物(5)
図版10　出土遺物(6)
図版11　出土遺物(7)
図版12　出土遺物(8)
図版13　出土遺物(9)
図版14　出土遺物(10)
図版15　出土遺物(11)
図版16　出土遺物(12)
図版17　出土遺物(13)
図版18　出土遺物(14)
図版19　出土遺物(15)
図版20　出土遺物(16)
図版21　出土遺物(17)
図版22　出土遺物(18)
図版23　出土遺物(19)
図版24　出土遺物(20)
図版25　出土遺物(21)
図版26　出土遺物(22)
図版27　出土遺物(23)
図版28　出土遺物(24)
図版29　出土遺物(25)
図版30　出土遺物(26)
図版31　出土遺物(27)
図版32　出土遺物(28)
図版33　出土遺物(29)
図版34　出土遺物(30)
図版35　出土遺物(31)

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

遊佐町には鳥海南麓や平野部で数多くの遺跡が確認されている。なかでも高瀬川や月光川、日向川に連なる形で平安時代の遺跡が広範囲に分布している。

大規模農業に向けた基盤づくりとして県営のほ場整備事業が進められている。それは自然堤防上の微高地に立地する遺跡にも少なからず影響を与えることになった。整備事業の進展と遺跡の保存・保護との調整が今日的課題として急がれている。

大坪遺跡は昭和38年と51年に行われた遺跡確認調査によって、総面積約122,000㎡におよぶ平安時代の集落跡として認知され、県遺跡台帳に遺跡番号2,110として登録されることとなった。

本遺跡は県営ほ場整備事業(月光川右岸地区)との関連から、昭和63年に遺跡詳細分布調査が実施された経緯があり、遺跡全体の規模や遺物の遺存状態など概要が次第に明らかになってきた。

その後、平成元年度に分布調査及び広域営農団地農道整備事業に伴う試掘調査と立ち会い調査が行われた(『山形県埋蔵文化財調査報告書』第148集)。平成2年度には県営ほ場整備事業にかかる遺跡東部分3,000㎡について緊急発掘調査が行われ、その調査成果は翌年先掲『報告書』第166集として刊行されている。

今回の発掘調査も継続的に進められている月光川上流地区のほ場整備事業との関連で山形県埋蔵文化財センターが調査主体となり実施することとなった。広域農道を挟んで、遺跡東半部分を調査対象とした第1次調査に次いで、今調査は第2次になるが、遺跡範囲の内田面高によりやむを得ず削平を受ける中央部分の水田地11,200㎡について発掘調査を行った。その他の部分については現状保存される。

2　調査の方法と経過

現地調査は平成6年5月9日から9月7日まで実働82日間の日程で行った。

5月9日に発掘機材を搬入し調査を開始した。次に調査区全体にわたり、遺物の出土状況や遺構検出面までの深さなどを確認するため、10m間隔で50cm四方の坪掘りを行った。

その結果に基づいて、バックホー等重機を導入して水田耕作土を除去、併行して面整理を行いながら、遺構の確認にあたった。

その後調査区内に第1次調査と対応できるように広域農道のセンター鋲を南北軸線(Y軸)の基準として、東西軸(X軸)をそれと直行させ10m四方の方眼区画(グリッド)を設定した。X軸は西から東に1～11、Y軸は南から北にA～Nとして、A－1グリッドというように表現した。Y軸はN－16° 02′－Eを測る。

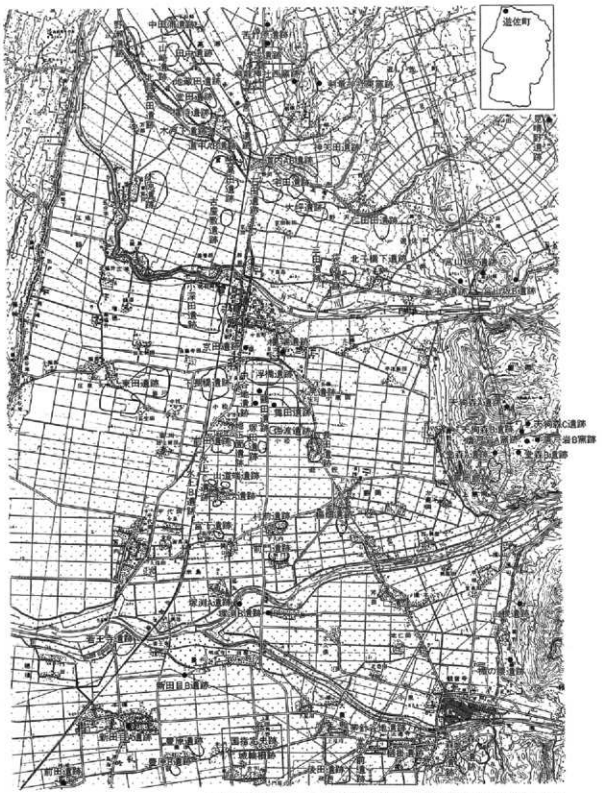
面整理を繰り返しながら、遺構検出～マーキングにつとめた。続いて7月から遺構精査に入った。その間適宜平面図・断面図の作成や写真撮影など記録作業にあたった。

9月3日には現地調査説明会を催した。9月5～6日にかけて空撮による写真実測を実施した。

9月7日機材を撤収し、現地調査を終了した。

11.11
農道
用水路
11.34
広域農道
11.26
11.47
11.58
11.67
11.76
11.53
12.04
平成2年度調査区
平成元年度分布調査区
SD300
12.05
12.16
遺跡範囲
調査区
0
50m
1:1200

第1図　遺跡概要図



国土地理院発行2万5千分の1地形図「吹浦」「羽後観音寺」を½縮少して使用(1:50,000)

第2図　遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　自然環境

遊佐町は山形県北部にあり、秋田とは県境を接している。庄内平野は、最上川を境界として大きく南半の鶴岡市・田川郡と北半の酒田市・飽海郡に分けられる。飽海は西に日本海、砂丘地を抱え、北東は庄内東部丘陵と鳥海山に囲まれた沖積平野に位置する。標高5～20mを測るこの広大な沖積地には最上川の他に月光川・日向川・高瀬川などが流れており、これら河川は時に水害をもたらしながらも人々に肥沃な土地を与えている。水田地帯に散在する現集落は強風や地吹雪を遮る防風林に囲まれ立地しているが、生活は今も昔も厳しい自然との闘いであった。

庄内地方は全国的にも遺跡の発掘調査とりわけ集落遺跡の発掘が数多く行われている地域である。それらの大半は大規模農業化の基盤整備事業を原因とする緊急発掘調査である。水田下の遺構検出面は平坦でない、かなり起伏に富む地形であることがほぼ共通して窺える。海抜の高低にかかわらず調査区内において平らな場所は意外と少ない。調査を進める過程で根木（埋もれ木）が出てくる。伐採の跡があったり、自然倒木だったりするが現在平地となっている所にも樹木が少なからず生えていたことを想起させる。大坪遺跡では調査区中央部で旧河川跡が検出されたが、岸寄りに径40cm以上の伐採痕を残す栗の木が出土している。その河川跡の堆積土壌を分析した結果、流域にはブナ属やクルミ属等落葉広葉樹の河畔林があったことが想定された。よく出土する橡の実やクルミ等もずっと上流から流れ着いたというよりは、生活域の身近にあったものと思われる。海岸近くにはまだ砂丘が発達せず、いたるところに潟湖や流路変遷に伴う三日月湖も残っていた。現在の海岸線から数km離れた地点で製塩土器が出土する例は海水がもっと近くに浸っていたことを示すものである。奈良・平安期の海岸線や河川流路がより確実になれば、遺跡の所在地や想定地は自ずと鮮明になるはずである。

農業経営及び居住域として好適な場所は、後背湿地を抱えた自然堤防上の微高地であり、そこに遺跡が集中するのは当然であろう。従来の調査においても建物跡等がこの微高地に沿って帯状に連なって存在していたことが確認されている。

2　歴史的環境

9世紀前後の頃から飽海の環境と歴史的な位置は大きく変化する。律令政府による大規模な開発が進行する。この開発は先住者＝蝦夷の生活領域を奪う形で進行し、後に具現化するが当初より対立の要因を孕むものであった。古墳時代の生産基盤をもつ最上川南半の田川から着手して、北上を続けた律令権力は城柵を拠点としながら、その周辺部に新しい人々＝移民を導入し、集落を配置した。北陸や信濃等からの移民を柵戸として断続的に推し進められた。鳥海南麓には縄文時代の遺跡が多く確認されるが、飽海の平野部において現在確認されている遺跡の殆どは平安期以降のものである。それは当該期に開発が集中的に進んだことを物語っている。飽海周辺でのその画期は『三代実録』仁和3年(887)5月20日条に所見する延暦年中の「出羽郡井口地」への国府移転であろう。酒田市にある城輪柵跡がこの国府に比定されているが、時期的には9世紀初頭から前半が当てられる。

複雑な蝦夷の動きと深い関わりをもって、律令政府による出羽国支配の拠点は田川郡域から秋田に北上して、その後中間に位置する飽海にとどまることになる。その間の時期は未だ判然としていないが、北東部丘陵に多く見られる窯跡の中で現時点で最も古いと推定されるもの(遊佐町当山の剣龍神社東西窯跡・サナミ坂窯跡)は8世紀後半である。供給されたヘラ切り須恵器を主体とする遺跡の発掘例は確認されていない。この周辺において奈良時代の段階ではまだ集落の形成が限られていたことに因るものであろう。すなわち、8世紀後半から徐々に開発が進展するというよりは「井口地」の出羽国府建置あたりから急速に飽海を含めた周辺部の開発が進むと考えられるのである。国府域と支配下住民の配置を含めた周辺の環境整備が時期を同じくして計画的・意図的に行われたものであろう。城輪柵跡から北に直線距離で7.3kmの所に位置する大坪遺跡についても、そういった背景をもって形成されたと考えられる。このような開発・整備は蝦夷支配の前線域である秋田の物心両面の供給地域として期待したものか、安定的な出羽支配の拠点づくりなのか、都に貢進する特産物の供給・交易のためなのかはわからない。ただ、明確なのは9世紀からこの地域に出現する集落は、立地条件としては自然地形等により制約を受けながらも、政治的目的をもった計画集落であったということである。

また、9世紀前半からは記録類にこの地域での自然災害(噴火や地震等)の記事とその被害が多く所見される。それは見方を変えれば、この地域の政治的重要性及び居住人口の増加に対応するものである。

歴史的・生産的な基盤をもたない地域では例えば郡司や官人を如何に還任したものか。田川・飽海・出羽各郡衙ともこれまで発掘例はなく、郡域及び郷についても不明である。加えて、9～10世紀段階での官衙・駅家についても木簡や墨書土器等の文字資料等での根拠の確実なものはなく、存在したはずの行政組織や機構・施設の実態はよくわかっていない。但し、これまでの発掘調査で検出された遺構では注目される遺跡が少なくない。大坪遺跡周辺においても、板材列で囲まれた2棟の東西棟掘立柱建物跡が検出された小深田遺跡、地鎮のための埋設遺構を伴い官衙的な配置をもつ掘立柱建物跡が検出された下長橋遺跡等があげられる。城輪柵跡周辺においても遺構に関しては注目すべきものが多いが、これらの性格や機能については今後とも重要な研究課題である。

本遺跡についても国府周辺における政治的環境の整備に対応した集落(一般集落及び公的施設等を伴う集落)の形成そして発展～変質という観点から考えていく必要があろう。

3　遺跡の層序

今調査区はほ場整備に伴うものであり、全て水田を発掘調査対象としている。基本的な層序はⅢ層であり、Ⅰ層＝表土・耕作土は全域とも暗褐色シルトでありその厚さは中央部において20cm前後と薄く、北及び西に行くにつれて30～40cmと厚くなる。Ⅱ層は黒褐色及び褐灰色シルトであり、河川右岸では砂質で酸化鉄のため赤みを帯びている。この層が遺物包含層である。Ⅲ層は、にぶい黄褐色シルトで区域により粘質・砂質を帯びるが地山面であり、遺構はこの上面で検出している。Ⅱ層・Ⅲ層ともに河川跡を挟んで、右岸と左岸では左岸が堅くしまっているシルトに対して、右岸はくずれやすい砂質である。左岸南端でⅢ層上面に礫層があり、冠水の跡と考えられる。

Ⅲ　検出遺構と出土遺物

1　遺構・遺物の分布

1990年の１次調査において南東部で検出されたＳＤ300が今調査区中央部においても確認され、蛇行しながら南から北に流れる河川跡（ＳＧ１）であることが判明した。河川は周辺の標高や地形から推して月光川水系と考えられる。この河川の両岸、自然堤防上の微高地に居住域を形成しており、掘立柱建物跡が20棟、土壙90基以上、溝状遺構30数条、柱穴2300以上等が検出された。建物跡・柱穴が密集している区域に相応する形で、岸辺から土器や木製品の捨て場が３ケ所みつかった。泥炭層に覆われて遺物の保存状態は良好である。それら遺物は近くに住む人々が投棄したものと考えてよいだろう。遺物は箱数にして土器が122箱、木製品が27箱出土している。土器の内約60箱及び木製品の大部分については先の３ケ所の河岸捨て場からの出土であり、全体的にみれば土壙・溝内からの遺物の出土は少ない。

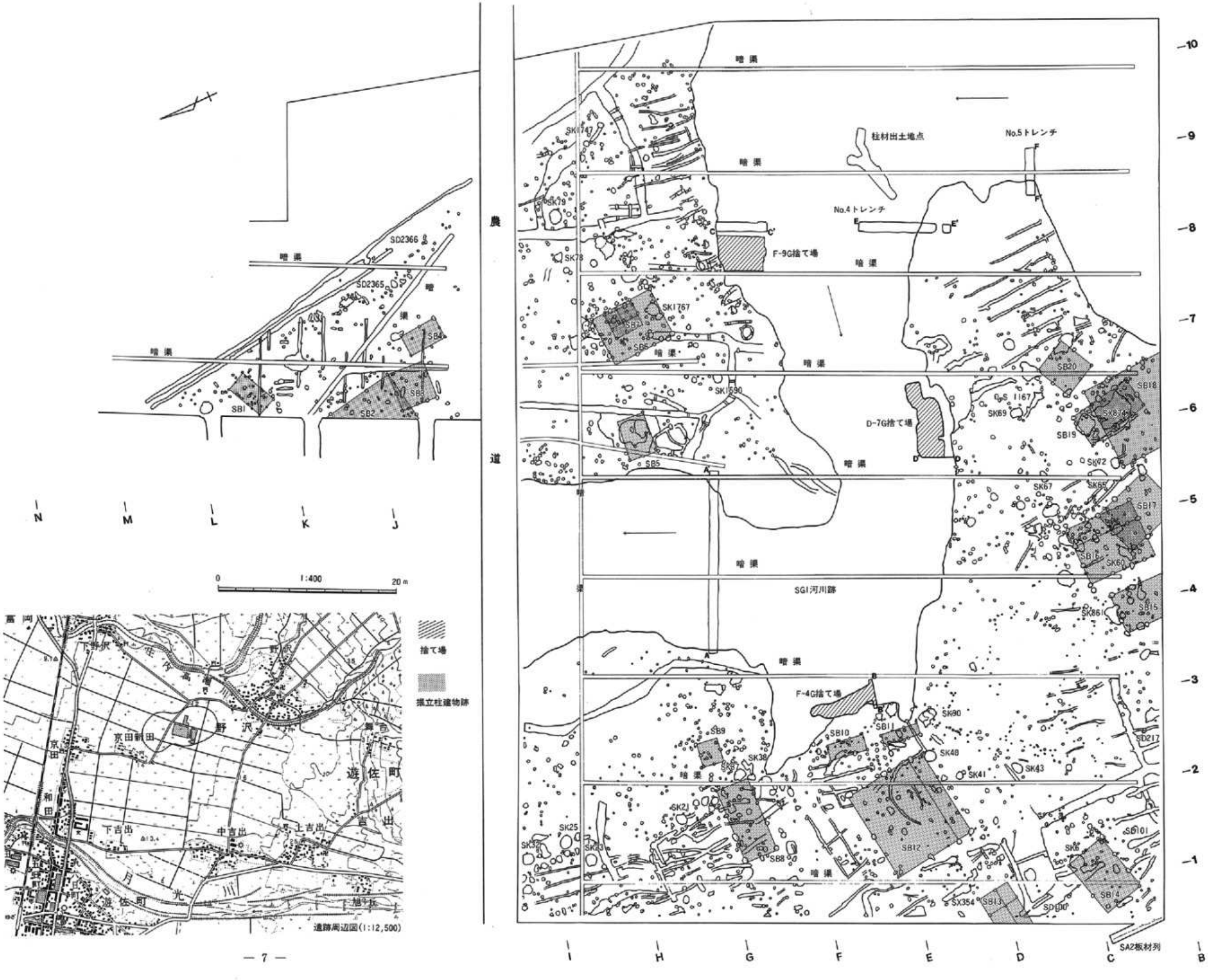
また、この河川跡は上層に斑状に火山灰を含むが、理化学分析では周辺遺跡においても広くその降灰が確認されている青森十和田ａという結果が出ており、『扶桑略記』延喜15(915)年７月13日条に所見する出羽国への降灰二寸と合致する。つまり、河川が埋没し湿地化して数10センチの泥炭層が形成された後に、この火山灰は降り積もったのである。先掲捨て場の土器はこの泥炭層下から出土した。土器は火山灰の降下年＝Ａ.Ｄ.915年を下限とし、泥炭の発達期間が分析・照合できれば更にこれら土器群の使用年代が限定される。と共に各捨て場周辺の建物の使用年代も明白になると考えられる。

Ｆ－４Ｇ捨て場では個体にして13点もの灰釉陶器と短冊型木簡が１点出土し、明らかに平安期の一般的な集落における遺物と性格を異にしている。また、「寻」という文字が墨書された底部ヘラ切り須恵器坏20点及び灰釉陶器から須恵器・赤焼・内黒土師器にいたる墨書文字「廿」の記された坏も25点出土している。赤焼土器が主体的ではあるが、他の２ケ所に比べ底部がヘラ切り・糸切り両方の須恵器坏の出土量が卓越している。Ｄ－７Ｇ捨て場は、これとは対照的に出土土器の大半は歪みの顕著な赤焼土器坏が占めている。Ｆ－９Ｇ捨て場は土器からみるとその中間に位置する。

出土土器の形態や組成は、これら捨て場周辺の建物や遺構の使用年代を端的に反映しているものと考える。換言すれば、３ケ所の捨て場出土遺物を基準にとり、他の遺構からの遺物と対比・照合することでそれぞれの遺構との関連を探ることが可能であろう。

建物跡は20棟検出したが何れも掘立柱であり、大きくは南北棟と東西棟に分けられる。先掲Ｆ－４Ｇ捨て場周辺に見られるのは東西棟である。確認している東西棟は左岸の西方及び右岸北に位置する。南北棟建物跡は左岸南において規模の大きいものが検出されている。その大部分の柱穴１層目に先掲火山灰が二次堆積しており、須恵器の出土割合も低いことから東西棟建物よりは時期的に新しいと考えられる。

範囲を特定できなかったが、調査区西南隅では布掘りによる板材列（ＳＡ２）が検出された。この近くには柱根２本が遺存するＳＢ14及び総柱建物のＳＢ13が所在する。また、板材列とほぼ平行に走る溝跡が河川を挟んだ右岸北にみられ、板材は残存しないが布掘りの跡と認められるならば、河川両岸に立つ建物群は区画された囲繞施設という見方も成り立つ。検出した建物跡については主軸の傾きから３時期が想定される。



暗渠
SD2366
SD2365
SB1
SB2
SB3
SB4
N
M
L
K
J
1:400
20 m
0
捨て場
掘立柱建物跡
遺跡周辺図(1:12,500)
野沢
京田新田
遊佐町
下吉出
中吉出
上吉出
月光川
農
道
柱材出土地点
No.5トレンチ
No.4トレンチ
F-9G捨て場
D-7G捨て場
F-4G捨て場
SG1河川跡
SK1747
SK79
SK78
SK1767
SB7
SB6
SK1590
SB5
SB20
SB18
SK674
SB19
SK69
SK72
SK67
SK65
SB17
SB16
SK60
SK861
SB15
SB9
SB10
SB11
SK80
SK48
SK41
SK43
SD217
SB12
SB8
SK21
SK25
SB13
SB14
SX354
SD101
SA2板材列
-10
-9
-8
-7
-6
-5
-4
-3
-2
-1
I
H
G
F
E
D
C
B

第3図　遺構配置図

表－1　火山灰検出遺構一覧

検出番号	検出遺構	所在グリッド	出土土器・点数 須恵	赤焼	内黒	備考
※1	SG1					全トレンチ区内で検出
2	SK25	I－3	20	22		須恵(ヘラ切り・墨書)
※3	SK32	J－3		11		
4	SK48	B－4		29		
※5	SK51	D－6		8		
6	SK67	C－6		7		
7	SK68	C－6				
8	SK69	C－7	1	28		
※9	SK78	H－10	6	43		赤焼甕多い　炉跡か
10	SK81	H－4				
※11	SD100	D－1	28	545		灰釉耳皿片含む
※12	SD101	C－2	2	11	3	
※13	SD217	C－3		14	2	
※14	SP236	C－3				
15	SX276	D－3				
16	SP472	E－4		1		
※17	SP473	E－4				
※18	SK734	G－4		1		
19	SK871	D－6		3		
20	SP973	B－4		7		
21	SP978	C－4		14	1	
※22	SP979	C－4		21	1	
23	SP993	C－4				
24	SP1017	B－5				
25	SP1018	B－5				
26	SP1024	B－5		25	9	
27	SP1026	B－5		5	3	
※28	SP1027	B－5		2	1	
29	SP1030	B－5		6		
※30	SP1034	B－5		4		
31	SP1035	B－5				
32	SP1049	C－5		1		
33	SP1052	C－5				
34	SP1056	C－5	1	4		
※35	SP1066	C－5		11	1	
36	SP1073	C－5		9		
37	SP1131	C－6		3		
38	SP1135	C－6		3		
39	SP1139	C－6				
40	SP1143	D－6				
41	SP1147	D－6				
42	SP1156	D－6		1		
※43	SD1167	C－7	20	54		
※44	SP1178	C－6				
45	SP1190	B－6		3		
46	SP1191	B－6		3		
47	SP1197	B－6				
48	SP1209	B－6				
49	SP1215	B－6				
50	SP1216	B－6		3		
51	SP1234	D－7		11		
52	SP1238	D－7		2		円面硯支脚1
53	SP1239	D－7		1		
54	SP1240	D－7		30	2	
55	SP1244	C－7		2		
56	SP1245	C－7				
57	SP1246	C－7		2		
58	SP1247	C－7				
59	SP1251	C－7		1		
※60	SP1257	C－7	1	1		
61	SP1265	C－7		1		
62	SP1268	C－7	11			
63	SP1272	C－7		2		
64	SP1274	C－7		1		
65	SP1275	C－7				
66	SP1281	C－7				
67	SP1320	B－7				
68	SD1340	B－8				
69	SP1372	C－8				
70	SP1378	C－8		2		
71	SP1394	D－8		4		
※72	SD1401	D－8		43	2	
73	SP1403	D－8		4		
74	SP1404	D－8		2		
75	SP1407	H－7				
76	SP1413	H－7				
77	SP1415	H－7		1		
※78	SP1493	F－7				
※79	SK1590	G－8				
80	SP1594	F－7				
81	SP1842	H－10		1		
82	SP1853	H－10				
※83	SP1867	G－10		1		

※番号は理化学分析を行い、何れもTo－a(青森十和田a)の結果を得ている。

2　掘立柱建物跡(第4～7図)

今調査で検出した掘立柱建物跡は20棟である。これらは検出状況や出土遺物から全て平安期にかかる建物跡と考えられる。上部の削平により、柱穴プランを検出できなかったものもあるが、柱穴の位置等の比較検討により建物跡と推定した。概括的には建物規模1×3間のものが2棟(SB10・11)、2×2間が5棟(SB5・7・9・13・20)、2×3間が8棟(SB1・3・4・6・8・12・14・19)、2×4間が1棟(SB16)、3×3間が1棟(SB17)、調査区外に延びるため全体の規模が不明なものが3棟(SB2，15，18)である。SB2・6・12・16・18等は規模的にみて、母屋的存在であると推測される。なかでもSB12・16は庇をもつ規模の大きい建物である。建物の分布は河川跡(SG1)右岸に7棟、左岸では西半部に7棟、南半部に6棟である。建物の主軸方位は、総じて南北軸に重なるものが多いが、若干ずれる建物も見受けられる。重複関係としてはSB2・3、SB16・17、SB18・19等でみられ、少なくとも2時期にわたる変遷が推定される。これらは出土遺物等からSB16→17，SB18→19という先後関係が窺える。SB2，3については先後関係が不明である。SB16・17，SB18・19は柱穴覆土から火山灰が検出されていることから、より近接した時期の建物跡であることが推測される。柱穴掘り方に火山灰を含む建物跡SB15～20は左岸南半部に集中するという特色がある。建物跡は主軸方向からみて、北から東に傾く一群と西に傾く一群に大別される。加えて西に傾く建物群に関しては、東西棟・南北棟などの違いから更に少なくとも2時期に分けてとらえられ、都合検出建物群は3つの分類化が可能である。第1は主軸方向がN－5°～11°－EのSB3・5，8～11の建物群・第2はN－0°～2°－WのSB4・6・7・16・18、第3はN－2°30′～16°15′－WのSB2・12～14・19・17である。SB2・12～14・19・17は東西棟＝SB12～14、南北棟＝SB2・17・19に細分化が可能である。遺物としてはSB1・3・4・5・9・10をのぞき、建物柱穴覆土より内黒土師器・須恵器・赤焼土器片が出土し、器種には坏、甕、塝がある。以下検出した主な建物跡の概略を述べる。

・SB12(5図)

左岸西半部E－3グリッドに位置し、梁行3間、桁行2間で南面に庇がつく東西棟の建物跡である。主軸はN－84° 15′－Eを測り、北西隅は上部削平により掘り方が浅くなっているが、柱穴掘り方は29～82cm、確認面からの深さは11～35cmである。SB12内部のSP550からは赤焼土器坏(5－1・2)が重なった状態で出土しており、地鎮など意図的な埋設と推定される。その他の柱穴掘り方からの出土遺物は赤焼土器坏・甕片である。

・SB14(6図)

調査区南西、D－2グリッドに位置する梁行2間、桁行3間の東西棟の建物跡である。主軸はN－80° 30′－Eを測る。掘り方は39～72cm、確認面からの深さは6～43cmを測る。EB122・123には柱根(スギ材)が残存する。後述のSD100に北東辺を切られたため、EB123に対応する柱穴は検出されていない。

また、EB317・319に対応する柱穴も検出されてないが、これは後世の攪乱によるものと思われる。

遺物はEB120・123より内黒土師器坏・須恵器甕・赤焼土器坏・甕の各破片が出土した。

・SB16(6図)

SB15～20までの建物跡が密集する左岸南半部C－5グリッドに位置し、SB17とEB

865を共有し、重複関係にある建物跡である。規模は梁行２間、桁行３間で東面に庇がつく南北棟で、主軸はＮ－２°－Ｅを測る。掘り方は49～82cm、確認面からの深さは約11～41cmである。約半数の柱穴覆土１層からは二次堆積による火山灰が検出されている。

遺物としては内黒土師器坏・須恵器甕・赤焼土器坏・甕の各破片が柱穴掘り方より出土している。

・ＳＢ17(６図)

Ｂ－５グリッドに位置し、梁行３間、桁行３間の南北棟建物跡である。主軸はＮ－16°15′－Ｗを測り、掘り方は51～116cm、確認面からの深さは18～32cmである。ＥＢ1034･1191からは火山灰が検出された。遺物は赤焼土器坏・甕片が出土している。

・ＳＢ18(７図)

Ｂ－７グリッドに位置し、梁行３間・桁行３間以上あり今調査区で確認された建物跡の中では比較的間尺の大きい南北棟の建物跡である。主軸は磁北とほぼ同一である。ＳＢ19と重複する。掘り方は34～52cm、確認面からの深さは18～29cmである。遺物は赤焼土器坏・甕片が出土している。

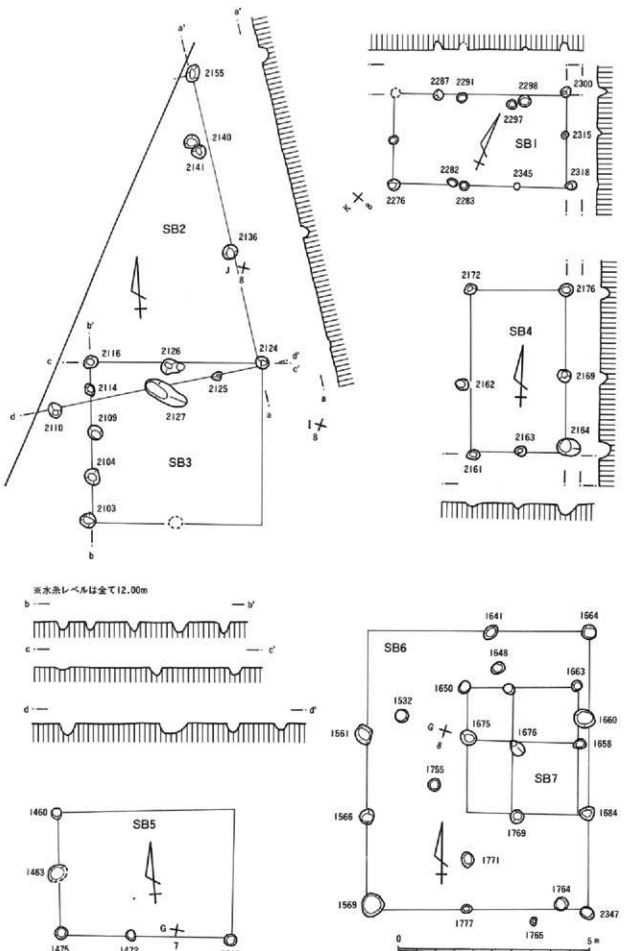
・ＳＢ19(７図)

Ｃ－７グリッドに位置し、梁行２間･桁行３間の南北棟の建物跡である。主軸はＮ－10°－Ｗを測り、掘り方は31～77cm、確認面からの深さは58～70cmである。ＥＢ75・1312からは赤焼土器坏（７－２・３・５～９）が、覆土上層の褐灰色砂質シルト層から先掲ＳＰ550と同様に折り重なった状態で出土した。これらの坏は、何れも歪みが大きく河川跡ＳＧ１～Ｄ－７Ｇ捨て場で出土した土器と類似する。

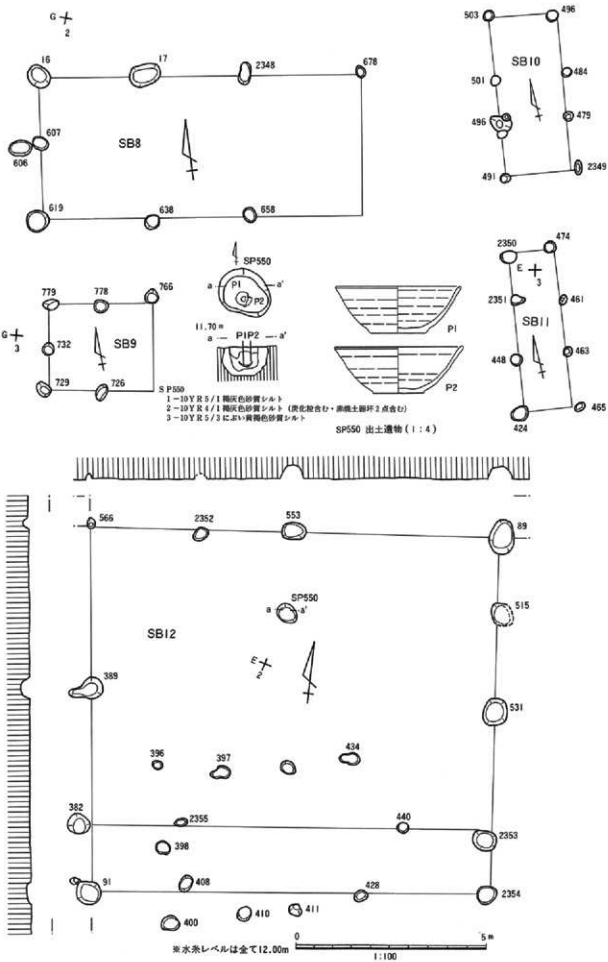
その他の遺物としては内黒土師器坏・須恵器坏・甕・赤焼土器甕・堝の各破片がある。

表－２　掘立柱建物跡観察表

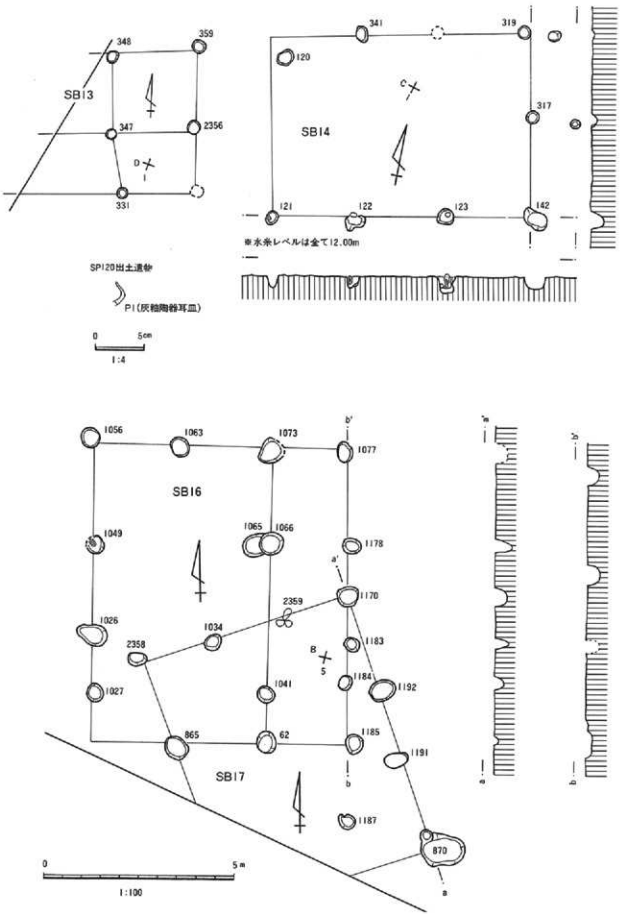
建物番号	所在グリッド	長軸方向	規模 梁行間×桁行間(m) 面積 (坪)	柱間寸法 m(尺)	掘り方 (cm)	出土遺物 柱穴番号(ＥＢ)	備考
ＳＢ1	L-9	N-69°-E 東西棟	2間×3間(2.6×4.6) 12.6(3.7坪)	梁間1.2～1.4(4～約5尺) 桁間1.0～1.7(約3～6尺)	径15～30 深2～20		
ＳＢ2	K-8	N-9°-W 南北棟	2間×3間～(8.0×5.6) 44.8(13.8～)	梁間2.0～3.0(約7～10尺) 桁間1.2～2.8(4～約9尺)	径32～116 深5～20	2125赤焼片	北半部未検出
ＳＢ3	J-8	N-5°-E 南北棟	2間×3間(4.6×4.3) 19.8(6.1坪)	梁間2.4(8尺) 桁間0.7～1.2(約2～4尺)	径38～50 深10～29		
ＳＢ4	J-9	N-0°0′ 南北棟	2間×3間(2.4×4.4) 10.6(3.3坪)	梁間1.2(4尺) 桁間1.8～2.6(6～約9尺)	径26～60 深11～30		
ＳＢ5	H-7	N-83°-W 東西棟	2間×2間(3.2×4.5) 14.4(4.4坪)	梁間1.6(約5尺) 桁間1.9～2.6(約6～9尺)	径30～56 深13～29		
ＳＢ6	H-9	N-0°30′-W 南北棟	2間×3間(5.7×7.7) 43.9(13.5坪)	梁間2.5～3.2(約8～11尺) 桁間2.2～2.7(約7～9尺)	径28～62 深23～38	1566・1569・1660 1777土師器,須恵器,赤焼片	
ＳＢ7	H-9	N-1°-W 南北棟	2間×2間(3.4×3.45) 10.4(3.2坪)	梁間1.2～1.8(4～6尺) 桁間1.5～1.95(5～約7尺)	径31～41 深24～31	1769須恵器片・1675赤焼片	総柱
ＳＢ8	G-3	N-85°-W 東西棟	2間×3間(3.9×8.5) 14.8(4.6坪)	梁間1.8～2.1(6～7尺) 桁間2.5～3.0(約8～10尺)	径34～83 深15～46	16赤焼片・17須恵器,赤焼片 606土師器,須恵器,赤焼片	
ＳＢ9	H-4	N-79°-W 東西棟	2間×2間(2.4×2.8) 6.7(2.1坪)	梁間1.2(4尺) 桁間1.4～1.5(約5～5尺)	径30～36 深17～22		
ＳＢ10	F-3	N-9°30′-E 南北棟	1間×3間(1.7×5.3) 9.0(2.8坪)	梁間1.7(約6尺) 桁間1.2～1.7(4～約6尺)	径26～59 深3～18		
ＳＢ11	E-3	N-8°-E 南北棟	1間×3間(1.2×4.4) 5.28(1.6坪)	梁間1.2(4尺) 桁間1.2～1.6(4～約5尺)	径27～50 深15～30	424赤焼片	
ＳＢ12	E-3	N-84°15′-E 東西棟	3間×2間(8.1×10.8) 87.5(27.0坪)	梁間2.1～4.4(7～約15尺) 桁間2.3～2.9(約8～10尺)	径29～82 深11～35	89・428・531赤焼片	南面庇付 (1×3間)
ＳＢ13	E-2	N-87°30′-E 東西棟	2間×2間(3.8×2.1～) 8.0～(2.5～)	梁間1.7～2.1(約6～7尺) 桁間2.0～2.3(約7～8尺)	径28～38 深22～30	348須恵器,赤焼片 359土師器,赤焼片	総柱 西半部未検出
ＳＢ14	D-2	N-80°30′-E 東西棟	2間×3間(5.0×6.9) 38.6(11.7坪)	梁間2.3～2.7(約8～9尺) 桁間2.2～2.5(約7～8尺)	径39～72 深6～43	120・123土師器,須恵器, 赤焼片	122,123 柱根残存
ＳＢ15	C-4	N-5°30′-E 南北棟	3間×2間～(4.8×2.5～) 12～(3.7～)	梁間1.6(約5尺) 桁間2.4～2.5(8～約8尺)	径52～76 深13～45	969・982・1053赤焼片 979・1024土師器,赤焼片	南半部未検出
ＳＢ16	C-5	N-2°-E 南北棟	2間×4間(4.7×8.0) 37.7(11.6坪)	梁間2.3～2.4(約8～8尺) 桁間2.5～2.8(約8～9尺)	径49～82 深11～41	1077を除き土師器,須恵器,赤焼片出土	東辺庇付 (1×3間)
ＳＢ17	B-5	N-16°15′-W 南北棟	3間×3間(5.7×7.3) 41.6(12.8坪)	梁間1.8～2.0(6～約7尺) 桁間1.9～2.7(6～約9尺)	径51～116 深18～32	870・1034・1170・ 1191赤焼片	南西隅柱穴 未検出
ＳＢ18	B-7	N-0°0′ 南北棟	3間×3間～(9.4×7.3～) 68.6(21.2～)	梁間2.3～3.6(約8～12尺) 桁間1.6～3.1(約5～10尺)	径34～52 深18～29	1264・2360・2361を 除き赤焼片出土	南半部未検出
ＳＢ19	C-7	N-10°-W 南北棟	2間×3間(3.7×7.5) 27.8(8.6坪)	梁間1.4～2.1(約5～7尺) 桁間1.6～3.7(約5～12尺)	径31～77 深58～70	75・1257・1258・1216 1312土師器,須恵器,赤焼片	
ＳＢ20	C-7	N-23°45′-E 南北棟	2間×2間(5.0×4.2) 21(6.5坪)	梁間1.8～2.7(6～9尺) 桁間2.0～2.4(約7～8尺)	径30～47 深43～33	1268・1271・1286赤焼 片1291須恵器,赤焼片	



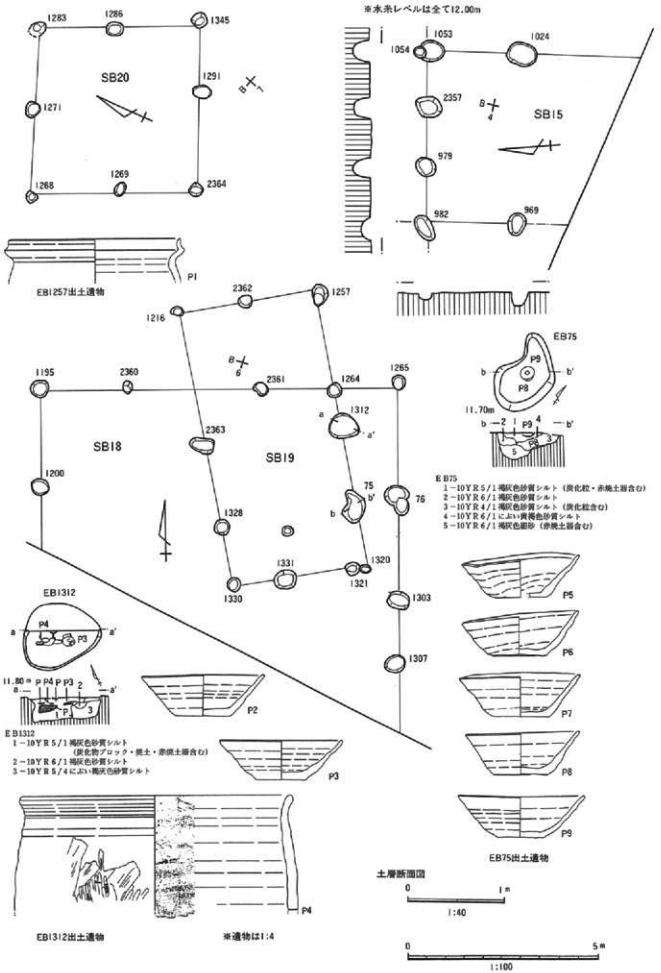
第4図　ＳＢ１～６掘立柱建物跡



第5図　ＳＢ８～12掘立柱建物跡



第6図　SB13・14・16・17掘立柱建物跡



第７図　ＳＢ15・18～20掘立柱建物跡

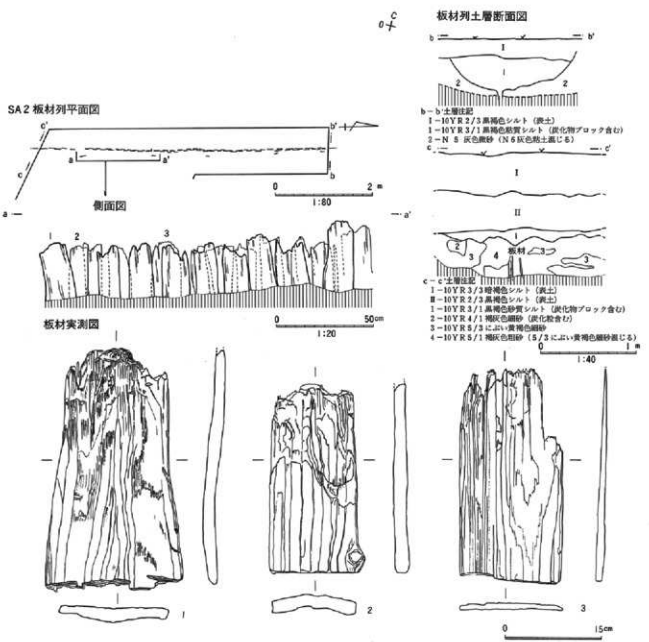
3　板材列（第８図）

調査区南西端Ｃ－１グリッドに位置し、ＳＢ14東西棟掘立柱建物跡・ＳＤ100に隣接する。検出長は約６ｍで、南北方向に延びると推定されるが、配列や規模の全容について確認するには至らなかった。主軸は磁北とほぼ同じＮ－２°30′－Ｅである。掘り方は、北端についてのみ耕作土の約20cm下において幅1.2m程度で断面がＵ字形をなす布掘りであることが明らかになった。覆土は褐灰色シルトを基調とし炭化粒を含み、内黒土師器・須恵器・赤焼土器の破片が出土した。

検出し得た範囲内で、板材列構造は下端が偏平に切られた板材が横二列に重なるように交互に並び、その５～10cm東側に1.2m前後の間隔をおき別の板材を用いて補強する形態をとっている。

また、板列に直行するように配された板材も１箇所認められた。用いられている材については埋め込まれた下端部分であるが、幅13.5～20cm・長さ30～36.5cm・厚さ２～３cmの板状に裁ち割ったスギ材と推定される。

材下端の加工にあたっては鑿及び鉈の使用痕が観察される。検出された位置や配列方向からこの板材列は、主軸が平行か直交する建物に付随すると考えられるが、その機能については全容を把握し得ず判然としない。調査区東にみられる溝状遺構はこの板材列に平行であり、布掘りの跡という見方が可能なら河川をも含んだ大規模な区画が想定される。



第８図　ＳＡ２板材列平面図・側面図・断面図

4　土壙（9～11図）

今回の調査で確認された土壙は90基余りである。以下主なものについて概略を述べる。

ＳＫ６（９図）：Ｄ－２グリッド、後述するＳＤ100の東側に隣接する。東西1.58m、南北1.61mの略円形を呈する。覆土は４層に分かれ褐灰色シルトを基調とする。確認面からの深さは17cmである。内黒土師器、赤焼土器、須恵器片等の遺物が３層より出土している。赤焼土器坏（９－１・３）や内黒土師器蓋（９－４）等が出土している。

ＳＫ25（９図）：Ｉ－３グリッドに位置し、長径1.56m・短径1.29mの略楕円形を呈する。深さは28cmである。覆土の最下層より厚さ２cm程の灰白色火山灰が検出され、２層目から赤焼土器や口縁部が片口状につまみだされ、瓶明皿に使用されたと考えられる底部ヘラ切り須恵器坏（９－５）が二つに割れた状態で出土した。この須恵器坏は先の火山灰よりは層位的に上層である。

ＳＫ21（９図）：Ｈ－３グリッドに位置し、東西・南北ともに1.08mで、不整円形を呈する。深さは８cmである。覆土より赤焼土器片が出土した。

ＳＫ32（９図）：Ｊ－３グリッドに位置し、東西1.15m・南北1.33mを測り、略円形を呈する。覆土は黒褐色シルトを基調とし、３層に灰白色火山灰が点状に含まれる。深さは29cmである。１・３層から、赤焼土器杯（９－６～９）が出土した。

ＳＫ37（９図）：Ｇ－３グリッド、ＳＢ８の東に位置し、不整円形を呈するが南端は暗渠に切られている。深さは17cmで、１層上面から内黒土師器坏（９－10）や赤焼土器が出土した。

ＳＫ12（９図）：Ｅ－２グリッドに位置し、東西0.86m・南北5.1mを測り溝状をなす遺構である。深さ13cmを測る。覆土は２層に分かれ、１層より赤焼土器甕、内黒土師器坏片が出土した。

ＳＫ78（９図）：河川跡右岸、Ｈ－10グリッドに位置する。東西0.82m・南北0.96mの不整円形を呈する。深さは24cmで、３層に火山灰（灰カ）が多量に含まれる。１層上面に焼土が確認され、体部下半にタタキ後にヘラ削り成形が認められる赤焼土器甕（９－13）の体部が平たく敷かれており、その甕を転用した炉跡のようにも推測される。

ＳＫ23（10図）：Ｉ－３グリッド、東西1.20m・南北1.34mのほぼ円形の土壙である。深さ約23cmで、覆土から須恵器、赤焼土器片が出土した。

ＳＫ41（10図）：Ｅ－３グリッドに位置する、東西0.83m、南北0.81mのやや小さめの土壙である。深さは32cmを測る。１層より内黒土師器坏、赤焼土器片が出土している。

ＳＸ874（10図）：Ｂ－７グリッド、ＳＢ13・19の建物内部に位置する東西2.42m・南北3.38mの不整形の遺構である。覆土は褐灰色シルトを基調とするが、上面には炭化物が多く認められた。深さは約28cmである。内黒土師器、赤焼土器が多量に出土し、また、少量ながら須恵器片も出土した。10－１は須恵器甕体部、10－２は高台付の内黒土師器坏である。

ＳＸ354（10図）：Ｅ－２グリッド、ＳＢ13に隣接し、南端を暗渠に切られた溝状の遺構である。深さは16cmで底面はＵ字状である。須恵器・内黒土師器坏の他に、やや小型の赤焼土器坏（10－３）が出土した。

ＳＫ67（10図）：Ｃ－６グリッドに位置し、東西1.25m・南北0.69mの楕円形の土壙である。中央部を暗渠に切られている。深さは約24cmで、１層目には灰白色火山灰が点状に含まれる。赤焼土器・内黒土師器坏片が出土した。

ＳＫ1767（10図）：河川跡右岸Ｇ－９グリッドに位置する。深さは約12cmを測る。ＳＰ1776

と隣接するが、双方の出土遺物が接合したことから、両者は同時期に属する遺構と考えられる。種別では内黒土師器・須恵器・赤焼土器片がみられ、10－4は内黒土師器坏、10－5は底部に墨書「◎」のある赤焼土器坏である。

ＳＫ861(10図)：Ｃ－4グリッドに位置する東西2.08m・南北1.88mの不整形を呈する。覆土は2層に分かれ、褐灰色シルトを基調とする。深さは21cmを測る。

ＳＫ69(11図)：Ｃ－7グリッドに位置し、東西0.98m・南北1.36mの楕円形を呈する。覆土は6層からなり、横縞状に堆積する。深さ約26cmを測る。1層には灰白色火山灰が点状に含まれる。内黒及び両黒土師器坏、須恵器、赤焼土器が出土した。

ＳＫ43(11図)：Ｄ－3グリッドに位置する、長径1.38m・短径0.98mの略円形の土壙である。確認面からの深さは約31cmで、赤焼土器・内黒土師器坏が出土した。

ＳＫ65(11図)：Ｃ－6グリッドに位置し、中央部を暗渠に切られる。東西1.92m・南北2.26mの略円形を呈する。覆土は6層で、深さは約14cmである。検出上面に炭化物と遺物が多く認められ、内黒土師器・須恵器・赤焼土器の破片が多量に出土した。11－1は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口唇部が丸く納まる赤焼土器甕である。

ＳＫ38(11図)：Ｇ－3グリッドに位置する、東西1.18m・南北0.41mの不整形の土壙である。覆土は褐灰色シルトを基調とし、2層に分かれる。深さ27cmを測る。赤焼土器片が出上した。

ＳＫ1590(11図)：河川跡右岸、Ｇ－8グリッドに位置し、南北1.04mで東端を暗渠に切られ、略円形を呈する。深さ約18cmで、覆土の第2層が火山灰層である。

ＳＫ60(11図)：Ｃ－5グリッドに位置し、長径1.92m・短径1.08mの不整形を呈する。底面の所々にピット状の掘り込みが認められ、深さは13cmである。1層より内黒及び両黒土師器坏、赤焼土器片が出土した。

ＳＫ90(11図)：Ｅ－4グリッドに位置し、東西1.12m・南北1.94mの不整形を呈する。覆土は4層からなり、底面は凹凸がある。深さは26cmである。内黒土師器・須恵器・赤焼土器が出土した。

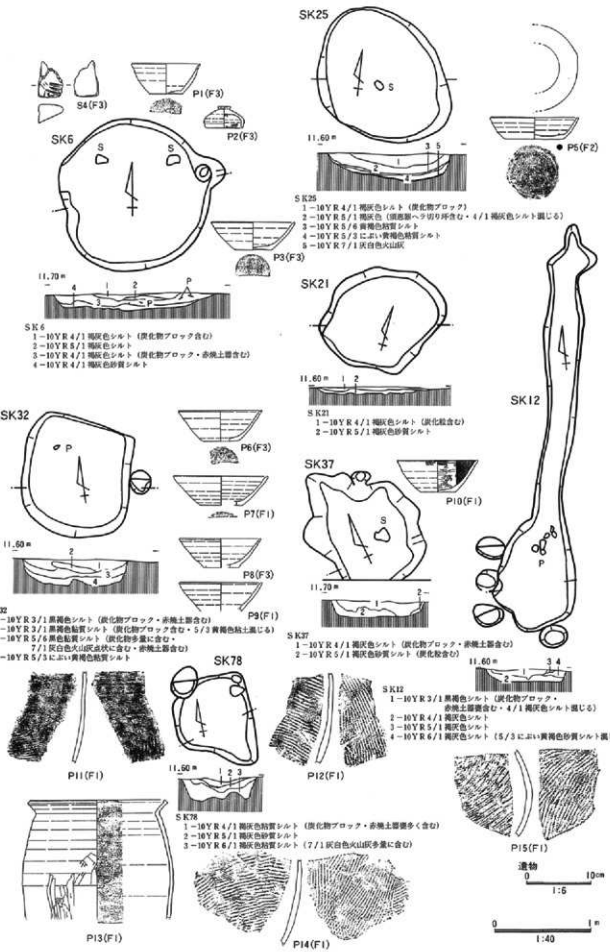
ＳＫ72(11図)：Ｂ－6グリッドに位置し、東西1.12m・南北0.88mの略楕円形を呈する。2層より、須恵器・赤焼土器・内黒土師器坏が出土している。深さは19cmである。11－2はＦ－4Ｇ捨て場で多くみられた墨書「廿」と同筆にかかる文字をもつ須恵器坏である。

ＳＫ40(11図)：Ｅ－3グリッドに位置し、東西1.25m・南北1.33mの円形の土壙である。深さ27cmを測り、土師器・須恵器・赤焼土器片が出土している。

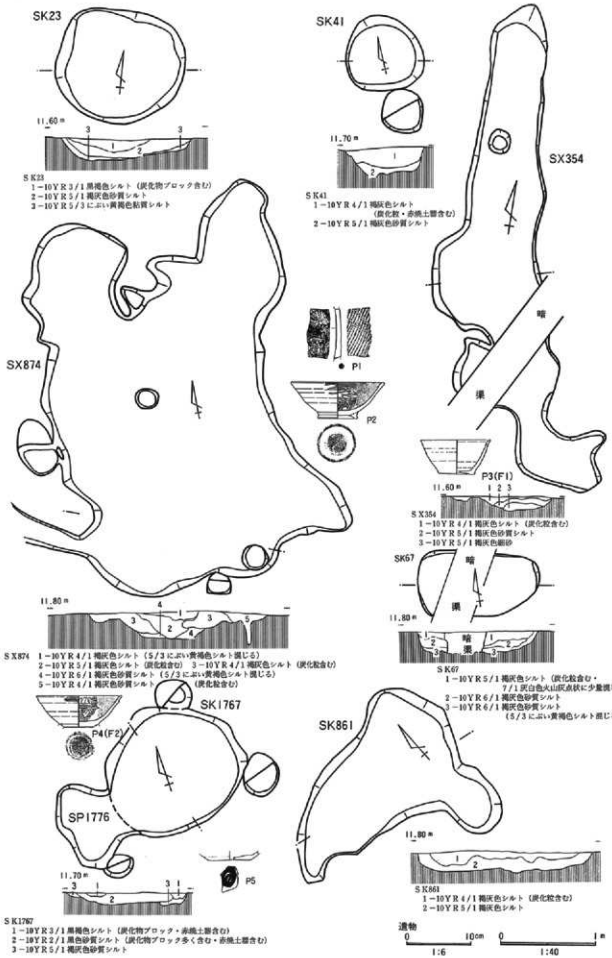
ＳＫ79(11図)：Ｈ－10グリッドに位置し、東西1.53m・南北1.33mの略円形を呈する。深さ16cmを測る。須恵器・赤焼土器が出土している。

ＳＫ1747(11図)：河川跡右岸Ｈ－10グリッドに位置する。東西0.65m・南北0.62mの円形の小さい土壙である。覆土は褐灰色シルトを基調とする5層からなり、横縞状に堆積している。深さは36cmである。

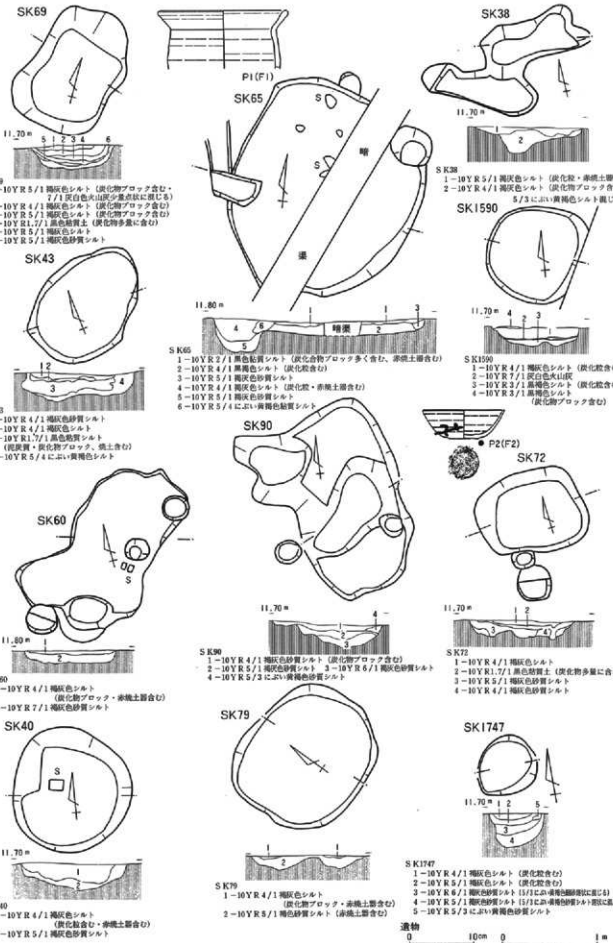
以上主要な土壙について概観したが、河川跡の3つの捨て場出土土器を基準として比較した場合、大方の土壙は9世紀後半から10世紀前後の時期に比定される。しかし、土壙覆土中には火山灰を層やブロックで含むものも所見され、構築・使用については時期的な相異が考えられる。火山灰分析の報告書では、その堆積の段階ではこれら土壙は使用されていなかったと結論づけられている。



第９図　土壙平面・断面図・出土遺物(1)



第10図　土壙平面・断面図・出土遺物(2)



第11図　土壙平面・断面図・出土遺物(3)

5　溝跡(第12図)

調査で検出した溝跡は70条以上あり、その内集中しているのは河川右岸のF－10グリッド、左岸ではC－8～9グリッド及びG～I－2～3グリッドである。以下主なものについて概略を述べる。

SD100(12図)：調査区南西半部C～D－1～2グリッドにあり、SK6と隣接し、SB14の北東隅を切る。SK6との先後関係は不明である。検出長は9.2m・幅0.4m～2.0mを測るが南側に向かうにつれ幅が細くなる傾向がみられる。方向はN－15°－Wで南北にほぼ直線状に延びる。深さは確認面から約15～20cmを測り、南側に向かって浅くなることから南から北に流れるように掘り込まれたと考えられる。北側a－a'の土層は基本的には3層、南側b－b'で2層に分かれ、何れも褐灰色シルトを基調とするが、高い地点から低い地点に流れたかのように灰白色火山灰がブロック状に含まれる。

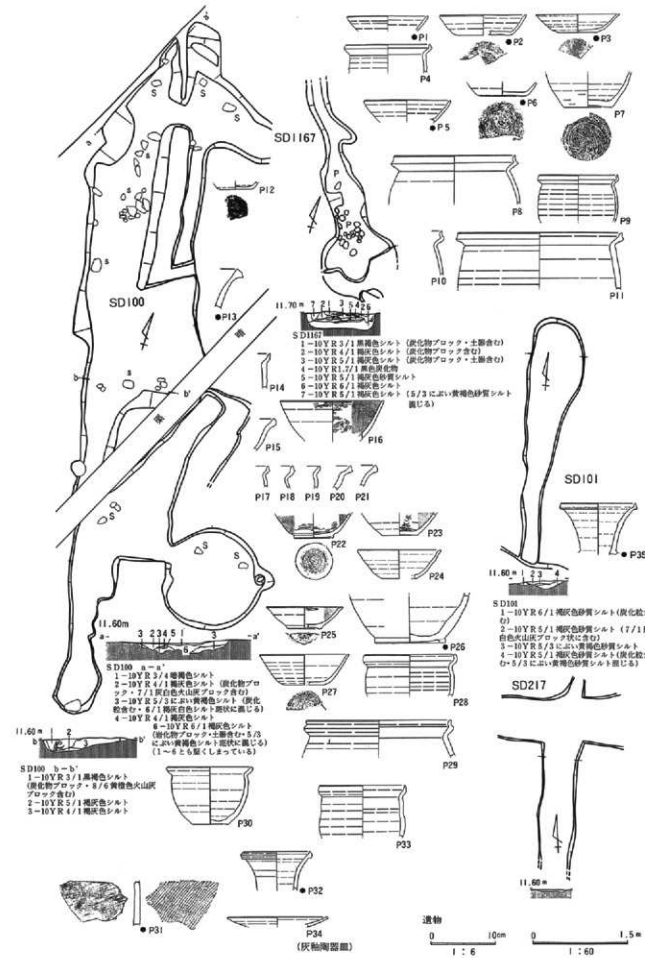
この溝跡は投棄場ともなっており、内黒土師器坏・須恵器・赤焼土器が検出した北半の低い部分から多く出土した。そのうち実測し得たものは23点である。土師器は内黒坏(16・23)・同高台付坏(25)、両黒高台付坏(22)である。須恵器は貯蔵形態が殆どで長頸壺(26・32)・甕(13・31)の4点である。赤焼土器は坏(12・24・27)・甕(14・17～19・28・29・30・33)・鍋(15・20・21)の14点である。底部切り離しは回転糸切りでヘラ切りは確認されない。赤焼土器坏12の底部墨書は「㊀」の一部と推測されるが、同形の文字(記号カ)は河川跡F－4G捨て場出土の赤焼土器坏にもみられる。また、灰釉陶器皿(34)が1点出土しているが、形状から猿投窯黒笹90号窯式に比定できる。この皿は全体にわたって火熱を受けており、釉が変色している。

SD101(12図)：C－2グリッドに位置し、SB14南で検出された。南端が調査区外にかかり、確認できないが南北方向に延びる溝跡である。幅0.28～0.86m・長さは検出分で3.95m・方向はN－2°－Eを測るが、北の方が幅が広く、深い掘り込みとなる。深さは確認面から約13cmで緩やかなU字形の底面となっている。覆土は基本的に2層からなっており、2層目には灰白色火山灰がブロック状に含まれる。遺物は内黒土師器坏・須恵器・赤焼土器が出土した。

SD1167(12図)：調査区南半部C－7グリッドに位置し、SB18・19・20に隣接する。N－35°30'－Wで南西方向に直線的に延び、検出長3.22m・幅0.3～1.2mで南端部はコブ状に膨らむ。深さは確認面から25cm前後を測るが、北側部分は概して浅い掘り込みである。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦である。覆土は褐灰色シルトを基調とするが、複雑な堆積をしており炭化物層も含まれている。遺物は内黒土師器坏・須恵器・赤焼土器で、実測し得たものは11点であるが、須恵器坏(1～3・5・6)の内、底部切り離しがヘラ切りの2・3が注目される。赤焼土器は甕(4・7～11)で、7はケズリ調整が施されている。周辺は供膳具において赤焼土器坏が主体的であるが、9世紀半ばのヘラ切り須恵器坏の出土は他の遺構と区別される。

SD217(12図)：調査区南西端部C－3グリッドに位置する。N－8°－Eで南北方向に直線的に延びる溝跡で、SD218と重複するが先後関係は不明である。検出長は2.0m以上で、幅0.5～0.6mである。床面は平坦であり、深さは確認面から約5cmを測る。覆土は褐灰色シルト単一層で火山灰が点状に含まれる。遺物は内黒土師器坏・須恵器・赤焼土器片である。

以上概略のみを述べたが、SD100は灰釉陶器から、またSD1167はヘラ切り須恵器坏から河川跡F－4G捨て場との共通性が指摘され、9世紀後半乃至第3四半期にあたる。右岸F－10グリッド及び左岸C－8～9グリッドに集中する溝状遺構は畑跡と考えられる。左岸北のG～I－2～3グリッドの溝跡下からは柱穴が検出されており、それ以前に建物が存在したものと推定される。



第12図　溝跡平面・断面図・出土遺物

6　河川跡（第13～37図）

(1)　土層について

調査区中央部で南から北に蛇行して流れる河川跡を検出した。近くには庄内高瀬川が西流しているが、水系としては周辺部の標高等から月光川水系と考えられる。

調査は埋土状況を探るために1m×5mの6本のトレンチNo.1～6を岸から河川中央に設定し、土層を観察した。その結果土層は上から暗褐色シルト－黒褐色シルト－黒褐色泥炭層－黒褐色及び褐灰色砂質・粘質シルトの遺物包含層－河底部の砂礫層という堆積が共通してみられた。遺物は全て泥炭層の下＝砂泥層から出土している。火山灰がこの泥炭層直上の褐色シルト層からと遺物包含層から検出された。上は流動した痕跡を残す斑状に、下は直径2cm程度のブロック状に所見され何れも二次堆積と考えられるが、この2層の間には厚い泥炭層が見られ、両者は隔絶され、本来的には上層の火山灰は下層には混入しないと推測される。

当初別々に設定していたG－5グリッドのNo.1トレンチとG－7グリッドのNo.2トレンチの間を通した結果、このトレンチ間＝河川中央部において長さ8.8m・厚さ30～40cmの火山灰の堆積があることが判明した。検出直後は灰白色であるが、時間を経過して酸化すると濃いオリーブ色に変色する。分析の結果では庄内で広範囲にわたり検出されている915年の広域火山灰十和田aであった。が、後述の如く出土土器からして、下層のものを915年のものとすることには矛盾が生じる。この厚い火山灰層は中央部にのみ検出され、左右岸近くでは見られず土層も変化していることからある時期に両岸寄りに流れが復活したと考えられ、それにより厚く堆積していた火山灰は流散したと推定されるのである。

つまり、河川中央部にのみ遺存したのは、そこが流れをもたない窪地状の湿地であることに起因すると推測される。泥炭層直上の火山灰が915年以後のものとすれば、かかる泥炭層の堆積にはどれくらいの期間を費やしたのだろうか。深さ1.5m前後で20mもの川幅をもつ河川が全体として機能しなくなる時期と深く関わってくる問題である。

(2)　検出の捨て場について

面整理の段階で土器破片が集中している箇所が大きく3地点で認められた。第3図の遺構配置図で示したようにF－4グリッド・F－9グリッド・D－7グリッドの単辺である。その他にも集中的な出土が見られたのはF－9から連なる形でF－10～11グリッドと調査区南のB－7～8グリッドである。遺物は各捨て場毎に上層・中層・底層として一括して取り上げているが、上層は岸辺であり、中央部において泥炭の下から中層－底層という意味である。遺物は泥炭層にパックされる形で殆ど新しい時代のものは混在しないことから投棄された当時の状態をよく保存していると考える。木製品の遺存状況も極めて良好であった。但し、後述するが土器から推しても層序的には必ずしも整合していず、泥炭層形成以前の段階で流勢に因り多少攪拌されていると思われる。とくにD－7グリッドはそれが顕著である。これら捨て場近くの微高地上には掘立柱建物柱穴が集中しており、この住人が投棄した遺物と考えるのが自然であろう。土壙や柱穴等での遺物の出土状況は散漫であり、この河川跡が主な捨て場になっていたのである。土器の出土量や特色などから推して、個々の継続的な投棄というよりは周辺に居住する者（集団）の同時期的な投棄と考えたい。

(3)　捨て場出土遺物について（第14～25図）

F－4・F－9・D－7各グリッドから出土した土器は可能なかぎり実測図として掲載している。3地点とも種別では赤焼土器が卓越しているが、供膳形態における須恵器・

赤焼土器・内黒土師器の出土比率の違いはそれぞれに投棄(使用)年代の特色を表すと考えられる。それは同時に周辺建物の使用・居住年代の相異をも示している。各捨て場の出土遺物について概略を述べる。

(a) F－4グリッド捨て場出土遺物(第14～25図)

種別毎の比率は実測図以外の破片において須恵器８％・赤焼土器76.8%・土師器14.6%であり、他と比較して須恵器の割合が高い。質・量的にも３地点の中では最も注目されるが、とりわけ13点の灰釉陶器と木簡の出土が特筆される。

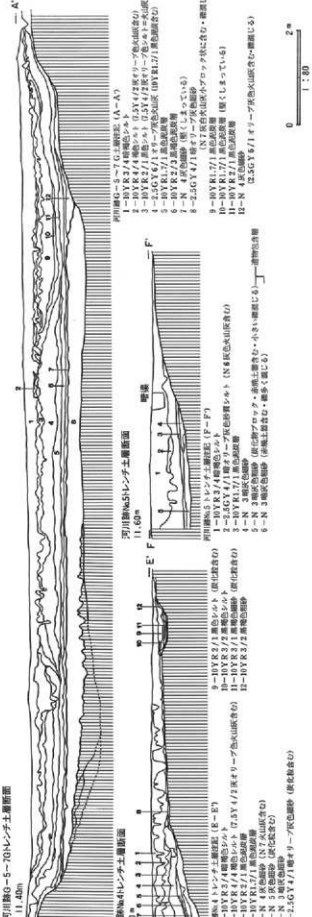
この灰釉陶器は、器形や釉の状態等から猿投窯黒笹14号及び90号窯式に比定でき、編年としては９世紀半ばから後半が当てられる。加えて、これら灰釉陶器には墨書「廿」が見られ、おそらく同時期的な使用・廃棄と考えられ、年代は最も新しい時期＝黒笹90号窯式の第２～３段階、つまり９世紀後半があてられる。また、この「廿」と同一筆跡の須恵器墨書坏が16－42・44・45・47である。同様に赤焼土器坏では第18図－88、内黒土師器坏は第14図－11があげられる。これらは灰釉陶器碗15－１・２の黒笹90号窯式第２～３段階に対応する土器群である。

(b) F－9グリッド捨て場出土遺物(第26～32図)

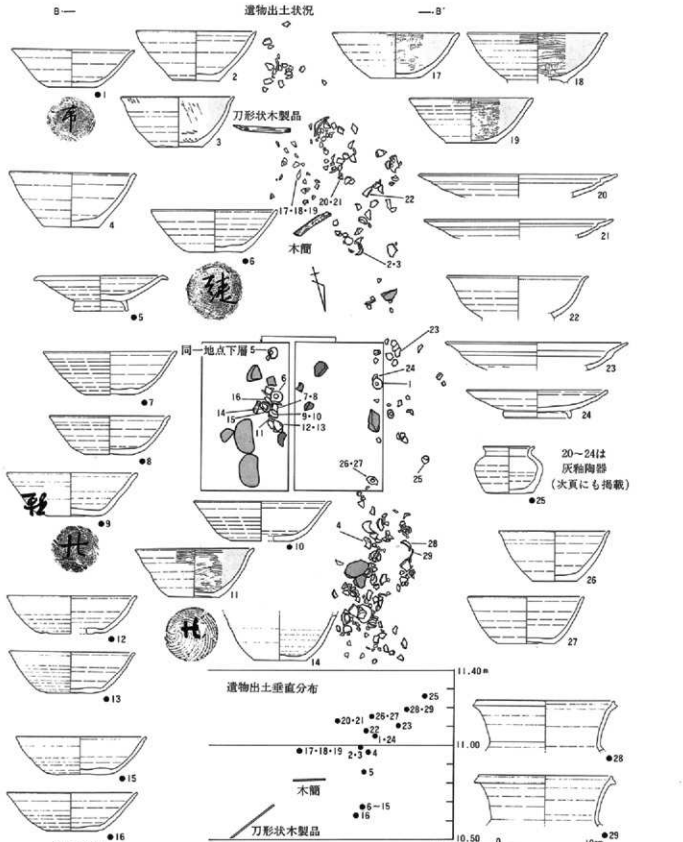
実測図以外の出土土器破片の種別毎の比率は須恵器3.2%・赤焼土器91.2%・土師器5.6%である。底層からはヘラ切り須恵器坏も出土した。赤焼土器坏では比較的底径の大きいものが多く、D－７よりは年代的に古いと考えられる。他に斎串の出土点数が多く、水辺で祭祀が行われたことを窺わせる。また、皇朝十二銭の一つ「隆平永宝」が中層から１点出土している。

(c) D－7グリッド捨て場出土遺物(第33～37図)

実測図以外の土器破片の種別毎の比率は須恵器2.4%・赤焼土器90.5%・土師器4.9%となる。須恵器坏の出土が極端に少なく、赤焼土器坏が支配的である。然も底径が小さく、歪みの目立つものが多く、３地点のなかで年代的には最も新しいと想定される。また、周辺部には規模の大きい南北棟建物が多く確認されているにもかかわらず、遺物の出土量や検合の割合が低いことから同時期に属する別の捨て場の存在も考えられる。

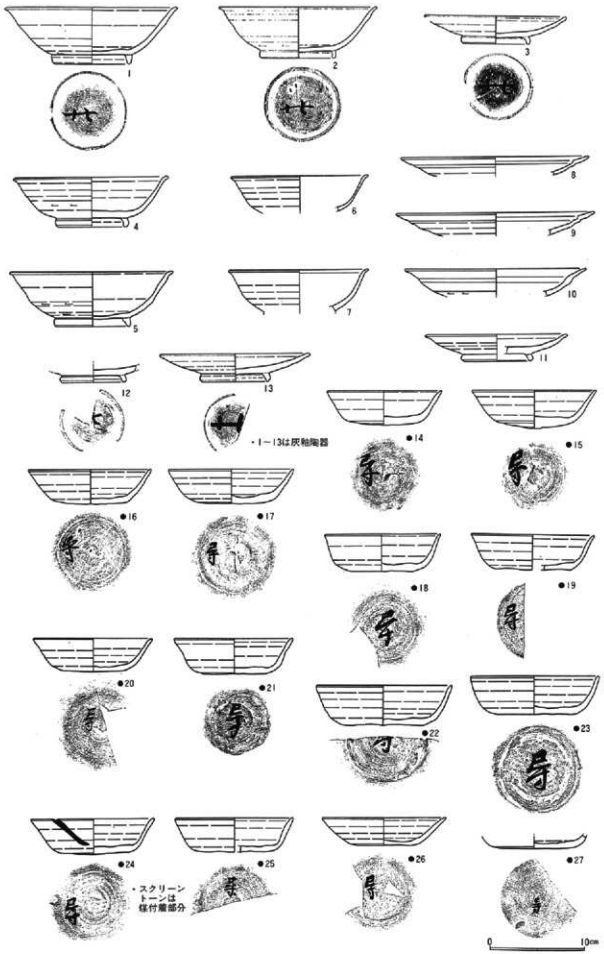


第13図　ＳＧ１河川跡土層断面図

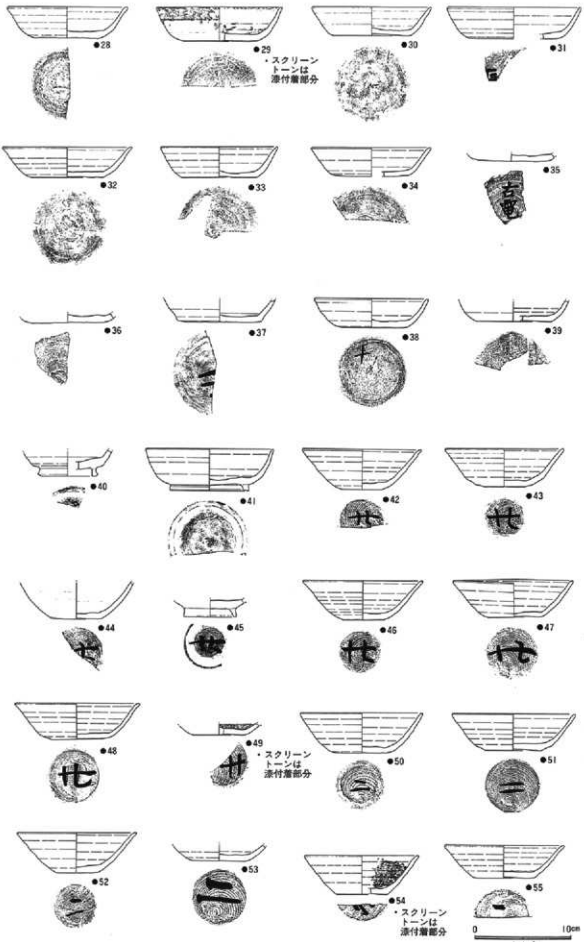


河川跡F−4G捨て場土層注記（B−B'）
1−10YR 3/4 暗褐色シルト
2−10YR 4/4 褐色シルト（2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色火山灰含む）
3−5Y 2/1, 7/1 黒色粘質土
4−10YR 3/1 黒褐色粘質シルト（炭化・炭化物ブロック含む）
5−10YR 3/1 黒褐色粘質シルト（炭化・炭化物ブロック含む）
6−10YR 2/1 黒色砂質シルト（炭化含む・炭化物ブロック・土器、木製品多く含む・10YR 6/1 褐灰色火山灰含む）
7−10YR 4/1 褐灰色砂質シルト（炭化物ブロック含む）
8−N 3 暗灰色細砂
9−10YR 4/1 褐灰色シルト（炭化含む）
10−10YR 5/1 褐灰色砂質シルト（炭化物ブロック少し含む・10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト混状に混じる）
遺物包含層
G,6に多量に土器含む）
遺物包含層

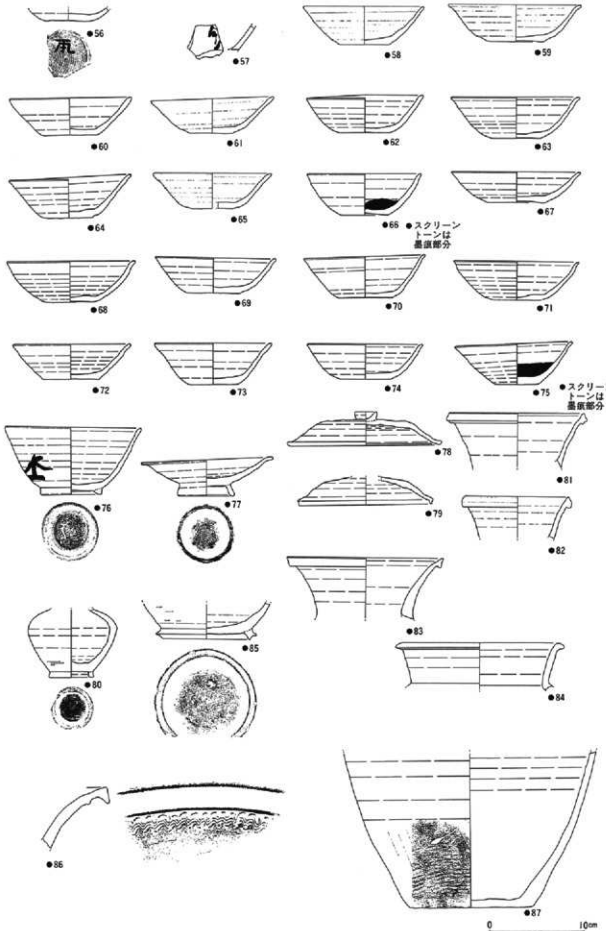
第14図　SG1河川跡F−4グリッド捨て場出土遺物(1)



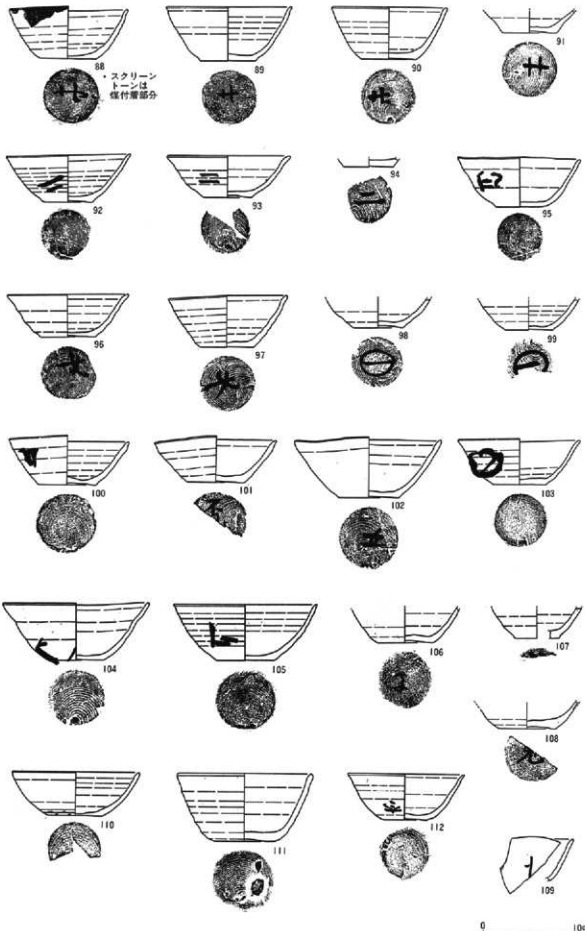
第15図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(2)



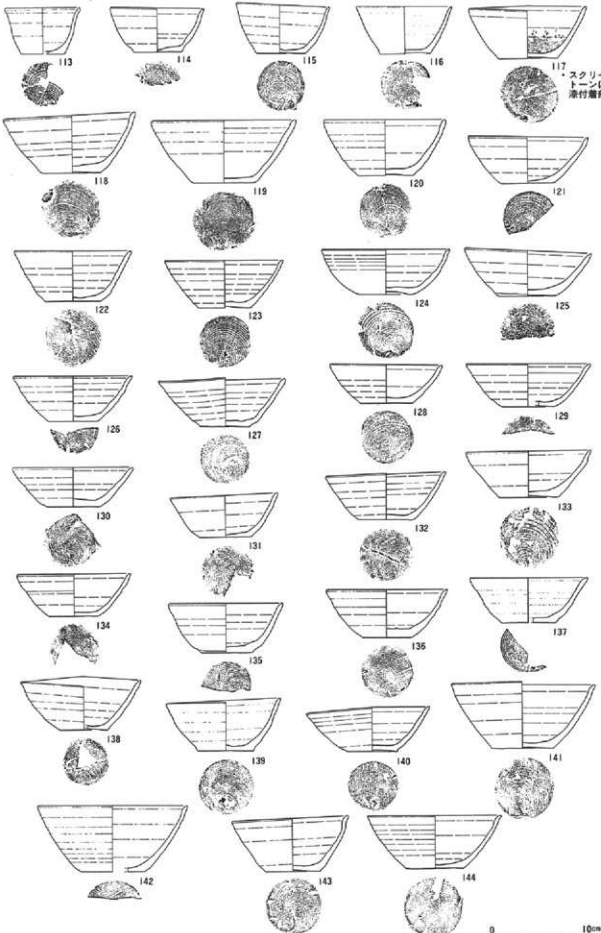
第16図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場
出土遺物(3)



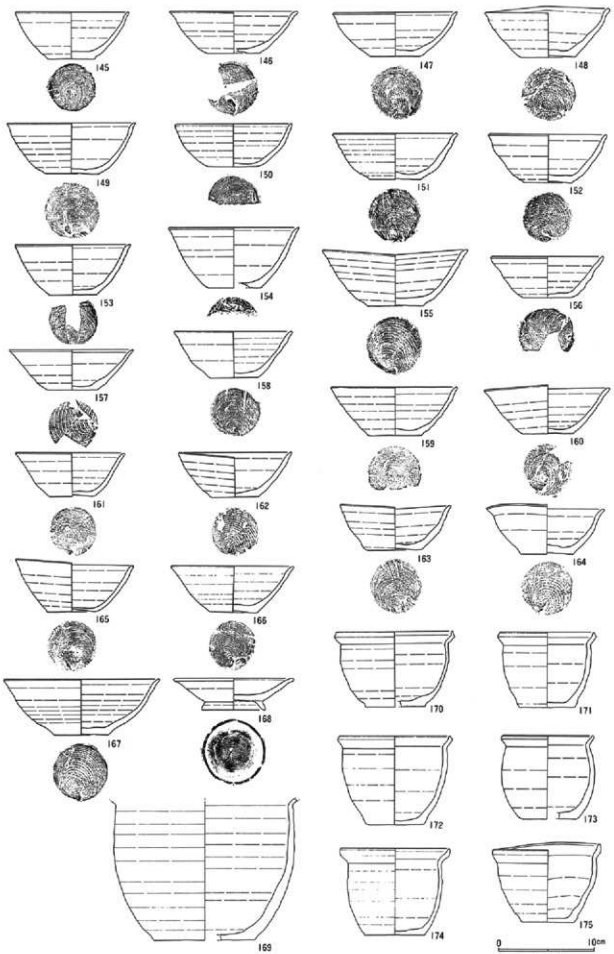
第17図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場
出土遺物(4)



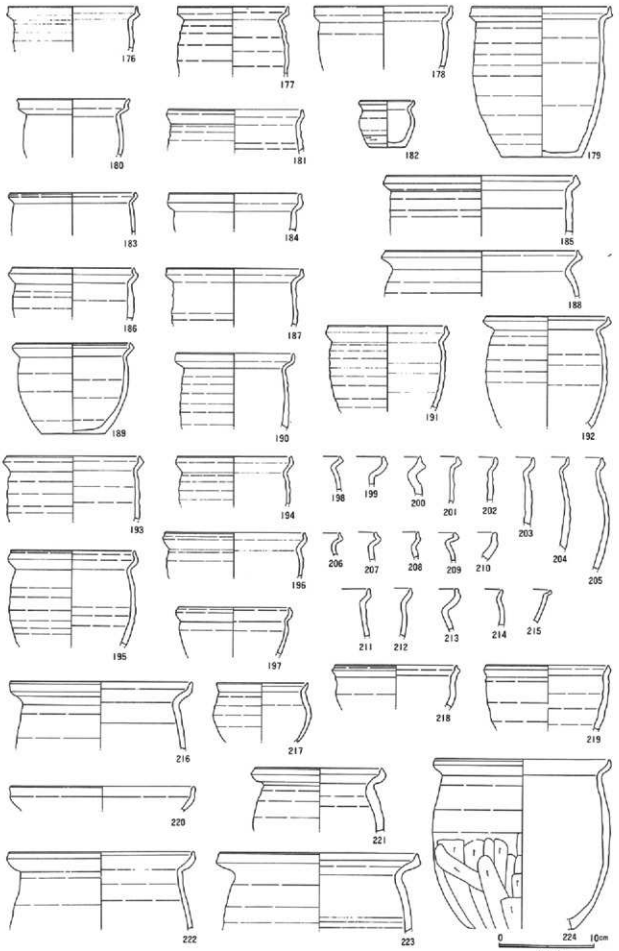
第18図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(5)



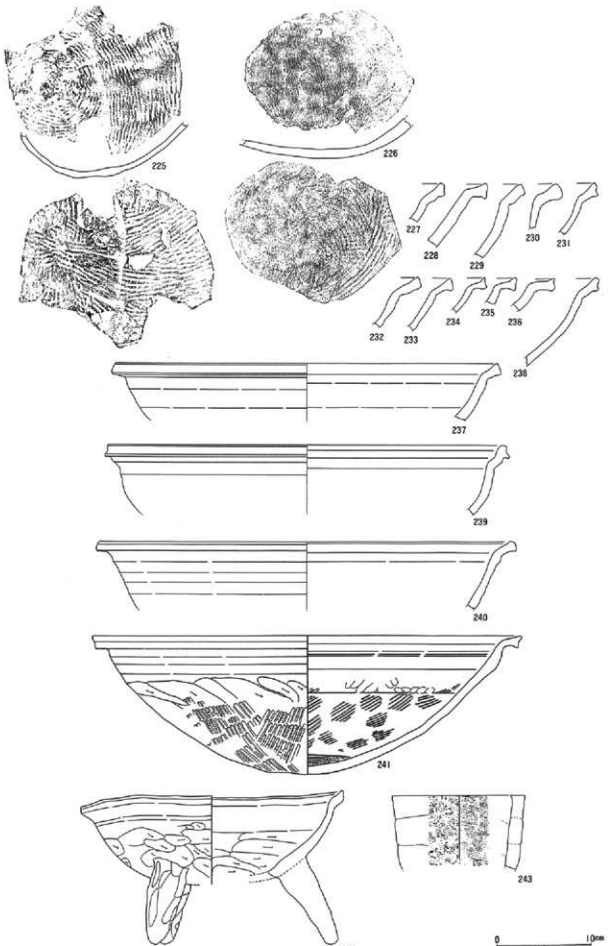
第19図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(6)



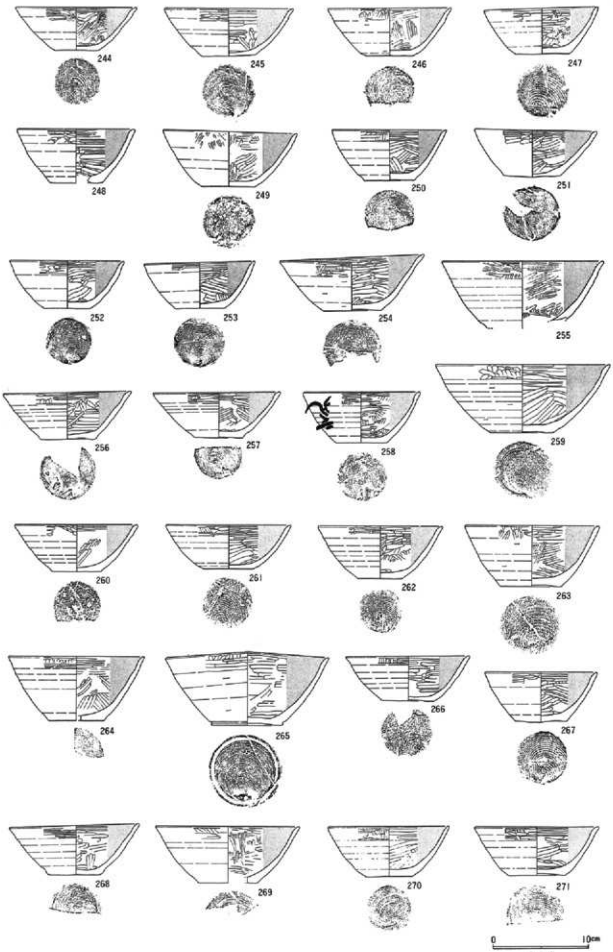
第20図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(7)



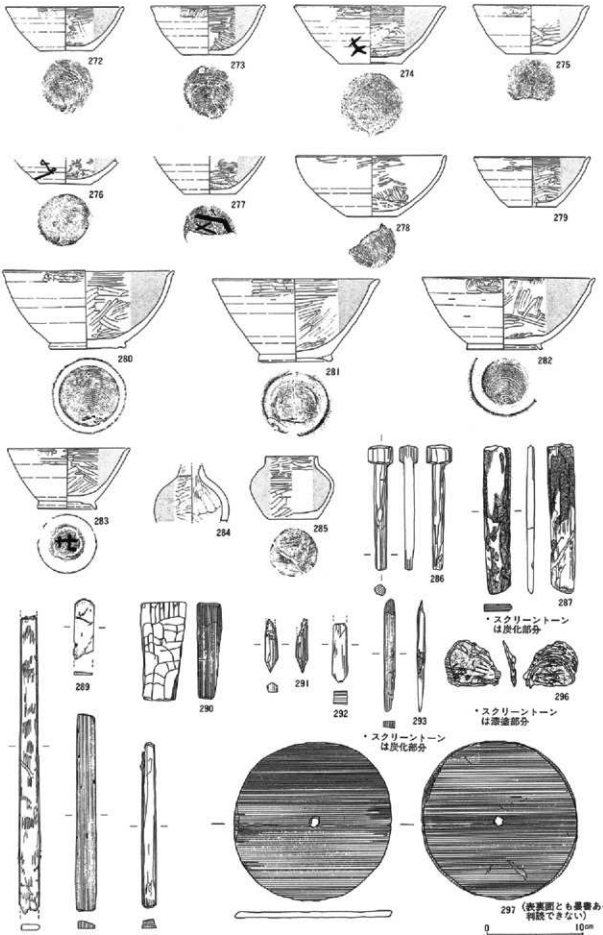
第21図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(8)



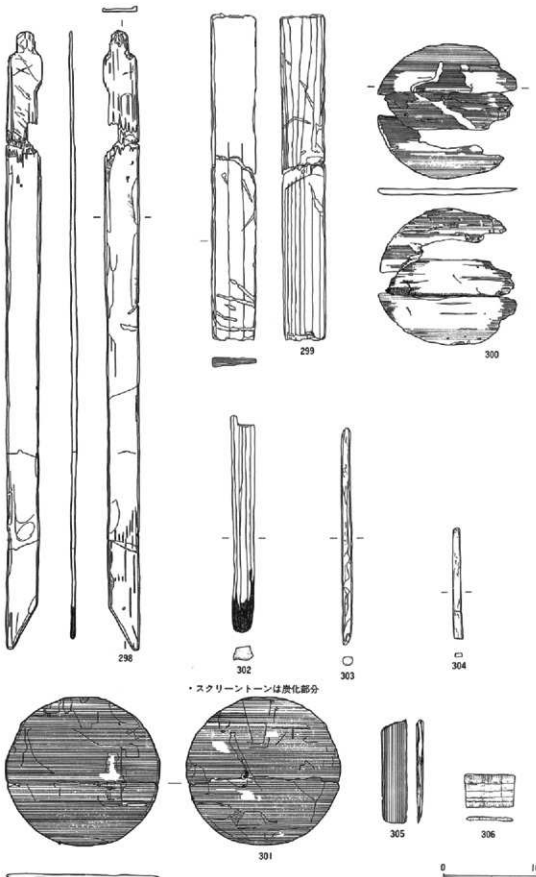
第22図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(9)



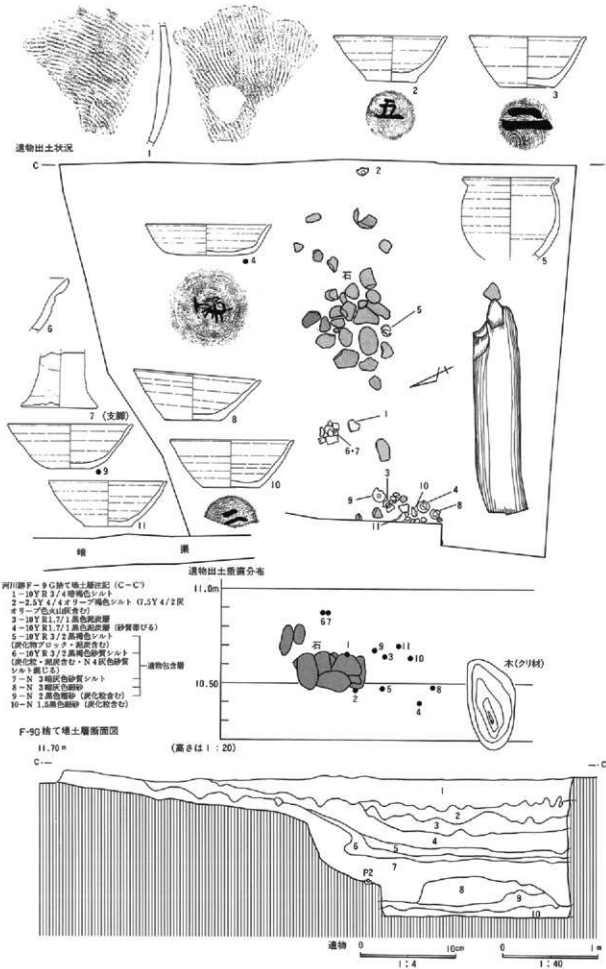
第23図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場
出土遺物(1)



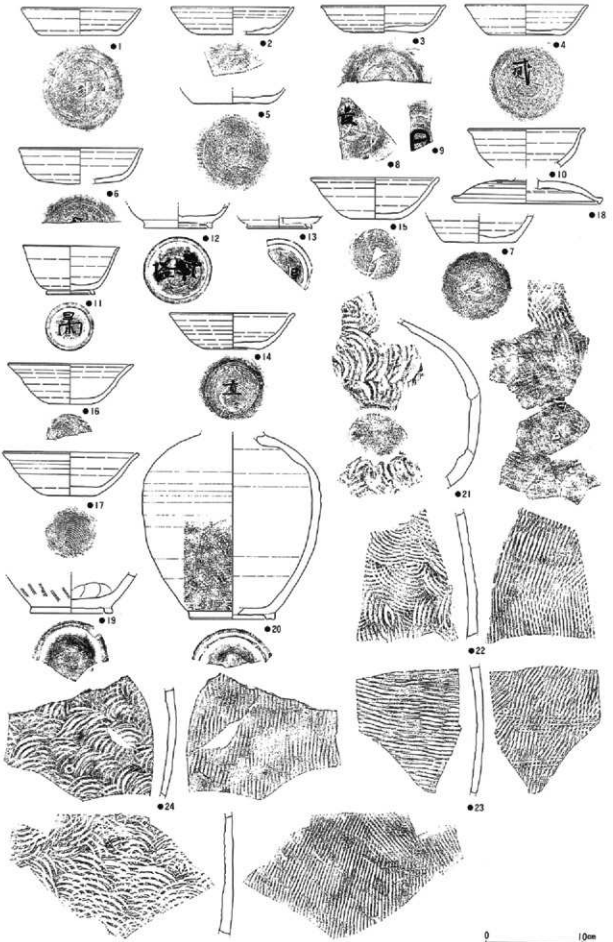
第24図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場出土遺物(1)



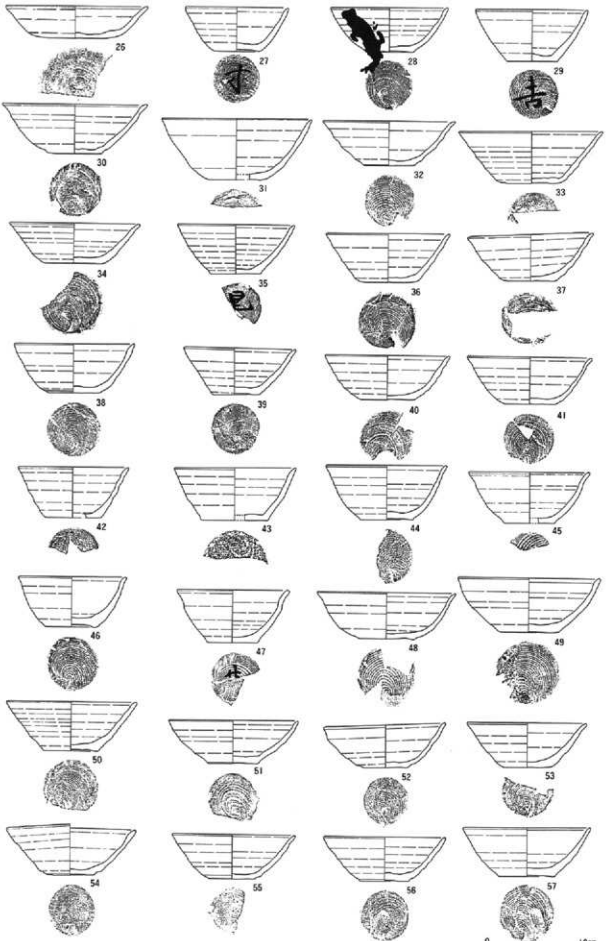
第25図　ＳＧ１河川跡Ｆ－４グリッド捨て場
出土遺物(12)



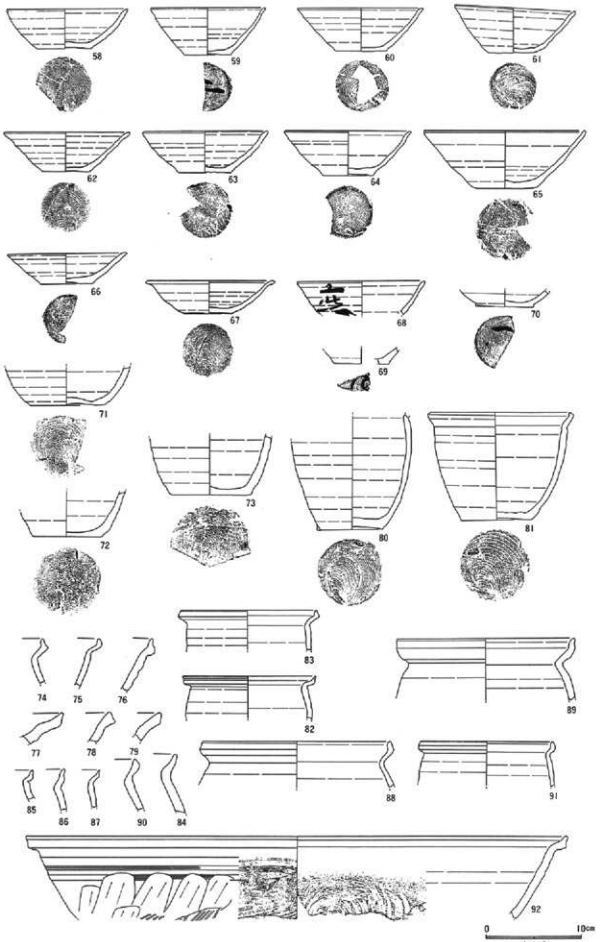
第26図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場出土遺物(1)



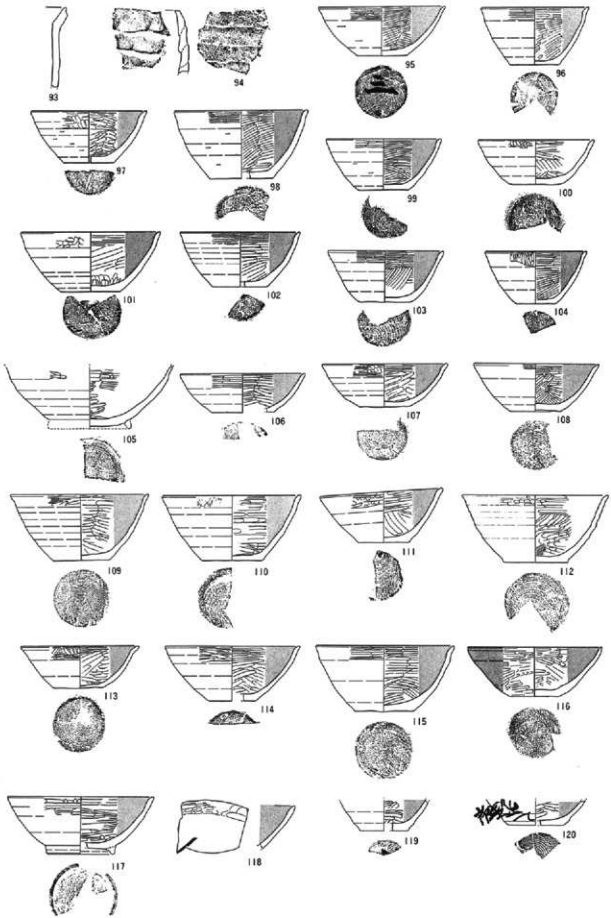
第27図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場
出土遺物(2)



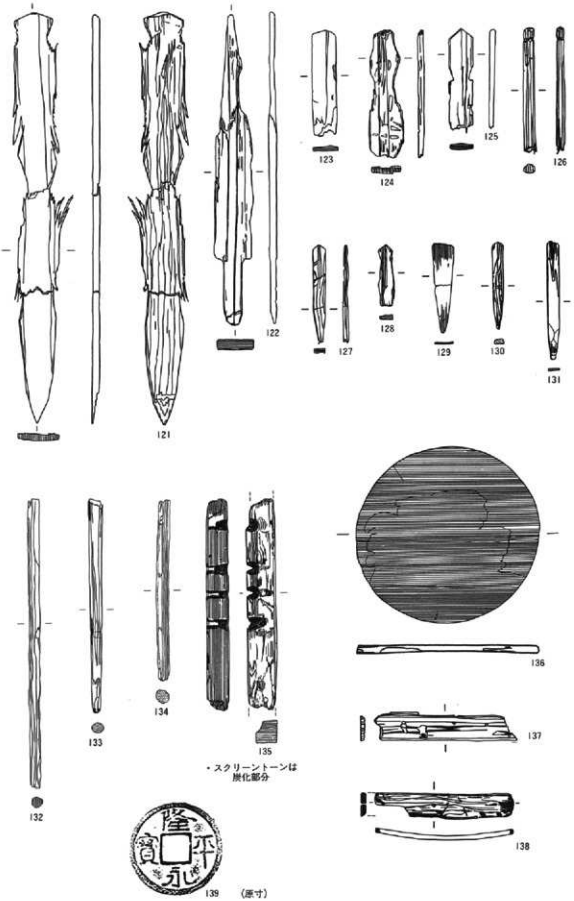
第28図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場
出土遺物(3)



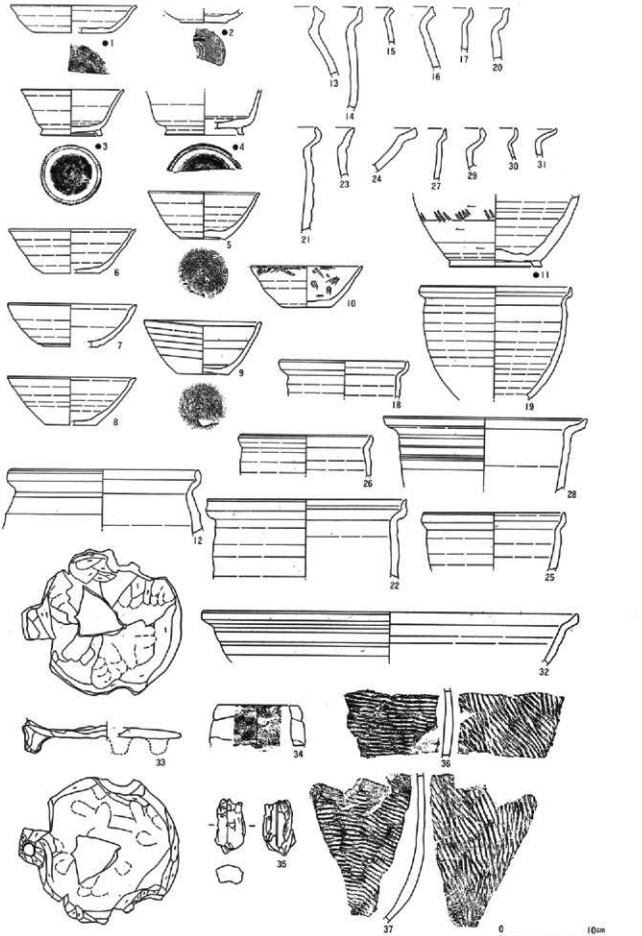
第29図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場
出土遺物(4)



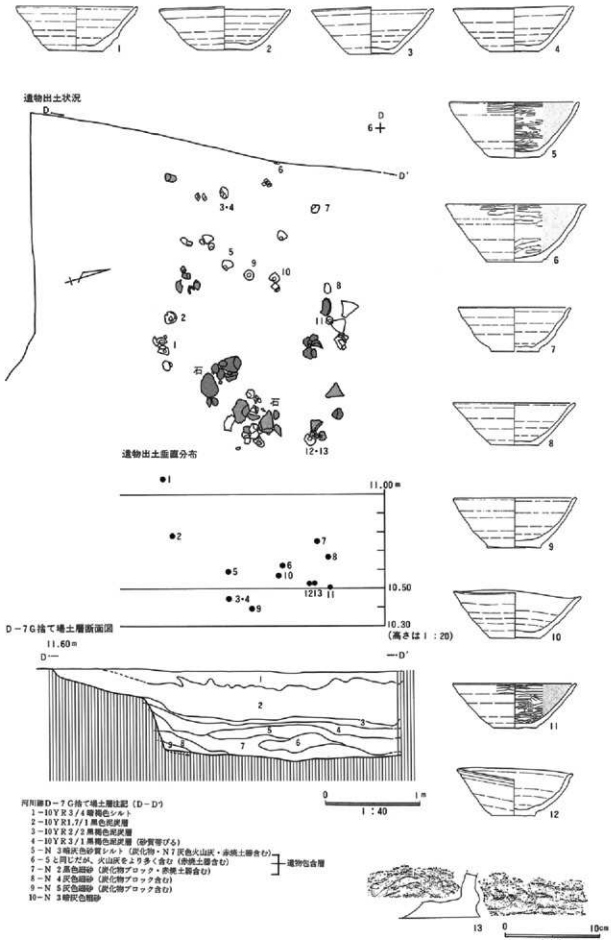
第30図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場
出土遺物(5)



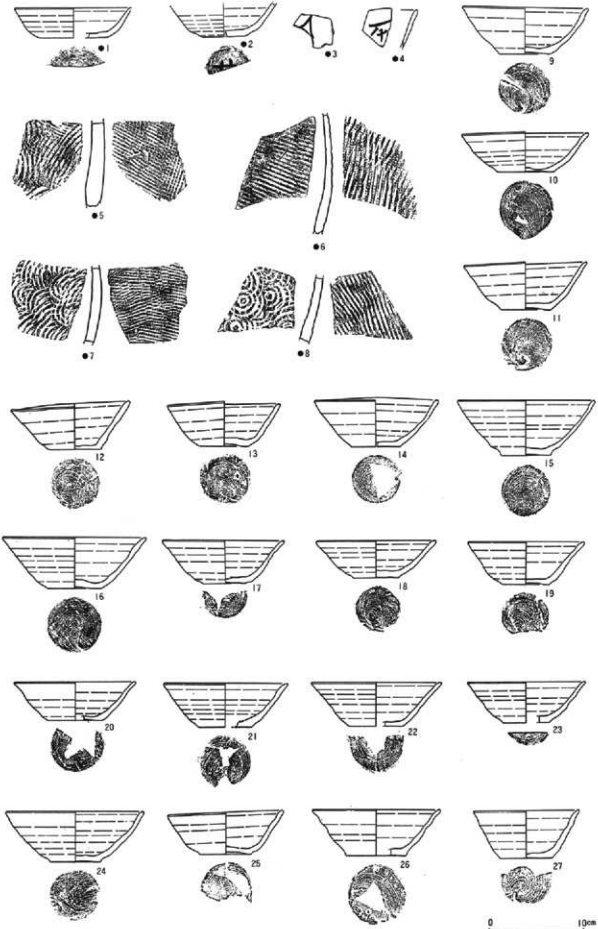
第31図　ＳＧ１河川跡Ｆ－９グリッド捨て場
出土遺物(6)



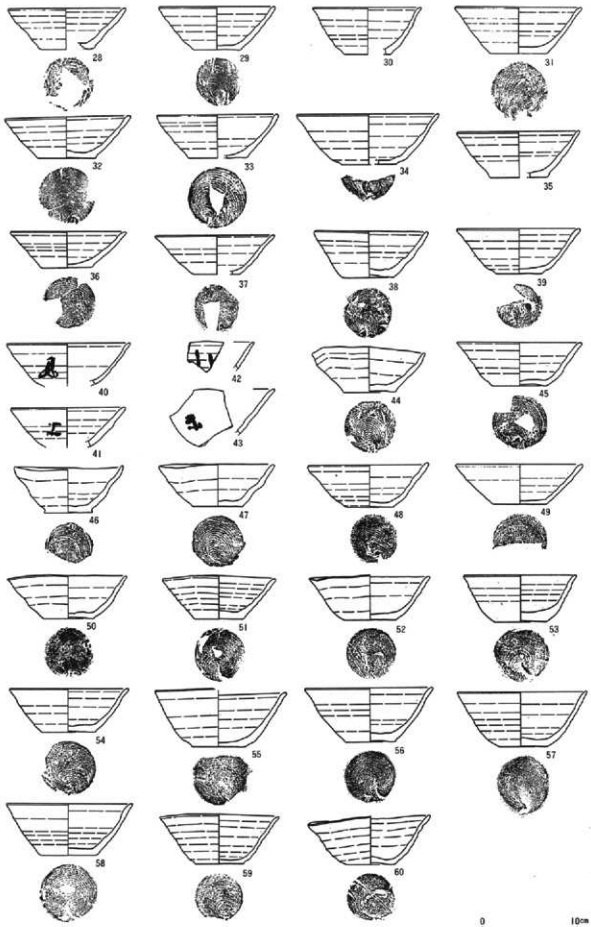
第32図　ＳＧ１河川跡Ｆ－11グリッド捨て場出土遺物



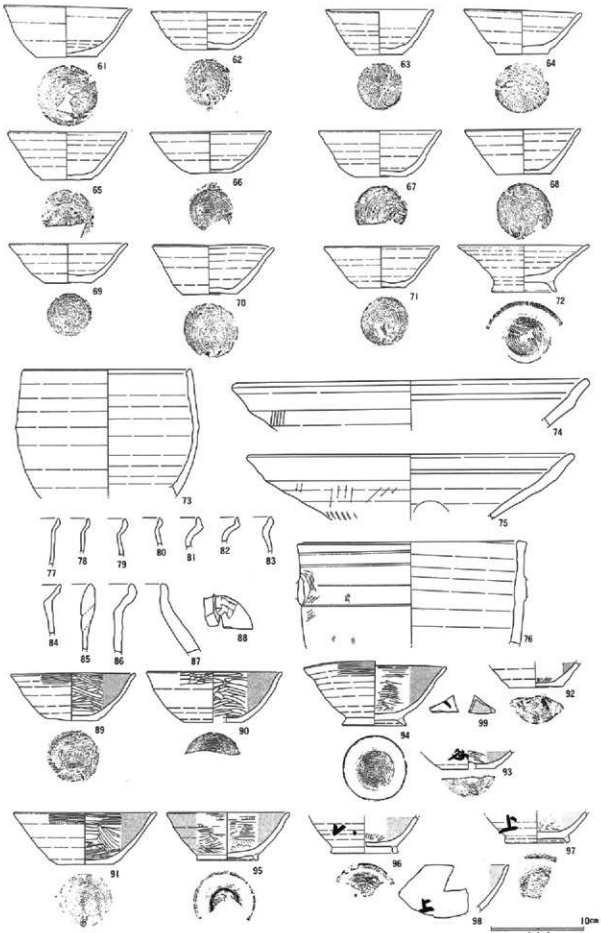
第33図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場出土遺物(1)



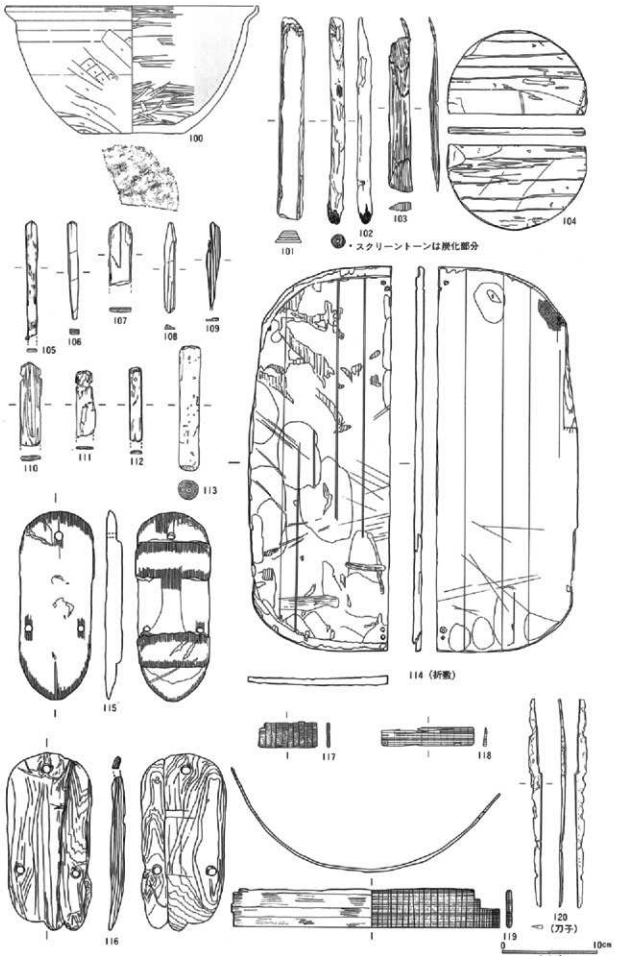
第34図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場出土遺物(2)



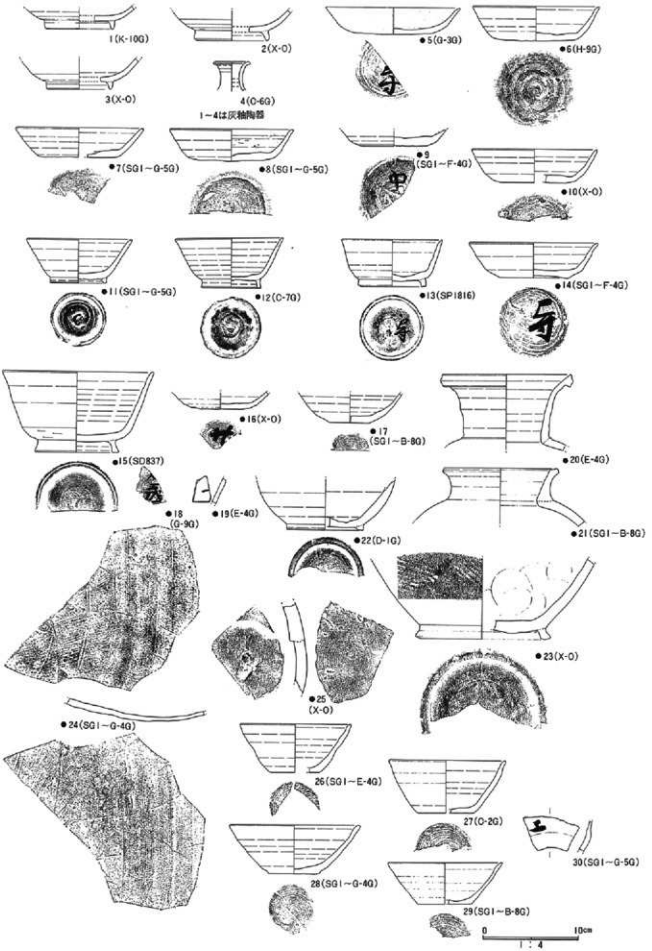
第35図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場
出土遺物(3)



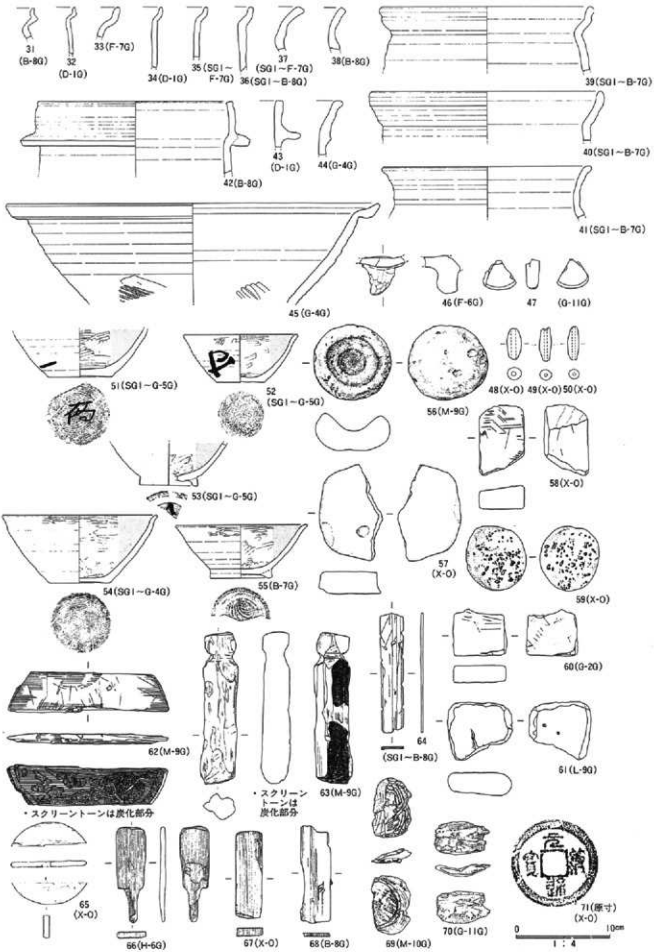
第36図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場出土遺物(4)



第37図　ＳＧ１河川跡Ｄ－７グリッド捨て場
出土遺物(5)



第38図　グリッド内出土遺物(1)



第39図　グリッド内出土遺物(2)

表－3　遺物観察表(1)

挿図番号	遺物番号	種別・器種		計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	口径/底径※	底部切離	調整・成形 内面	調整・成形 外面	出土地点	備考
5	1	赤焼土器	坏	132	58	44	3	44	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SP550	
	2		〃	135	53	49	3	39	〃	〃	〃	〃	口縁煤
6	1	灰釉陶器	耳皿									SP120	
7	1	須恵器	壺	(177)			7		回転糸切り	アテ	ロクロ・ケズリ	EB1257	外面煤
	2	〃	坏	128	55	42	4	43	〃	ロクロ	ロクロ	EB1312	
	3	〃	〃	132	54	41	4.5	41	〃	〃	〃	〃	
	4	焼	壺	(283)			11			アテ	ロクロ・ケズリ	〃	内面煤
	5		坏	125	55	42.5	5	44	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	EB75	
	6	土	〃	122	54	44	5	44	〃	〃	〃	〃	
	7		〃	125	58	43.5	5	46	〃	〃	〃	〃	
	8	器	〃	121	58	44	4	48	〃	〃	〃	〃	
	9		〃	133	50	44	3.5	38	〃	〃	〃	〃	
9	1	赤焼土器	坏	106	52	48.5	4	49	〃	〃	〃	SK6F3	
	2	土師器(内黒)	蓋	59		35	3.5			ミガキ	〃	〃	
	3	赤焼土器	坏	132	58	44.5	4	44	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	〃	
	5	須恵器	坏	134	86	34	4	64	ヘラ切り	〃	〃	SK25F2	口縁片口状 煤
	6	赤	〃	(132)	(55)	49	3.5	42	回転糸切り	〃	〃	SK32F3	
	7	焼	〃	(150)	(66)	41.5	4	44	〃	〃	〃	〃 F1	
	8	土	〃	(128)	56	47	4.5	44	〃	〃	〃	〃 F3	
	9	器	〃	132			4.5		〃	〃	〃	〃 F1	
	10	土師器(内黒)	坏	129	56	51	4	43	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	SK37F1	
10	2	土師器(内黒)	高台付坏	144	60	58	4	42	〃	ミガキ	ミガキ	SX874	
	3	赤焼土器	坏	108	56	56.5	4.5	52	〃	ロクロ	ロクロ	SX354F1	
	4	土師器(内黒)	高台付坏	134	45	50	4.5	34	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	SK176F2	
	5	赤焼土器	坏		68		5		〃	ロクロ	ロクロ	〃	墨書
11	2	須恵器	坏	130	46	45.5	4	35	〃	〃	〃	SK72F2	体部に墨書「甘」
12	1	須恵器	坏	130			4			〃	〃	SD1167	
	2		〃	136	80	32	4	59	ヘラ切り	〃	〃	〃	
	3		〃	132	60	29.5	4	45	回転糸切り	〃	〃	〃	
	5		〃	136			4			〃	〃	〃	
	6		〃		66		4.5		ヘラ切り	〃	〃	〃	転用硯
	8	赤	甕	192			5			〃	〃	〃	煤
	9	焼	〃	126			4			〃	〃	〃	煤
	11	土	〃	259			8			〃	〃	〃	煤
	12	器	坏		(50)		4.5		回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SD100	墨書
	16		坏	(162)			5			ミガキ	口唇部ミガキ	〃	
	22	土師器(内黒)	高台付坏		58		4		回転糸切り	〃	〃	〃	擬似高台
	23		坏		57		4.5		〃	〃	〃	〃	
	24	赤焼土器	坏	130	(56)	45	4.5	43	〃	ロクロ	ロクロ	〃	
	25	土師器(内黒)	高台付坏	(118)	48	34.5	4	41	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	〃	
	26	須恵器	壺		110		10.5			アテ・ハケメ	タタキ	〃	
	27	赤焼土器	坏	140	60	48.5	3.5	43	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	〃	
	30		甕	133	59	92	6		〃	〃	〃	〃	
14	1	須恵器	坏	130	50	40	3.5	38	〃	〃	〃	SG1~F-4G上	墨書 口縁煤
	2	赤焼土器	〃	127	50	53	4.5	39	〃	〃	〃	〃 上	
	3	土師器(内黒)	〃	120	52	53	4.5	43	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	〃 上	
	4	赤焼土器	〃	134	59	58	5	44	〃	ロクロ	ロクロ	〃 上	
	5		高台付皿	130	57	37.5	5	44	〃	〃	〃	〃 上	
	6	須	坏	133	58	45	4	44	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	7	恵	〃	140	50	46	3	36	〃	〃	〃	〃 底	
	8	器	〃	127	50	41	4	39	〃	〃	〃	〃 底	
	9		〃	139	50	46.5	5	36	〃	〃	〃	〃 底	底部体部に墨書
	10		〃	174	(57)	42	3.5	33	〃	〃	〃	〃 底	
	11	土師器(内黒)	〃	126	56	53	3.5	44	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	〃 底	墨書
	12	須恵器	〃	138	(48)	34	4.5	35	〃	ロクロ	ロクロ	〃 底	
	13		〃	132	47	44	3.5	36	〃	〃	〃	〃 底	
	14	赤焼土器	〃		53		4.5		〃	〃	〃	〃 底	
	15	須恵器	〃	138	54	40	4	39	〃	〃	〃	〃 底	
	16		〃	138	54	41	3.5	39	〃	〃	〃	〃 底	
	17		〃	134	56	48.5	5	42	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	〃 上	
	18	土師器(内黒)	高台付坏	148	58		4		〃	〃	〃	〃 上	
	19		坏	130	52	47.5	4	40	〃	〃	〃	〃 上	
	25	須恵器	小壺	53	49	51	6		ケズリ	ロクロ	ケズリ	〃 上	
	26	赤焼土器	坏	118	48	53	5	41	回転糸切り	〃	ロクロ	〃 上	
	27		〃	123	60	50	3.5	49	〃	〃	〃	〃 上	

※口径に占める底径の割合を示す。$\frac{\text{口径}}{\text{底径}} \times 100$

表－4　遺物観察表(2)

挿図番号	遺物番号	種別・器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	口径 底径	底部切離	調整・成形 内面	外面	出土地点	備考
14	28	須恵器 短頸壺	(148)			4			ロクロ	ロクロ	SG1～F-4G上	
	29	短頸壺	(142)			3.5			〃	〃	〃 上	
15	1	灰釉陶器 鉢	182	82	60.5	5	45	回転糸切り	ロクロ	ロクロ→ケズリ	〃 中	墨書
	2	〃	170	89	55	4.5	47	〃	〃	〃	〃	墨書
	3	皿	151	72	30	4	48	〃	〃	〃	〃	墨書
	4	鉢	168	70	53	4.5	42	〃	〃	〃	〃 中・底	
	5	〃	176	81	58.5	4.5	46	〃	〃	〃	〃 上	
	6	〃	(148)			3			〃	〃	〃 中	
	7	〃	(150)	(76)		4	51	〃	〃	〃	SG1～G-5G上	
	8	段皿	(200)			3.5			〃	〃	SG1～F-4G上	
	9	〃	(212)						〃	〃	〃 上	
	10	〃	(194)						〃	〃	〃 上	
	11	皿	(152)	(72)	29	5		回転糸切り	〃	〃	〃 上	
	12	鉢		68				〃	〃	〃	〃 中	墨書
	13	皿	(158)	(68)				〃	〃	〃	〃 上	墨書
	14	須恵器 坏	124	80	37	4.5	65	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	〃 底	墨書 口縁火ハネ
	15	〃	134	75	41	4	56	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	16	〃	132	85	37	4	64	〃	〃	〃	〃 中・底	墨書
	17	〃	132	88	37	5	67	〃	〃	〃	〃 底	墨書 口縁煤
	18	〃	124	72	40	4	58	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	19	〃	132	84	38	4	64	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	20	〃	(127)	70	34	4	58	〃	〃	〃	〃 中・底	墨書
	21	〃	126	74	38	4	59	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	22	〃	144	88	43	4.5	61	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	23	〃	140	92	41	4.5	66	〃	〃	〃	〃 底	墨書 線刻(大)
	24	〃	132	83	38	4	63	〃	〃	〃	〃 底	墨書 口縁煤
	25	〃	126	80	36.5	5	63	〃	〃	〃	〃 底	墨書 口縁煤
	26	〃	133	75	30	4.5	56	〃	〃	〃	〃 底	墨書 口縁煤
	27	〃		75					〃	〃	〃 中	墨書
16	28	須恵器 坏	128	70	33	4	55	〃	〃	〃	〃 底	墨痕
	29	〃	133	70	36	4	53	〃	〃	〃	〃 底	漆付着
	30	〃	138	72	32	4	52	〃	〃	〃	〃 中・底	
	31	〃	(140)	(100)	33.5	4	71	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	32	〃	126	76	30	5	60	〃	〃	〃	〃 底	
	33	〃	124	82	32.5	4.5	66	〃	〃	〃	〃 中・底	
	34	〃		73	30	4	58	〃	〃	〃	〃 中	底部煤
	35	〃		82				〃	〃	〃	X-O	墨書
	36	〃		(80)				〃	〃	〃	X-O	墨痕
	37	〃		90		4.5		〃	〃	〃	SG1～F-4G底	墨痕 煤痕
	38	〃	120	70	31	4.5	58	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	39	〃		79					〃	〃	〃 中・底	
	40	高台付坏		(60)					〃	〃	〃	墨書
	41	〃	(135)	85	44.5	4.5	63	〃	〃	〃	〃 底	
	42	〃	126	45	43	4	36	回転糸切り	〃	〃	〃	墨書
	43	〃	125	41	40	4	33	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	44	〃		56		3.5		〃	〃	〃	〃	墨書
	45	高台付坏		54				〃	〃	〃	〃 底	墨書 転用硯
	46	〃	126	43	41.5	4	34	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	47	〃	124	54	40.5	4	44	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	48	〃	132	53	39.5	3.5	40	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	49	〃		54		5		〃	〃	〃	〃	墨書 転用硯
	50	〃	128	40	43	4.5	31	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	51	〃	129	56	39	3.5	43	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	52	〃	(126)	45	43	4	36	〃	〃	〃	〃 中	墨書 文字不明
	53	〃		58		4		〃	〃	〃	〃 中	墨書
	54	〃	(120)	(54)	41	3.5	45	〃	〃	〃	〃	墨書 内面に漆付着
	55	〃	(125)	55	34.5	3.5	44	〃	〃	〃	〃 上	墨書
17	56	須恵器 坏		50		4.5		〃	〃	〃	〃 中	墨書
	57	〃				4.5			〃	〃	〃	体部に墨書
	58	〃	126	52	41	4	41	〃	〃	〃	〃 中・底	口縁煤
	59	〃	(139)	57	40	4	41	〃	〃	〃	〃 中	
	60	〃	128	56	39.5	4.5	44	〃	〃	〃	〃 中	
	61	〃	130	45	39.5	3.5	35	〃	〃	〃	〃 底	転用硯
	62	〃	123	54	40.5	4.5	44	〃	〃	〃	〃 上中	
	63	〃	136	52	43	3.5	38	〃	〃	〃	〃 中	

表－5　遺物観察表(3)

掲図番号	遺物番号	種別・器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	口径底径	底部切離	調整・成形 内面	外面	出土地点	備考
	64	坏	129	47	46	3.5	36	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SG1~F-4G中	
	65	〃	125	46	38	4	37	〃	〃	〃	〃	
	66	〃	120	49	44	4.5	41	〃	〃	〃	〃 中	転用硯
	67	〃	135	60	32.5	5.5	44	〃	〃	〃	〃 底	口縁煤
	68	〃	135	47	43.5	4.5	35	〃	〃	〃	〃 中	
	69	〃	129	55	38	4	43	〃	〃	〃	〃 底	転用硯
	70	〃	129	55	46	3.5	43	〃	〃	〃	〃 中	
	71	〃	132	49	41	3.5	37	〃	〃	〃	〃 中・底	
	72	〃	124	60	37	4	48	〃	〃	〃	〃 中・底	
17	73	〃	126	50	43	3.5	40	〃	〃	〃	〃 中	
	74	〃	121	54	37.5	4	45	〃	〃	〃	〃 底	
	75	〃	123	42	45.5	3.5	34	〃	〃	〃	〃 中	転用硯
	76	高台付坏	144	62	73	3.5	43	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	77	皿	141	56	42	5		〃	〃	〃	〃 中	高台付
	78	蓋	163		34	4.5		天井部ヘラ	〃	ケズリ	〃 中	
	79	〃	140			6		〃	〃	〃	〃 底	
	80	甕		48		5.5		ヘラ切り	〃	〃	〃 中	
	85	〃		93		7		〃	〃	〃	〃 上	
	87	鉢		130		8			アテ・カキメ	タタキ・ケズリ	〃 中	
	88	坏	126	57	52.5	5	45	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	〃 中・底	墨書 口縁煤
	89	〃	133	58	48	3.5	43	〃	〃	〃	〃 中・底	墨書
	90	〃	122	58	56	4.5	48	〃	〃	〃	〃 中・底	墨書
	91	〃		59		3		〃	〃	〃	〃 中	墨書
	92	〃	132	50	50.5	4	38	〃	〃	〃	〃 中・底	体部に墨書
	93	〃	(129)	50	44.5	4	39	〃	〃	〃	〃 上・中	体部に墨書
	94	〃		54				〃	〃	〃	〃 底	墨書
	95	〃	131	50	52	4	38	〃	〃	〃	〃 中・底	体部に墨書
	96	〃	128	57	45.5	4	45	〃	〃	〃	〃 中	墨書ヵ転用硯
	97	〃	126	57	53.5	4	45	〃	〃	〃	〃 中・底	墨書
	98	〃		54		4		〃	〃	〃	〃 底	墨書
	99	〃		53		4.5		〃	〃	〃	〃 上・底	墨書
18	100	〃	127	61	50	5	48	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	101	〃	128	60	48	4	47	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	102	〃	158	65	63	5	41	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	103	〃	131	56	49	3.5	43	〃	〃	〃	〃 上・底	体部に墨書
	104	〃	156	59	61	4	38	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	105	〃	153	60	60	4.5	39	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	106	〃		60		4		〃	〃	〃	〃 中	墨書 文字不明
	107	〃		(46)		5		〃	〃	〃	〃 中	墨書 文字不明
	108	〃		62		5		〃	〃	〃	〃 中	墨書
	109	〃				4		〃	〃	〃	〃	墨書
	110	〃	136	56	47	4	41	〃	〃	〃	〃 中	内面黒・外面煤
	111	〃	(144)	62	72.5	5	43	〃	〃	〃	〃 上・中	
	112	〃	124	50	49.5	4	40	〃	〃	〃	〃 上	体部に墨書
	113	坏	(78)	47	49.5	4	60				〃 中	口縁煤
	114	〃	98	51	47	4	52	〃	〃	〃	〃	口縁煤
	115	〃	98	51	51.5	4	52	〃	〃	〃	〃 中	
	116	〃	99	52	50.5	3.5	53	〃	〃	〃	〃 中	
	117	〃	124	62	56	4	50	〃	〃	〃	〃 中・底	漆付着
	118	〃	138	61	61	5	44	〃	〃	〃	〃 中	
	119	〃	(153)	64	66.5	5	42	〃	〃	〃	〃 中	
	120	〃	128	57	49.5	5	45	〃	〃	〃	〃 中	外面火ハネ
	121	〃	126	57	49	5	45	〃	〃	〃	〃 中	
	122	〃	124	58	54	4.5	47	〃	〃	〃	〃 中	
19	123	〃	124	55	50.5	3.5	44	〃	〃	〃	〃 中	
	124	〃	136	56	48	4	41	〃	〃	〃	〃 上・中	
	125	〃	134	58	48	6	43	〃	〃	〃	〃	口縁煤
	126	〃	125	53	48	4	42	〃	〃	〃	〃 中	
	127	〃	134	51	52	4.5	38	〃	〃	〃	〃 中	
	128	〃	117	55	41	4.5	47	〃	〃	〃	〃 中	
	129	〃	131	55	46	4	42	〃	〃	〃	〃 底	
	130	〃	128	60	42	5.5	47	〃	〃	〃	〃 中	
	131	〃	114	54	44.5	4.5	47	〃	〃	〃	〃 中	内面煤
	132	〃	125	57	48.5	4.5	46	〃	〃	〃	〃 中	
	133	〃	135	64	49	4	47	〃	〃	〃	〃	

表－6　遺物観察表(4)

挿図番号	遺物番号	種別・器種		計測値(cm) 口径	底径	器高	器厚	口径 底径	底部切離	調整・成形 内面	外面	出土地点	備考
19	134	赤焼土器	坏	120	53	45	4	44	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SG1～F-4G中	
	135		〃	121	54	53	6	45	〃	〃	〃	〃 中	
	136		〃	(128)	54	51	5	42	〃	〃	〃	〃 中	
	137		〃	122	56	48	4	46	〃	〃	〃	〃 上	内外面煤
	138		〃	127	50	54	5	39	〃	〃	〃	〃 上・中	
	139		〃	120	58	53.5	4	48	〃	〃	〃	〃	
	140		〃	130	51	44.5	4.5	39	〃	〃	〃	〃 底	
	141		〃	150	64	69	5	43	〃	〃	〃	〃 中	
	142		〃	158	(68)	70	4	43	〃	〃	〃	〃 中	
	143		〃	123	58	56	4	47	〃	〃	〃	〃 中	
	144		〃	142	61	56	4	43	〃	〃	〃	〃 上・中・底	
20	145	赤焼土器	坏	120	50	50	4	42	〃	〃	〃	〃 底	
	146		〃	135	55	45	4	41	〃	〃	〃	〃 中・底	口縁煤
	147		〃	132	55	47	4	42	〃	〃	〃	〃	
	148		〃	130	55	51	5.5	42	〃	〃	〃	〃 中	
	149		〃	136	58	54.5	4	43	〃	〃	〃	〃 中	
	150		〃	(124)	54	46	4	44	〃	〃	〃	〃 上	
	151		〃	132	54	49	5	41	〃	〃	〃	〃 上	
	152		〃	124	51	52	5	41	〃	〃	〃	〃 上	内外面煤
	153		〃	122	52	54	5	43	〃	〃	〃	〃 上	
	154		〃	138	(60)	64	5	43	〃	〃	〃	〃 中	
	155		〃	153	58	58	5.5	38	〃	〃	〃	〃 中	
	156		〃	(118)	54	44	5	46	〃	〃	〃	X-0	
	157		〃	132	53	43	4	40	〃	〃	〃	SG1～F-4G上	
	158		〃	124	51	49.5	4	41	〃	〃	〃	〃 上・底	口縁煤
	159		〃	134	56	51	3.5	42	〃	〃	〃	〃 中・底	
	160		〃	131	52	49.5	4	40	〃	〃	〃	〃 中	
	161		〃	117	49	46	3.5	42	〃	〃	〃	X-0	
	162		〃	118	49	47.5	4.5	42	〃	〃	〃	SG1～F-4G中	内面煤
	163		〃	117	55	48	5	47	〃	〃	〃	〃 中	転用硯
	164		〃	124	55	50.5	4.5	44	〃	〃	〃	〃 中	
	165		〃	125	52	53	4	42	〃	〃	〃	〃 中	
20	166	赤焼土器	坏	129	50	49.5	4	39	〃	〃	〃	〃 中・底	口縁煤
	167		〃	165	58	59	4	35	〃	〃	〃	〃 上・中・底	
	168		高台付皿		69	33.5	5	54	〃	〃	〃	〃	内面煤・外面火ハネ
	169		壺		(106)		8		〃	〃	〃	〃 中	内面煤
	170		甕	(124)	(64)	80	3.5		〃	〃	〃	〃 中	
	171		〃	100	59	80	5		〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
	172		〃	(118)	60	94	4.5		〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
	173		〃	(95)	59	89	6		〃	〃	〃	〃 底	内外面煤
	174		〃	(116)	64	92	4		〃	〃	〃	〃	内外面煤
	175		〃	110	55	84	5		〃	〃	〃	〃 底	内外面煤
21	179	赤焼土器	甕	148	85	160	6		〃	〃	〃	〃 中・底	外面煤
	182		〃	58	40	50	4		〃	〃	ケズリ	〃	内外面煤
	189		〃	122	68	96	5.5		〃	〃	ロクロ	〃 中	内外面煤
	195		〃	130			6		〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
	217		〃	95			5.5		〃	〃	〃	〃 中	
	224		〃	184		180	7			カキメ	ケズリ	〃 中	
22	238	赤焼土器	鍋	(630)			8			アテ	タタキ・ケズリ	〃	煤
	241		〃	456		146	8		砂底	タタキ・アテ	タタキ・ケズリ	〃 上	煤
	242		三脚鉢	280		157	8			ロクロ・カキメ	ロクロ・ケズリ	〃 中	脚先端に火熱痕
23	244	土師器（内黒）	坏	(128)	47	46	4	37	回転糸切り	ミガキ	口唇部ミガキ	〃 中	
	245		〃	134	54	51	4	40	〃	〃	〃	〃 中	
	246		〃	128	50	50.5	4.5	39	〃	〃	〃	〃 底	
	247		〃	118	53	48.5	5	45	〃	〃	〃	〃 中・底	
	248		〃	125	(56)	57.5	5	45	〃	〃	〃	〃 中	
	249		〃	140	56	58.5	5	40	〃	〃	〃	〃 中・底	内外面火ハネ
	250		〃	118	52	54	5	44	〃	〃	〃	〃 中	
	251		〃	128	57	49.5	5	45	〃	〃	〃	〃	外面火熱痕
	252		〃	121	49	51	5	40	〃	〃	〃	〃 中	
	253		〃	116	52	49	5	45	〃	〃	〃	〃 中	
	254		〃	151	60	59	5	40	〃	〃	〃	〃 上	
	255		〃	170			6			〃	〃	〃 上	
	256		〃	135	57	51.5	5	42	〃	〃	〃	〃 中	
	257		〃	133	50	49.5	4	38	〃	〃	〃	〃 中	

表－7　遺物観察表(5)

挿図番号	遺物番号	種別・器種		計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	口径/底径	底部切離	調整・成形 内面	外面	出土地点	備考
23	258	土師器（内黒）	坏	122	51	54	4.5	42	回転糸切り	ミガキ	口唇部ミガキ	SG1～F-4G上・中	体部に墨書　文字不明
	259		〃	184	64	72.5	4.5	35	〃	〃	〃	〃　中	
	260		〃	(130)	52	50	4	40	〃	〃	〃	〃　中	
	261		〃	(131)	52	46.5	4	40	〃	〃	〃	〃　上・中	
	262		〃	130	46	56	5	35	〃	〃	〃	〃　上・中	外面煤
	263		〃	141	62	65	5	44	〃	〃	〃	〃　中	
	264		〃	144	(60)	68	5	42	〃	〃	〃	〃　中	
	265		高台付坏	173	76	77.5	5	44	〃	〃	〃	〃　中	擬似高台
	266		坏	130	53	49	4.5	41	〃	〃	〃	〃　中・底	
	267		〃	118	54	53	5	46	〃	〃	〃	〃　中・底	
	268		〃	137	58	52.5	5	42	〃	〃	〃	〃　底	
	269		〃	150	(62)	60	4.5	41	〃	〃	〃	〃　中	
	270		〃	118	48	53	5	41	〃	〃	〃	〃　中	
	271		〃	130	60	51.5	5	46	〃	〃	〃	〃　中	
24	272	土師器（内黒）	坏	124	58	46.5	4	47	〃	〃	〃	〃　上・中	
	273		〃	122	56	52	5	46	〃	〃	〃	〃　中・底	
	274		〃	158	65	61.5	4.5	41	〃	〃	〃	〃　中	墨書
	275		〃	120	50	52	5.5	42	〃	〃	〃	〃　中・底	
	276		〃		55		5		〃	〃	〃	〃　底	墨書
	277		〃		56		4		〃	〃	〃	〃	墨書
	278		〃	121	50	53	5	41	〃	〃	〃	〃　中	非黒色
	279		〃	(157)	(50)	65	4	32	〃	〃	〃	〃　中	
	280		高台付坏	182	78	83	4.5	43	〃	〃	〃 ・ケズリ	〃　中	擬似高台
	281		〃	175	68	88	5.5	39	〃	〃	〃 ・ケズリ	〃　中	
	282		〃	182	78	76	5	43	〃	〃	〃	〃　中	
	283		〃	129	62	64.5	4.5	48	〃	〃	〃	〃　上	墨書
	284		壺				8		〃	ナデ	ミガキ	〃　上	外面黒色処理
	285		鉢	50	48	67	3.5		〃	ミガキ	ミガキ	〃　中	
26	2	赤焼土器 須恵器	坏	(120)	52	47.5	4	43	〃	ロクロ	ロクロ	SG1～F-9G底	墨書
	3		〃	124	58	54	4.5	47	〃	〃	〃	〃　底	墨書
	4		〃	132	90	33	4.5	68	ヘラ切り	〃	〃	〃　底	墨画(馬)カ
	5		壺	100			4.5					〃　底	外面煤
	7		支脚									〃　底	
	8		坏	134	60	49.5	5	45	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	〃　底	
	9		〃	130	44	47.5	3	34	〃	〃	〃	〃　底	
	10		〃	(128)	58	50.5	4	45	〃	〃	〃	〃　底	墨書
	11		〃	124	50	48	5	40	〃	〃	〃	〃　底	内外面煤
27	1	須恵器	坏	127	84	29	4	66	ヘラ切り	〃	〃	〃　底	転用硯
	2		〃	130	70	29	3.5	54	〃	〃	〃	〃　底	
	3		〃	129	68	28	4	53	〃	〃	〃	〃　底	転用硯
	4		〃	(128)	77	32	3.5	60	〃	〃	〃	〃　底	墨書
	5		蓋		76		4		〃	〃	〃	〃　中	
	6		〃	130	80	37	4	62	〃	〃	〃	〃　中・底	墨書　文字不明
	7		〃		74		5.5		〃	〃	〃	〃　底	
	8		〃		(80)		4.5		〃	〃	〃	〃　底	墨書　線刻「×」
	9		〃				3.5			〃	〃	〃	墨書
	10		〃	122			4.5			〃	〃	〃　中	
	11		高台付坏	102	51	51.5	3	50	〃	〃	〃	〃　底	墨書　文字不明
	12		〃		72		3.5		〃	〃	〃	〃　底	墨書　文字不明(二文字)
	13		〃		70				〃	〃	〃	〃　底	墨書
	14		坏	(140)	62	37	4.5	40	回転糸切り	〃	〃	〃　底	墨書
	15		〃	134	46	44	4.5	34	〃	〃	〃	〃　中	
	16		〃	(134)	48	43	4.5	36	〃	〃	〃	〃　中	
	17		〃	142	53	46	4.5	37	〃	〃	〃	〃　底	
	18		蓋	(152)			8				天井部ケズリ	〃　底	
	19		壺		86		9			アテ・カキメ	タタキ	〃　中	
	20		〃		90		8.5			カキメ・アテ	タタキ	〃　中・底	
	21		横瓶				10			青海波アテ	タタキ	〃　中	
28	26	赤焼土器	坏	(152)	91	34	5	60	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	〃　中・底	外面煤
	27		〃	(110)	51	47	5	46	回転糸切り	〃	〃	〃　中	墨書　口縁煤
	28		〃	(126)	52	47	4	41	〃	〃	〃	〃　中	体部に墨書
	29		〃	117	52	55	5	44	〃	〃	〃	〃　底	墨書
	30		〃	154	56	52.5	4	36	〃	〃	〃	〃　中・底	内外面煤
	31		〃	158	(62)	65	5	39	〃	〃	〃	〃　中	
	32		〃	142	54	47.5	4	38	〃	〃	〃	〃　中	外面タール付着

表－8　遺物観察表(6)

挿図番号	遺物番号	種別・器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	口径/底径	底部切離	調整・成形 内面	外面	出土地点	備考
28	33	赤焼土器 坏	(150)	51	56	3.5	34	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SG1～F-9G中	
	34	〃	138	64	42	4.5	46	〃	〃	〃	〃 中	
	35	〃	124	54	52	5	44	〃	〃	〃	〃 中	墨書
	36	〃	132	60	52	4	45	〃	〃	〃	〃 底	
	37	〃	133	54	48.5	4	41	〃	〃	〃	〃 中・底	
	38	〃	128	58	52	4	45	〃	〃	〃	〃 中	
	39	〃	118	50	49.5	6	42	〃	〃	〃	〃 底	
	40	〃	134	58	47	5	43	〃	〃	〃	〃	内外面煤
	41	〃	(132)	53	50	3.5	40	〃	〃	〃	〃 中	外面煤
	42	〃	(116)	59	53.5	4	51	〃	〃	〃	〃 中	口縁煤
	43	〃	(129)	71	56	5	55	〃	〃	〃	〃 中・底	外面火ハネ
	44	〃	(129)	59	58	4	46	〃	〃	〃	〃 中	外面煤
	45	〃	129	(52)	54	5	40	〃	〃	〃	〃 中・底	
	46	〃	116	60	53	6	52	〃	〃	〃	〃 底	
	47	〃	(118)	53	56	5.5	45	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	48	〃	148	59	49	4	40	〃	〃	〃	〃 中	
	49	〃	154	62	57.5	6	40	〃	〃	〃	〃 中	外面タール付着
	50	〃	(138)	60	52	5	43	〃	〃	〃	〃 中	
	51	〃	(137)	55	46	4	40	〃	〃	〃	〃 中	
	52	〃	129	47	45.5	4	36	〃	〃	〃	〃 中	
	53	〃	126	50	47	6	40	〃	〃	〃	〃 中	底に墨
	54	〃	137	54	51	4	39	〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
	55	〃	130	50	47	4.5	38	〃	〃	〃	〃 中	外面タール付着
	56	〃	130	52	47	5	40	〃	〃	〃	〃 中	
	57	〃	(134)	58	52	4	43	〃	〃	〃	〃 中・底	
29	58	〃	126	59	42	5	47	〃	〃	〃	〃 中	
	59	〃	(122)	50	50	3.5	41	〃	〃	〃	〃 底	墨書
	60	〃	132	55	46	4	42	〃	〃	〃	〃 中・底	
	61	〃	126	50	48	3.5	40	〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
	62	〃	132	50	42	4	38	〃	〃	〃	〃 中・底	
	63	〃	133	58	44	5	44	〃	〃	〃	〃 中	口縁煤
	64	〃	(134)	54	48	3	40	〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
	65	〃	(168)	65	62	4	39	〃	〃	〃	〃 中	外面煤
	66	皿	126	55	32	5		〃	〃	〃	〃 中	
	67	坏	136	52	35	4	38	〃	〃	〃	〃 底	内外面煤
	68	〃	136			4			〃	〃	〃 中・底	墨書 文字不明
	69	〃		(59)		6		〃	〃	〃	〃	墨書 文字不明
	70	〃		60		5		〃	〃	〃	〃 底	墨書
	71	甕		76		6.5		〃	〃	〃	〃 底	内外面煤
	72	〃		74		7		〃	〃	〃	〃 底	外面煤
	73	〃		86		8.5		〃	〃	〃	〃 中	
	80	〃		68		5.5		〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
	81	〃	153	74	114.5	6		〃	〃	〃	〃 中	内外面煤
30	95	坏	134	54	53	4.5	40	〃	ミガキ	ミガキ・ケズリ	〃 底	墨書
	96	〃	(115)	52	61	4.5	45	〃	〃	ミガキ	〃 中	
	97	〃	121	56	55	5.5	46	〃	〃	ミガキ・ケズリ	〃 中	
	98	〃	(139)	(66)	73	6	47	〃	〃	〃	〃 中	外面火ハネ
	99	〃	(120)	52	55	5	43	〃	〃	ミガキ	〃 底	
	100	〃	(122)	54	47.5	4.5	44	〃	〃	〃	〃 中	非黒色
	101	〃	(147)	62	64	5.5	42	〃	〃	〃	〃 中・底	
	102	〃	108	(43)	56	5	40	〃	〃	〃	〃 中	
	103	〃	122	55	55	4.5	45	〃	〃	〃	〃 中	
	104	〃	105	(56)	58	5	53	〃	〃	〃	〃 中	
	105	高台付坏				6			〃	〃	〃 中	非黒色
	106	坏	130	66	42	4.5	51	回転糸切り	〃	〃	〃 中・底	
	107	〃	(132)	51	46	4	39	〃	〃	〃	〃 中	
	108	〃	(134)	53	50.5	4.5	40	〃	〃	〃	〃 中	
	109	〃	146	62	69	3.5	42	〃	〃	〃	〃 中	
	110	〃	145	63	69	5	43	〃	〃	〃	〃 中	
	111	〃	128	52	54	5.5	41	〃	〃	〃	〃 中	
	112	〃	154	68	72	5	44	〃	〃	〃	〃 中	非黒色
	113	〃	124	53	45	4	43	〃	〃	〃	〃 中・底	
	114	〃	142	(50)	58	4	35	〃	〃	〃	〃 底	
	115	〃	145	61	70	5	42	〃	〃	〃	〃 中・底	
	116	両黒坏	142	53	53	4.5	37	ケズリ	〃	〃	〃 中・底	

表－9　遺物観察表(7)

種別番号	遺物番号	種別・器種		計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	口径底径	底部切離	調整・成形 内面	外面	出土地点	備考
30	117	土師器(内黒)	高台付坏	(153)	65	61	5.5	42	回転糸切り	ミガキ	口唇部ミガキ	SG1～F-9G中	
32	1	須恵器	坏	(135)	(80)	29	4	59	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SG1～F-11G中	
	2		〃		50		5		回転糸切り	〃	〃	〃 中	墨書
	3		高台付坏	110	66	50	3.5	60	ヘラ切り	〃	〃	〃 中	
	4		〃		86		4.5		回転糸切り	〃	〃	〃 中	
	5	赤焼土器	坏	(120)	52	51	4	43	〃	〃	〃	〃 中	
	6		〃	(131)	61	47	3.5	47	〃	〃	〃	〃 中	
	7		〃	(138)	(61)	46	4.5	44	〃	〃	〃	〃 中	
	8		〃	139	54	52	4.5	39	〃	〃	〃	〃 中	
	9		〃	123	55	57.5	4.5	45	〃	〃	〃	〃 中	
	10	土師器(内黒)	〃	133	(50)	43	3.5	38	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	〃 中	非黒色
	33	赤焼土器	(脚種不明)							指ナデ・ケズリ	指ナデ・ケズリ	〃 中	底部に三脚付
33	1	赤焼土器	坏	128	57	47	5	45	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SG1～D-7G	
	2		〃	138	58	44.5	3	42	〃	〃	〃	〃	内外面煤
	3		〃	127	48	49	4.5	38	〃	〃	〃	〃	
	4		〃	125	52	47.5	5	42	〃	〃	〃	〃	
	5	土師器(内黒)	高台付坏	136			3.5		〃	ミガキ	口唇部ミガキ	〃	
	6		〃	148	60	61	4	41	〃	〃	〃	〃	瓦似高台
	7	赤焼土器	坏	120	52	47	4.5	43	〃	ロクロ	ロクロ	〃	
	8		〃	(131)	51	45	3	39	〃	〃	〃	〃	
	9		〃	130	58	53	3	45	〃	〃	〃	〃	
	10		〃	134	55	46.5	5.5	34	〃	〃	〃	〃	
	11	土師器(内黒)	〃	131	45	47	4	34	〃	ミガキ	口唇部ミガキ	〃	
	12	赤焼土器	〃	123	48	47.5	4	39	〃	ロクロ	ロクロ	〃	
34	1	須恵器	坏	(126)	(75)	33	5	60	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SG1～D-7G	
	2		〃		46		4.5		回転糸切り	〃	〃	〃	墨書
	9	赤焼土器	〃	134	54	50	4.5	40	〃	〃	〃	〃	
	10		〃	134	60	42	5	45	〃	〃	〃	〃	
	11		〃	130	53	50	4	41	〃	〃	〃	〃	
	12		〃	126	54	48	6	43	〃	〃	〃	〃	
	13		〃	118	51	49	5	43	〃	〃	〃	〃	
	14		〃	130	51	51.5	3.5	39	〃	〃	〃	〃	
	15		〃	(145)	53	59	3	37	〃	〃	〃	〃	
	16		〃	(153)	57	54.5	5	37	〃	〃	〃	〃	外面煤
	17		〃	128	45	46.5	3.5	35	〃	〃	〃	〃	
	18		〃	(127)	46	40	4.5	36	〃	〃	〃	〃	
	19		〃	123	50	45.5	4.5	41	〃	〃	〃	〃	
	20		〃	(129)	55	41.5	4.5	43	〃	〃	〃	〃	
	21		〃	(130)	54	47	5	42	〃	〃	〃	〃	
	22		〃	(138)	56	47	4.5	41	〃	〃	〃	〃	
	23		〃	(124)	(50)	43.5	4	40	〃	〃	〃	〃	
	24		〃	(146)	55	54	5	38	〃	〃	〃	〃	
	25		〃	121	54	44.5	5	45	〃	〃	〃	〃	
	26		〃	(135)	62	49.5	3.5	46	〃	〃	〃	〃	
	27		〃	(112)	55	51	5.5	49	〃	〃	〃	〃	
35	28	赤焼土器	〃	(124)	52	44	5	42	〃	〃	〃	〃	
	29		〃	(124)	50	46.5	4.5	40	〃	〃	〃	〃	
	30		〃	(115)	51	50.5	4.5	44	〃	〃	〃	〃	
	31		〃	(133)	59	50	4	44	〃	〃	〃	〃	
	32		〃	132	60	44	4.5	45	〃	〃	〃	〃	
	33		〃	(129)	63	46	3.5	49	〃	〃	〃	〃	
	34		〃	(151)	59	54	5	39	〃	〃	〃	〃	
	35		〃	128	60	49.5	5	47	〃	〃	〃	〃	外面煤
	36		〃	122	54	39	5.5	44	〃	〃	〃	〃	
	37		〃	(128)	49	41.5	3.5	38	〃	〃	〃	〃	
	38		〃	(120)	52	49.5	7	43	〃	〃	〃	〃	
	39		〃	(128)	46	48.5	4	36	〃	〃	〃	〃	
	40		〃	131			3			〃	〃	〃	墨書 文字不明
	41		〃	(121)			6.5			〃	〃	〃	墨書
	42		〃	(120)			4			〃	〃	〃	墨書 文字不明
	43		〃	(150)			4			〃	〃	〃	墨書 文字不明
	44		〃	121	55	44	5	45	回転糸切り	〃	〃	〃	
	45		〃	133	56	47	5	42	〃	〃	〃	〃	
	46		〃	116	51	50	4.5	44	〃	〃	〃	〃	
	47		〃	125	56	45	5	45	〃	〃	〃	〃	

表－10　遺物観察表(8)

掲図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	口径/底径	底部切離	調整・成形 内面	外面	出土地点	備考
35	48	赤焼土器	坏	127	50	46	5	39	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SG1～D-7G	
	49		〃	134	56	43	4	42	〃	〃	〃	〃	
	50		〃	125	53	44	4.5	42	〃	〃	〃	〃	
	51		〃	123	53	45	4.5	43	〃	〃	〃	〃	
	52		〃	128	54	48	4	42	〃	〃	〃	〃	外面煤　底に墨
	53		〃	(118)	54	50	4	46	〃	〃	〃	〃	
	54		〃	125	57	46.5	4	46	〃	〃	〃	〃	
	55		〃	140	58	60	5	41	〃	〃	〃	〃	内外面煤
	56		〃	135	54	57.5	4	40	〃	〃	〃	〃	
	57		〃	(137)	55	58.5	4	40	〃	〃	〃	〃	
	58		〃	132	58	55	4	44	〃	〃	〃	〃	
	59		〃	129	52	51.5	3.5	40	〃	〃	〃	〃	
36	60	赤焼土器	〃	130	51	50	4.5	39	〃	〃	〃	〃	
	61		〃	135	64	53.5	4	47	〃	〃	〃	〃	
	62		〃	121	50	40.5	4.5	41	〃	〃	〃	〃	
	63		〃	116	50	48.5	5	43	〃	〃	〃	〃	外面煤
	64		〃	126	56	46.5	5.5	44	〃	〃	〃	〃	口縁煤
	65		〃	125	55	50	5	44	〃	〃	〃	〃	
	66		〃	128	46	43	3.5	36	〃	〃	〃	〃	
	67		〃	(130)	56	49	4.5	43	〃	〃	〃	〃	
	68		〃	(122)	58	47	5	48	〃	〃	〃	〃	
	69		〃	124	47	42	3.5	38	〃	〃	〃	〃	
	70		〃	127	59	50.5	4	46	〃	〃	〃	〃	
	71		〃	122	50	44	3.5	41	〃	〃	〃	〃	
	72		高台付坏	140	70	50	4.5	50	〃	〃	〃	〃	
	73		鉢	(176)			7					〃	内外面煤
	89	土師器(内黒)	坏	130	54	50	4	42	回転糸切り	ミガキ	口唇部ミガキ	〃	
	90		〃	143	62	53.5	4	43	〃	〃	〃	〃	
	91		〃	151	56	55	4	37	〃	〃	〃	〃	
	92		〃		(56)		5.5		〃	〃	〃	〃	体部に墨書　文字不明
	93		〃		(55)		5		〃	〃	〃	〃	体部に墨書　文字不明
	94		高台付坏	151	68	66	4	45	〃	〃	〃	〃	
	95		同黒〃	129	62	51	5.5	48	〃	〃	〃	〃	
	96		高台付坏		70		4.5		〃	〃	〃	〃	体部に墨書　文字不明
	97		〃		(65)		5		〃	〃	〃	〃	体部に墨書　底部火ハネ
	98		〃				4			〃	〃	〃	体部に墨書
37	100	土師器(内黒)	鉢	(265)	110	135	7.5		糸切り-ケズリ	ミガキ・ケズリ		K-10G	
38	1	灰釉陶器	碗		(70)		4		回転糸切り	ロクロ	ロクロ・ケズリ	K-10G	
	2		〃		(76)		4		〃	〃		X-O	
	3		〃		(64)		4.5		〃	〃		X-O	
	4	須恵器	小瓶	(40)								C-6G	
	5		坏	(142)	74	28.5	4	52	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	G-3G	墨書
	6		〃	133	89	36	5	67	〃	〃	〃	H-9G	
	7		〃	(134)	(83)	31.5	5	62	〃	〃	〃	SG1～G-5G	
	8		〃	(130)	71	33	5.5	55	〃	〃	〃	〃	墨付着
	9		〃		68		5		〃	〃	〃	G-5G	墨書
	10		〃	(131)	(85)	35.5	4.5	65	〃	〃	〃	X-O	
	11		高台付坏	(111)	60	47	4.5	54	〃	〃	〃	SG1～G-5G	
	12		〃	114	64	53	3.5	56	〃	〃	〃	C-7G	
	13		〃	107	64	50	5.5	60	〃	〃	〃	SP1816	墨書
	14		坏	136	72	37.5	4	53	回転糸切り	〃	〃	G-5G	墨書　火ハネ痕
	15		高台付坏	(158)	88	86	6.5	56	ヘラ切り	〃	ロクロ・ケズリ	H-3GとSD837	接合
	16		坏		(50)		3.5		回転糸切り	〃	ロクロ	X-O	墨書
	17		〃		41		4		〃	〃	〃	SG1～B-8G	
	26	赤焼土器	〃	(117)	51	51	4.5	44	〃	〃	〃	SG1～E-4G	
	27		〃	124	59	56	5	48	〃	〃	〃	C-2G	
	28		〃	137	50	52	4.5	36	〃	〃	〃	SG1～G-4G	内外面煤
	29		〃	(121)	(56)	44	3.5	46	〃	〃	〃	SG1～B-8G	内外面煤
39	51	土師器(内黒)	〃		66		7		回転糸切り	ミガキ	口唇部ミガキ	SG1～G-5G	底部に体部に墨書　文字不明
	52		〃	(121)	50	51	5	41	〃	〃	〃	SG1～H-7G	体部に墨書
	53		高台付坏		(61)		5		〃	〃	〃	SG1～G-5G	墨書　文字不明
	54		坏	(163)	64	71	5.5	39	〃	〃	〃	SG1～G-4G	
	55		高台付坏	138	64	56.5	5	46	〃	〃	〃	B-7G	転用硯

Ⅳ　まとめと考察

今調査は遊佐町北東部に位置する大坪遺跡＝総面積約122,000㎡の内、ほ場整備との関連でやむを得ず削平を受ける遺跡中央部の現水田地11,200㎡について実施し、平成２年度に次いで第２次調査である。南北に主軸をとる掘立柱建物跡や河川跡ＳＤ300等が前調査と共通して検出された。なかでも河川跡の全体及び当時の居住景観が具体的に把握できたことは大きな成果である。幅20mほどの河川の両岸＝自然堤防上に居住域を形成していたが、建物は時期的な重複がみられるが20棟を確認している。配置や規模的にはこれまでの発掘例と大差ないが、河川跡捨て場からの出土遺物には学問的に注目すべきものが多い。とりわけＦ－４Ｇ捨て場からの遺物は詳細に検討することにより、飽海のみならず庄内地方や出羽国における平安時代の歴史を究明するうえで貴重な資料となる。

遺物は少なくともＦ－４ＧとＦ－９Ｇ捨て場に関しては915年降灰とされる十和田ａの下からの出土が確実であり、更に遺物とこの火山灰の間には泥炭層の堆積がみられることから、遺物の年代としては915年を下限とする。加えて全国的に土器編年が進められている猿投黒笹窯灰釉陶器の出土は共伴する在地産の土器の年代観にも重要な手がかりを与えるものである。

結論的に述べれば、遺跡は９世紀後半に成立し、10世紀前半まで機能している。調査区では左岸西～北東、右岸中央部が最も古く、左岸南半が時期的には新しいと考えられるが、これらのうち重複する区域については判然としない。それぞれに対応する捨て場としてＦ－４Ｇ、Ｆ－９Ｇ、Ｄ－７Ｇがあげられる。が、Ｄ－７Ｇについては検出した建物数に比して遺物の出土量が少なく、別に今調査区外にも捨て場があったと推定される。今後とも検討すべき課題が山積するが、出土した墨書土器と遺跡の性格について若干の考察を加えたい。

(1)　墨書土器について

墨書土器は破片を含めて128点確認している。酒田市生石２遺跡の555点や同じく熊野田遺跡の205点に次ぐ出土点数である。総じて文字を書くことに精通した者による墨書が目立つことが特色としてあげられる。128点の内同じ字形をとっているものでは「寺」21点、「廿」25点、「二」11点、「上」４点であり、26－４(馬)や28－28(犬)のような墨画もみられる。種別としては須恵器65点(51%)、赤焼土器40点(31%)、内黒土師器18点(14%)、灰釉陶器５点(４%)であるが各々の出土量の割合からみれば、灰釉陶器が最も墨書されている率が高く、次いで須恵器という順になる。器種は灰釉陶器皿３点を除いて、他は全て供膳形態の碗・坏に限定され、呪術的な色彩の濃い甕類への墨書は見当たらない。墨書部位は底部94点、体部35点である(14－９は底部・体部に異筆の「廿」・「殖」ヵという墨書がある)。底部への墨書は須恵器が65点中57点、赤焼土器では40点中25点、内黒土師器では18点中７点みられ、須恵器では底部に墨書される割合が高い。後述するが同筆と思われる「廿」という墨書が16－43では底部に、11－２では体部に書かれており、その違いが何を意味するものかについては判然としない。が、赤焼土器や土師器における墨書が体部に書かれるようになるのは９世紀末～10世紀に多くみられ、それは赤焼土器の量産そして集落への多量の供給と同時期の所産と考えられる。今調査区で時期的に

みて最も新しいと推定されるD－7G捨て場の墨書土器にもその傾向が窺える。墨書の性格や機能等において、須恵器に墨書が多く付された段階とは変化しているのではなかろうか。更に底部での墨書位置についても両端と中央では時期的な違いが考えられる。

(2) 墨書文字について

墨書「寻」が付されたヘラ切り無調整の須恵器坏は、少なくともその生産時期は9世紀前後と考えられ、出土土器の中では最も古いものである。F－4G捨て場でやや河川の中に入った所で16点集中して出土した。層位的には中層及び底層からであるが、流動等により多少の攪拌を受けている。この文字についてはかなりの異筆や墨書位置の相異がみられるが、明らかに同じ字形をとっており、意識的にそれを書いていると思われる。他にF－9G捨て場とG－3Gから1点ずつ出土している。第1次調査で赤焼土器坏の中に明瞭な墨書「忌寸」1点が出土している。土器の年代的には隔たりがあるが、先掲の墨書も同字と考える。「忌寸」の「心」部分が欠けているが、「寸」という文字を形作る「一」が「心」も同時に表し、本来は2文字を1文字のように書く〝合わせ文字〟と推測される。姓＝「忌寸」をもつ者の所有か使用を示す墨書土器である。

この墨書をもつヘラ切り須恵器坏が一括投棄されていることは日常的ではない特殊な用途(機会)に使用されていたとも考えられる。その多くの口縁に煤が付着していることから燈明用にされていたのかもしれない。また、前述須恵器よりは明らかに製作年代が新しい28－27赤焼土器坏と39－52内黒土師器坏の「寸」及び35－40赤焼土器坏の墨書も同じ意味を有するか、同じ文字を意識して書かれたものではなかろうか。「忌寸」が墨書されたのと同形のヘラ切り須恵器に対応するような積極的な根拠をもつ遺構はSK25以外は見いだせない。

姓を墨書する土器はこの他にはF－9G捨て場から出土した糸切り須恵器に熟達した墨書「直」が所見する(27－14)。

次に猿投窯黒笹90号窯式第2～3段階に位置付けられる灰釉陶器に見られる墨書「廿」に注目したい。「廿」は破片による部分的なものを含め、全部で25点出土しており、その範囲はF－4G捨て場で21点、D－7G捨て場・B－6G内のSK72・SP364で各1点出土している。種別としては須恵器13点・灰釉陶器5点・赤焼土器5点・土師器2点である。その内灰釉陶器と同筆のものは須恵器坏では16－42・43・44・45・47、11－2が考えられ、赤焼土器坏では18－88が考えられる。同時期の使用にかかると推測できる。また、異筆ながら須恵器14－9及び内黒土師器14－11も「廿」であり、とくに須恵器16－43・47と器形的に同じであることから、これらも同時期と考えられる。更に14－5～16は出土状況から一括の投棄であり、墨書の有無という違いはあるが同時期の遺物である。この墨書「廿」を手掛かりとして先掲灰釉陶器の編年を基準にとれば同時期の使用土器の組成を把握できる。9世紀第3～4四半段階では供膳用器としては量的に須恵器坏から赤焼土器坏に主体が移行すると通常考えられるが、量的に少ない須恵器にこの墨書が多く見られること、加えて灰釉陶器に多く書かれていることからも非日常的な使用或いは特定の者の使用が推測されるのではなかろうか。

本遺跡では先の墨書文字「寻」・「廿」の他には例えば「二」や「三」など数字の墨書が多い印象をもつ。数字の墨書は集落遺跡で広汎に出土しているが、この数字が何を意

味するものかは未だによくわかっていない。飽海一帯でも広く所見されるが、数字のうち最大のものは酒田市手蔵田12遺跡出土の「卅」である。五十戸一里(郷)制とこの数字を関連づけて考えられないだろうか。胆沢城跡出土の漆紙文書(兵士歴名簿)で各戸には固有の戸番というものが付されていた可能性が指摘されているが、墨書土器にみられる数字についてもこれと同じ「戸番」を示し、それを書き手は意識して書いていると推測される。特定の者或いは家(集団)の所有か使用を示すという点では前述の墨書文字は同様の機能をもつ。

(3) 遺跡の性格について

今調査では灰釉陶器(19個体)の他に短冊型木簡が1点河川跡F－4G捨て場底層から出土している。木簡は京への貢進物だった「甘葛煎」の栽培か加工を裏付けるものであり、その負担者と思われる「伴」氏や「目代」氏等の存在が確認できる。

F－4G捨て場出土遺物は他のF－9G・D－7G捨て場とは異なるものが多い。前述の灰釉陶器と木簡はその典型であるが、この他に注目すべき遺物として20図と21図で示した小型の平底甕があげられる。実測可能の範囲で図化したが、大半は内面口縁部及び外面全体に煤が付着しており明らかに蓋をした状態で煮沸した痕跡を残している。また、これら底部には火熱痕や煤は見られず、支脚等を使用していたと推測される。煮沸するにあたって、敢えて小型の甕を使用するのは、用途としてそれが最も適合していたからに外ならない。何を煮沸し、つくっていたのかは判然としないとしても、この小型甕の多さからもF－4G捨て場周辺の建物・住人の特殊性が窺える。

この捨て場からは斎串・人形等のいわゆる祭祀的な遺物が出土していない(25－293の木製品は長さが66cmあり刀形の形態であるが)。F－9GやD－7G・B－8G捨て場では例外なく出土しているにもかかわらず、F－4G捨て場にないことも特色のひとつとしてあげられる。

建物跡は調査区全体で20棟を数え、大別して南北棟と東西棟があるが、井戸跡は全く検出されない。左岸西側に東西棟、南側及び右岸に南北棟がみられる。D－7G捨て場遺物や柱穴への十和田aの堆積状況(1層に細かいブロック状に所見)等から左岸南は時期的には新しく、東西棟の目立つ左岸西が古いと考える。8図に示した西隅の板材列(SA2)がどちらに関連するのかは特定できない。が、河川を挟み右岸北の溝状の遺構がこれと平行な布掘りの跡とすれば、調査区のほぼ全域は河川をも取り込んだ囲繞施設という見方も可能であろう。同時期の周辺遺跡においては小深田遺跡に板材列がみられる。板材列のもつ機能は判然としていないが、一般の建物にこのような板材列が付随していたとは考えられず、やはり本遺跡の有する性格と深く関わるものであろう。区画して、周囲とは区別しなければならない存在であったと思われる。出土木簡や熟達した墨書等から推測すれば、F－4G周辺＝左岸北西部には「蕊」に関わる国か郡の公的施設があり、機能していた時期が、すなわち9世紀後半から10世紀前後の間にあったのではなかろうか。多くの灰釉陶器についても、そこに出仕する官人の使用と理解できる。左岸南における建物跡や遺物は、この遺跡において10世紀以降の新たな段階に移ったことを示している。その間の事情については今後の課題であるが、変遷の時期と河川の湿地化がほぼ同じ頃であったことは偶然ではなかろう。

参 考 文 献

阿部明彦『宅田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第72集、1983

〃　『手蔵田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第87集、1985

〃　『手蔵田遺跡発掘調査報告書(2)』山形県埋蔵文化財調査報告書第98集、1986

〃　『木原遺跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第８集、1994

斎藤主税『熊野田遺跡第３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第146集、1989

渋谷孝雄『下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第145集、1989

名和達朗『浮橋遺跡　下長橋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第141集、1989

野尻　侃『小深田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第140集、1989

安部　実『生石２遺跡発掘調査報告書(3)』山形県埋蔵文化財調査報告書第117集、1987

月山隆弘『大坪遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第166集、1991

平川　南『よみがえる古代文書』岩波書店、1994

〃　「墨書土器とその字形」(『国立歴史民俗博物館研究報告』35集所収、1991)

東野治之『書の古代史』岩波書店、1994

表－11　墨書土器出土地点一覧

番号	掲図番号	種別・器形	墨書文字	墨書位置	出土地点	備　考
1	15-14	須恵器　坏	弓	底部	SG1〜F-4	ヘラ切り
2	15-15	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
3	15-16	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
4	15-17	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
5	15-18	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
6	15-19	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
7	15-20	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
8	15-21	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
9	15-22	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
10	15-23	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
11	15-24	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
12	15-25	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
13	15-26	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
14	15-27	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
15	16-31	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
16	16-40	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
17	27-13	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-9	ヘラ切り
18	38-13	須恵器　〃	〃	底部	SP1316	〃
19	28-27	赤焼　〃	寸	底部	SG1〜F-9	糸切り
20	38-5	須恵器　〃	斗	底部	SG1〜G-3	ヘラ切り
21	38-14	須恵器　〃	〃	底部	SG1〜F-4	〃
22	39-52	内黒　〃	寸	体部	SG1〜G-5	糸切り
23	15-1	灰釉　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃　高台付
24	15-2	灰釉　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃　〃
25	15-3	灰釉　皿	廿	底部	SG1〜F-4	〃　〃
26	15-12	灰釉　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃　〃
27	15-13	灰釉　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃　〃
28	16-42	須恵器　坏	廿	底部	SG1〜F-4	〃
29	16-43	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
30	16-44	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
31	16-45	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃　高台付
32	16-46	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
33	16-47	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
34	16-48	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
35	16-49	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
36	16-88	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
37	18-89	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
38	18-90	赤焼　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
39	18-91	赤焼　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
40	24-283	内黒　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃　高台付
41	28-47	赤焼　〃	廿	底部	SG1〜F-4	〃
42	38-16	須恵器　〃	廿	底部	X-0	〃
43	34-2	須恵器　〃	廿	底部	SG1〜D-7	ヘラ切り
44	11-2	須恵器　〃	廿	体部	SK72F	糸切り
45		須恵器　〃	廿	底部	SP364	〃　押印なし
46	14-9	須恵器　〃	廿	体部	RP81	糸切り
47	14-10	須恵器　〃	廿	底部	RP82	〃
48	16-50	須恵器　〃	二	体部	SG1〜F-4	〃
49	16-51	須恵器　〃	二	体部	SG1〜F-4	〃
50	16-52	須恵器　〃	二	体部	SG1〜F-4	〃
51	16-53	須恵器　〃	二	体部	SG1〜F-4	〃
52	18-92	赤焼　〃	二	体部	SG1〜F-4	〃
53	18-93	赤焼　〃	二	体部	SG1〜F-4	〃
54	18-94	赤焼　〃	二	体部	SG1〜F-4	〃
55	29-59	赤焼　〃	二	体部	SG1〜F-9	〃
56	26-3	赤焼　〃	二	体部	RP111	〃
57	26-10	赤焼　〃	二	体部	RP113	〃
58	30-119	内黒　〃	二	体部	〃	〃
59	32-2	須恵器　〃	二	体部	SG1〜F-11	〃
60	30-95	内黒　〃	三	体部	SG1〜F-9	〃
61	16-37	須恵器　〃	三	底部	SG1〜F-4	ヘラ切り
62	26-2	赤焼　〃	五	底部	RP118	糸切り
63	16-38	須恵器　〃	十	底部	SG1〜F-4	ヘラ切り

番号	掲図番号	種別・器形	墨書文字	墨書位置	出土地点	備　考
64	27-4	須恵器　坏	貳ヵ	底部	SG1〜F-9	ヘラ切り
65	27-8	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜F-9	〃
66	27-12	須恵器　〃	臨ヵ	底部	SG1〜F-9	ヘラ切り 高台付
67	27-14	須恵器　〃	嵐	底部	SG1〜F-9	糸切り
68	28-29	赤焼　〃	春カ	底部	SG1〜F-9	〃
69	29-68	赤焼　〃	不明	底部	SG1〜F-9	〃
70	27-11	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜F-9	ヘラ切り 高台付
71	29-69	赤焼　〃	几ヵ	底部	SG1〜F-9	
72	30-118	内黒　〃	不明	体部	SG1〜F-9	
73	30-120	内黒　〃	不明	体部	SG1〜F-9	糸切り
74	39-51	内黒　〃	不明	底部	SG1〜G-5	〃
75	34-3	須恵器　〃	人	体部	SG1〜D-7	
76	34-4	須恵器　〃	不明	体部	SG1〜D-7	
77	35-43	赤焼　〃	不明	体部	SG1〜D-7	
78	38-9	須恵器　〃	中カ	底部	SG1〜F-4	ヘラ切り
79	38-18	須恵器　〃	不明	体部	SG1〜G-9	
80	39-53	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜G-5	糸切り　黒台付
81	36-96	内黒　〃	不明	体部	SG1〜D-7	糸切り　黒台付
82	35-40	赤焼　〃	不明	体部	SG1〜D-7	悪ヵ
83	36-93	内黒　〃	不明	底部	SG1〜D-7	糸切り
84	36-92	内黒　〃	不明	底部	SG1〜D-7	〃
85	35-42	赤焼　〃	不明	体部	SG1〜D-7	
86	36-99	内黒　〃	不明	体部	SG1〜D-7	
87	16-55	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜F-4	糸切り
88	38-19	須恵器　〃	不明	体部	SG1〜E-4	〃
89	39-51	内黒　〃	不明	体部	〃	糸切り
90	29-70	赤焼　〃	不明	底部	SG1〜F-9	糸切り
91	17-76	須恵器　〃	志	体部	SG1〜F-4	糸切り　黒台付
92	18-96	赤焼　〃	女カ	底部	SG1〜F-4	糸切り
93	18-97	赤焼　〃	艸カ	底部	SG1〜F-4	〃
94	18-98	赤焼　〃	㊀	底部	SG1〜F-4	〃
95	18-99	赤焼　〃	㊀	底部	SG1〜F-4	〃
96	12-12	赤焼　〃	㊀	底部	SD100	〃
97	18-103	赤焼　〃	㊀	体部	SG1〜F-4	〃
98	18-104	赤焼　〃	㊀	体部	SG1〜F-4	〃
99	18-95	赤焼　〃	不明	体部	SG1〜F-4	〃
100	10-5	赤焼　〃	◎	底部	SP1776	ヘラ切り
101	27-9	須恵器　〃	日カ	底部	SG1〜F-9	ヘラ切り
102	36-97	内黒　〃	上	体部	SG1〜D-7	糸切り　高台付
103	35-41	赤焼　〃	上	体部	SG1〜D-7	
104	36-98	内黒　〃	上	体部	SG1〜D-7	
105	38-30	赤焼　〃	上	体部	SG1〜G	
106	28-28	赤焼　〃		体部	SG1〜F-9	糸切り・犬の画カ
107	26-4	須恵器　〃		底部	SG1〜F-9	ヘラ切り・馬の画カ
108	18-108	赤焼　〃	鬼カ	底部	SG1〜F-4	糸切り
109	28-35	赤焼　〃	鬼カ	底部	SG1〜F-9	糸切り
110	14-9	須恵器　〃	舘カ	体部	SG1〜F-4	糸切り
111	14-6	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜F-4	〃
112	14-1	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜F-4	〃
113	16-28	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜F-4	ヘラ切り
114	16-54	須恵器　〃	不明	底部	SG1〜F-4	糸切り
115	16-35	須恵器　〃	古電	底部	SG1〜F-4	ヘラ切り
116	17-56	須恵器　〃	鼎	底部	SG1〜F-4	糸切り
117	17-57	須恵器　〃	不明	体部	SG1〜F-4	
118	18-100	赤焼　〃	不明	体部	SG1〜F-4	糸切り
119	18-101	赤焼　〃	不明	底部	SG1〜F-4	糸切り
120	18-102	赤焼　〃	立カ	底部	SG1〜F-4	糸切り
121	18-105	赤焼　〃	不明	体部	SG1〜F-4	糸切り
122	18-106	赤焼　〃	不明	底部	SG1〜F-4	糸切り
123	18-107	赤焼　〃	不明	底部	SG1〜F-4	糸切り
124	18-109	赤焼　〃	不明	体部	SG1〜F-4	
125	18-112	赤焼　〃	左	体部	SG1〜F-4	糸切り
126	23-258	内黒　〃	不明	体部	SG1〜F-4	糸切り
127	24-274	内黒　〃	不明	体部	SG1〜F-4	糸切り
128	24-276	内黒　〃	不明	体部	SG1〜F-4	糸切り
129	24-277	内黒　〃	不明	底部	SG1〜F-4	糸切り

●須恵器　○灰釉陶器　□赤焼土器　△土師器(内黒)

第40図　墨書文字・記号集成

付　　編

釈文

潤三月九日軍□(福カ)録補役　伴咋万呂蕝二役（以下欠損）

目代真養二役□マ

□□□真［　］

出土木簡実測図

付編2

「大坪遺跡出土木簡について」

國立歴史民俗博物館
平川　南

1、釈文

閏三月九日軍□(福カ)録補役　伴昨万呂畠二役　（以下欠損）
目代真養二役□マ
□□□真「　」
閏三月九日軍□補役を録す。伴昨万呂畠二役（以下欠損）
目代真養二役、□部（以下欠損）

2、形状

本来は短冊型の文書木簡と考えられるが、現状では下端が欠損している。裏面は腐触が目立つが墨痕は認められない。

3、内容

閏三月九日に軍□（人名、渡来系の人物か）が徴発した人物と使役の回数を記録したものと推測できる。その使役の目的として「畠」が注目される。「畠」は「類聚名義抄」によれば、「カツラ」と訓む。これは古代においては甘味料として利用された。その甘味料は「甘葛煎」（アマヅラ）と呼ばれている。

「延喜式」（大膳下）諸国貢進菓子条によれば、

出羽国。甘葛煎二斗。（中略）

右依前件。其数臨時増減。随到検収附内膳司。但甘葛煎直進蔵人所。

とあり、出羽国から中央へ甘葛煎を毎年貢進していたのである。その畠の収穫または製造加工に際しての就役ではないかと考えられる。このような木簡をもととして、最終的に帳簿様の文書にとりまとめ、作成されたのであろう。

4、年代

木簡を出土した投棄場が九一五年の火山灰に覆われていることから、下限は九一五年となる。上限は木簡に記された人名、伴氏は淳和天皇の諱大伴を避けて改められたのが弘仁一四年（八二三）であるので、これをもって決めることができる。結局は、本木簡の年代は八二三年～九一五年までの間と限定するのである。

帯外線写真

報告書抄録

ふりがな	おおつぼいせきだい２じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	大坪遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第23集
編集者名	斎藤俊一・渡辺　薫・黒沼幹男
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－31山形県上山市弁天二丁目15番１号　　ＴＥＬ0236－72－5301
発行月日	西暦1995年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大坪（おおつぼ）	山形県飽海郡遊佐町大字野沢字大坪（やまがたけんあくみぐんゆざまちおおあざのざわあざおおつぼ）	6461	2,110	39° 1′ 35″	139° 55′ 21″	19940509～ 19940907	11,200	県営ほ場整備事業（月光川上流地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坪	集落跡	平安	掘立柱建物跡　20棟 土　坑　90基 旧河川跡　1条 板材列　1	須恵器 赤焼土器 黒色土器 灰釉陶器 木製品 木簡	調査区中央から河川跡が検出され、捨て場３ケ所を確認。 短冊型木簡１点、灰釉陶器19点をはじめ、多くの墨書土器が出土した。調査区南西隅からは板材列が検出された。

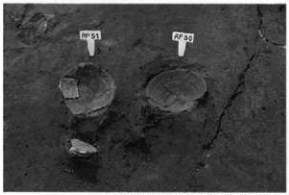
図　　版

調査区全景

遺構検出状況(左岸南)

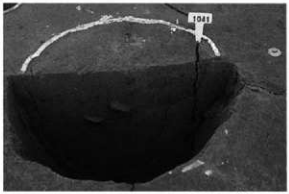
調査区遠景(東から)

SG1河川跡　F-4G捨て場調査状況(南西から)



SB19-EB75検出状況(東から)

SB15-EB979土層断面(南から)



SB16-EB1041土層断面(南から)

SA2板材列掘り方土層断面(北から)

SA2板材列(東から)

SA2板材列(南から)

SK6土層断面（南から）

SK32土層断面（南から）

SK43土層断面（南から）

SK69土層断面（南から）

SK72土層断面（南から）

SK78検出状況（南西から）

SD100b-b'土層断面（南から）

SD1167土層断面（北から）

SG1河川跡　F-4G捨て場検出状況(南から)

F-4G捨て場　B-B'土層断面(北から)

F-4G捨て場　遺物出土状況(東から)

F-4G捨て場　木簡出土状況(東から)

F-9G捨て場　C-C'土層断面(西から)

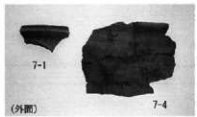
F-9G捨て場　遺物出土状況(北東から)

D-7G捨て場　D-D'土層断面(東から)

SG1河川跡　A-A'土層断面(南から)

5-1

5-2



7-2

7-3

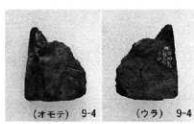
7-5

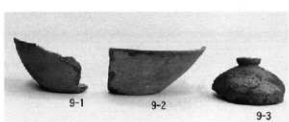
7-6

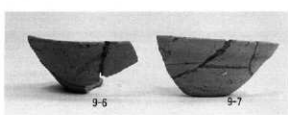
7-7

7-8

7-9

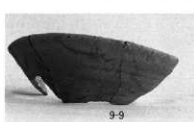






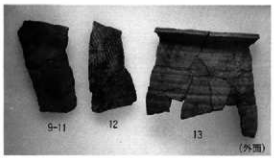
9-5

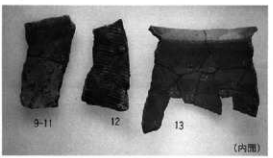
9-8

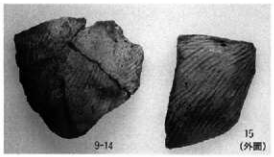

9-9

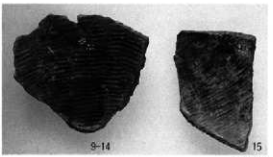
9-5

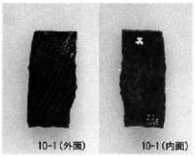
9-10


9-11
12
13
(外面)


9-11
12
13
(内面)


9-14
15
(外面)


9-14
15
(内面)


10-1 (外面)
10-1 (内面)

10-2

10-3

10-4

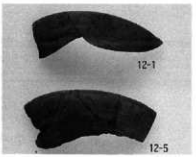
10-5

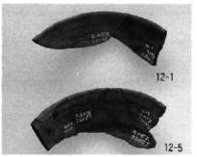
11-2

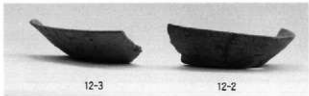
11-1 (外面)

11-1 (内面)

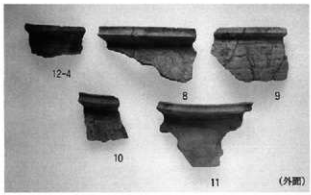
11-2

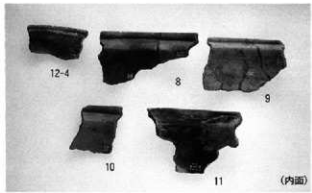

12-1
12-5
(外面)


12-1
12-5
(内面)

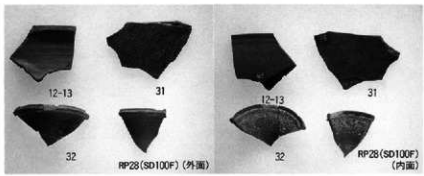

12-3
12-2

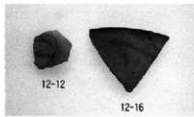
12-6

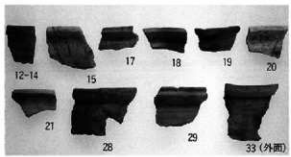

12-4
8
9
10
11
(外面)


12-4
8
9
10
11
(内面)

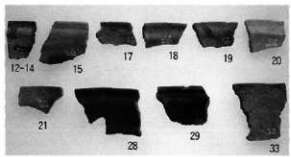
12-7


12-13
31
32
RP28(SD100F)(外面)
12-13
31
32
RP28(SD100F)
(内面)


12-12
12-16


12-14
15
17
18
19
20
21
28
29
33(外面)

12-22


12-14
15
17
18
19
20
21
28
29
33
(内面)

12-24

12-27

12-25
12-23

12-26

12-30

12-35

8-1(オモテ)

8-1(ウラ)

SB14-EB123柱根

8-2(オモテ)

8-2(ウラ)

SB14-EB122柱根

8-3(オモテ)

8-3(ウラ)

14-1

14-2

14-3

14-4

14-5

14-6

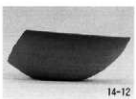
14-7

14-8

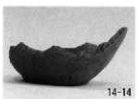
14-9

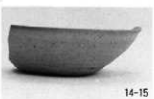
14-10

14-11


14-12

14-13


14-14


14-15

14-16

14-17

14-18

14-19

14-25

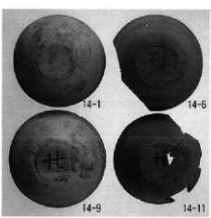
14-26

14-27

14-29
(外面)

14-29
(内面)

15-14


14-1
14-6
14-9
14-11

14-28

15-15

15-16

15-17

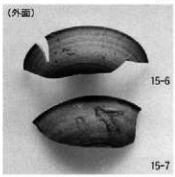
15-1

15-2

15-3

15-4

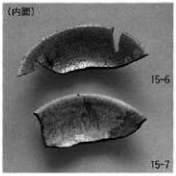
15-5

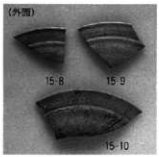


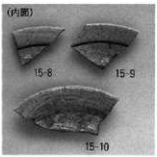
15-11

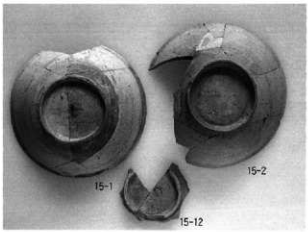
15-12

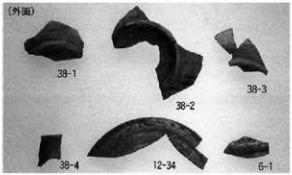
15-13

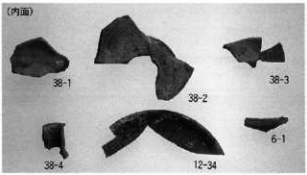












図版11

15-18

15-19

15-20

15-21

15-22

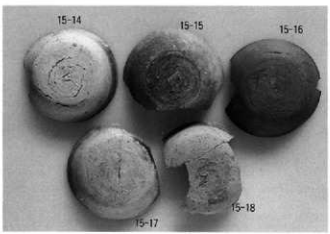
15-23

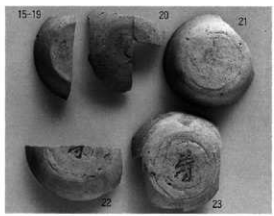
15-24

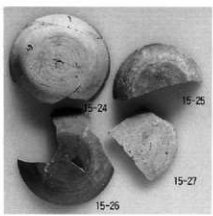
15-25

15-26

15-27







16-28

16-29

16-30

16-31

16-32

16-33

16-38

16-39

16-34

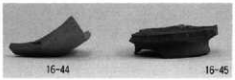
16-37

16-41

16-42

図版12

16-43


16-44 16-45

16-46

16-47

16-48

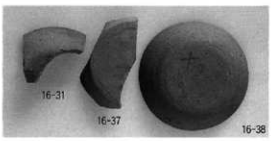
16-50

16-51

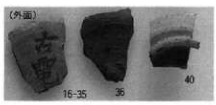
16-52

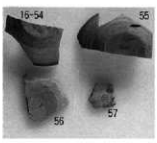
16-54

16-49 16-53 16-55


16-31 16-37 16-38

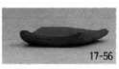
(外面)

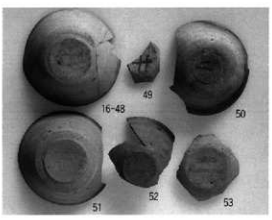

16-35 36 40


16-54 55 56 57

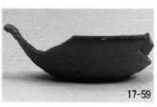
(内面)

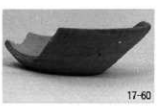
16-35 36 40


17-56


16-48 49 50 51 52 53

17-58

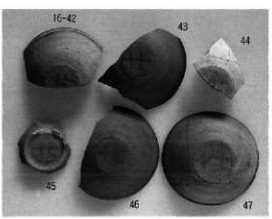

17-59


17-60

17-61

17-62

17-63


16-42 43 44 45 46 47

図版13

17-64

17-65

17-66

17-67

17-68

17-69

17-70

17-71

17-72

17-73

17-74

17-75

17-76

17-77

17-78

17-79

17-80

17-81 17-82

17-83

17-84

17-85

18-89

17-86

17-87

図版14

18-90

18-91 18-98 18-99

18-88

18-92

18-93

18-95

18-96

18-97

18-100

18-103

18-110

18-101

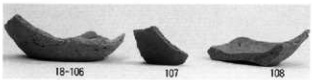
18-104

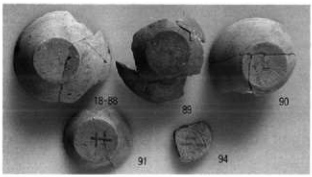
18-111

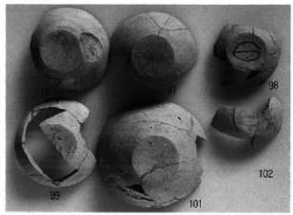
18-102

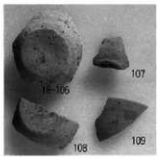
18-105

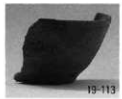
18-112

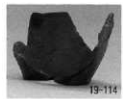

18-106 107 108


18-88 89 90 91 94


98 99 101 102

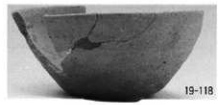

19-106
107
108
109


19-113


19-114

19-115

19-117


19-118

19-116

19-120

19-121

19-119

19-122

19-123

19-124

19-125

19-126

19-127

19-128

19-129

19-130

19-131

19-132

19-133

19-134

19-135

19-136

19-137

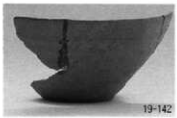
19-138

図版16

19-139

19-140

19-141


19-142

19-143

19-144

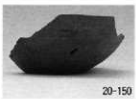
20-145

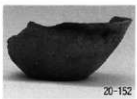
20-146

20-147

20-148

20-149


20-150


20-152

20-151

20-153

20-154

20-155

20-156

20-157

20-158

20-159

20-160

20-161

20-162

20-163

20-164

20-165

20-166

20-167

20-168

20-170

20-171

20-175

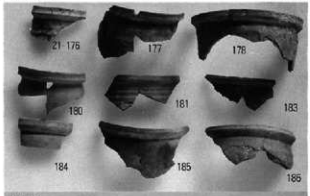
20-169（外面）

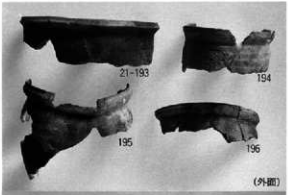
20-172

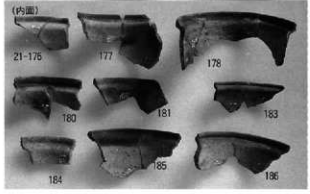
20-173

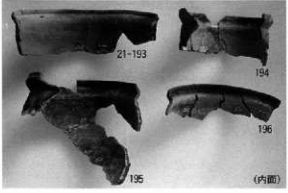
20-179

20-174

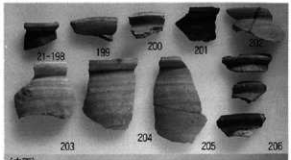




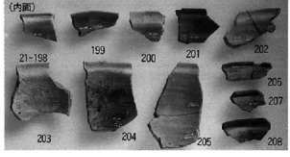




（外面）



（内面）



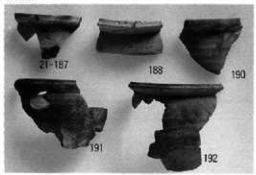
21-182

21-197

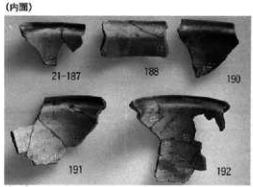
21-189

図版18

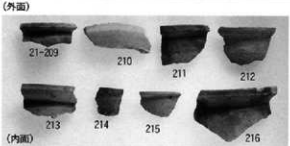
(外面)



(内面)



(外面)

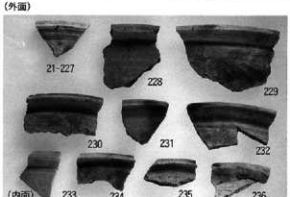


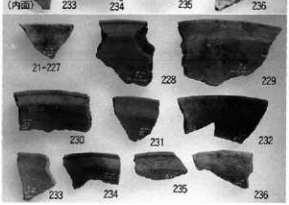
(内面)

22-225

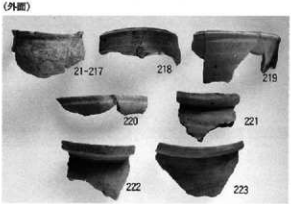
21-224

(外面)





(外面)



(内面)

22-243

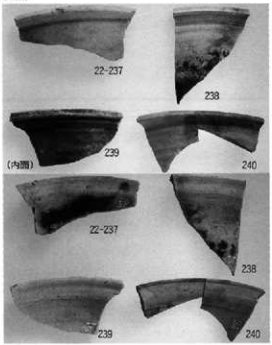
23-244

22-226

23-245

23-246

図版19
(外面)


22-237
238
239
240
(内面)
22-237
238
239
240

23-247

23-248

23-249

23-250

23-251

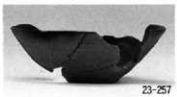
23-252

23-253

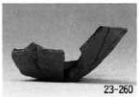
23-254

23-255

23-256


23-257

23-258


23-260

23-259

23-261

23-262

23-263

23-264

23-265

23-266

23-267

23-268

図版20

23-269

23-270

23-271

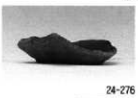
24-272

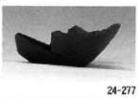
24-273

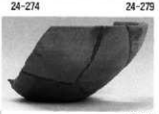
24-274

24-279

24-275

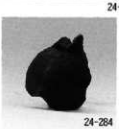

24-276


24-277


24-278

24-280

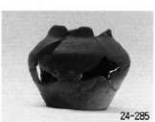
24-281

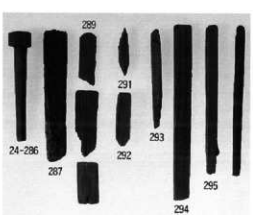

24-284

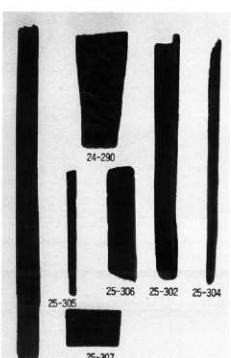
24-282

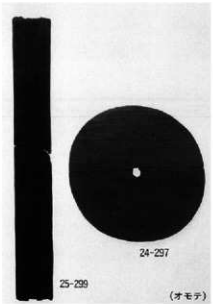
24-283

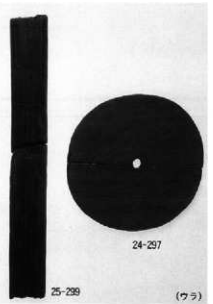
24-277
24-283

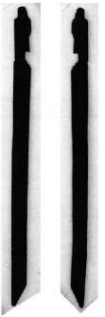

24-285

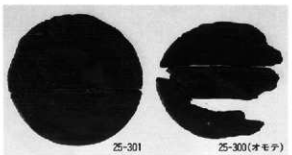


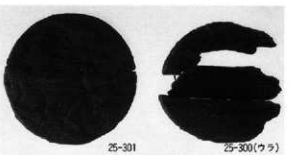


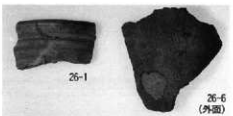

24-297
25-299
(オモテ)


24-297
25-299
(ウラ)


(オモテ)
25-298(ウラ)

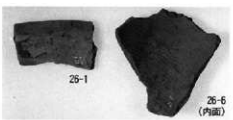

25-301
25-300(オモテ)


25-301
25-300(ウラ)


26-1
26-6
(外面)

26-2

26-3


26-1
26-6
(内面)

26-4

26-5

26-7

26-8

26-9

26-10

26-11

27-1

27-2

27-3

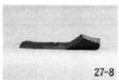
図版22

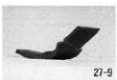
27-4

27-5

27-6

27-7


27-8


27-9

27-10

27-11

27-12 27-13

27-14

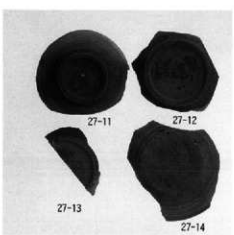
27-15

27-16

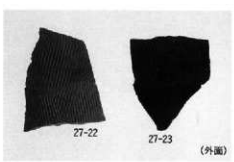
27-17

27-18

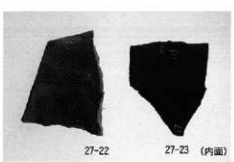
27-19

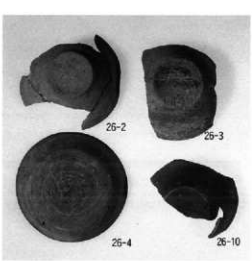

27-11 27-12 27-13 27-14

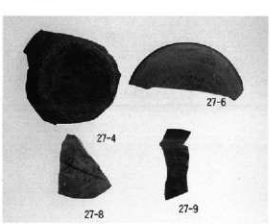
27-20

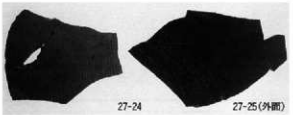

27-22 27-23 (外面)

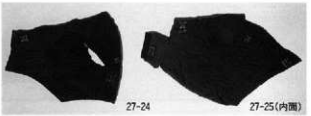
27-21

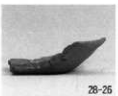

27-22 27-23 (内面)


26-2 26-3 26-4 26-10


27-6 27-4 27-8 27-9

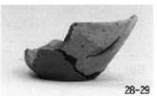

27-24　27-25(外面)


27-24　27-25(内面)


28-26

28-27

28-28


28-29

28-30

28-31

28-32

28-33

28-34

28-35

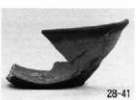
28-36

28-37

28-38

28-39

28-40


28-41

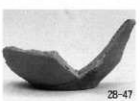
28-42

28-43

28-44

28-45

28-46


28-47

28-48

28-49

28-50

28-51

28-52

28-53

図版24

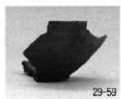
28-54

28-55

28-56

28-57

29-58


29-59

29-60

29-61

29-62

29-63

29-64

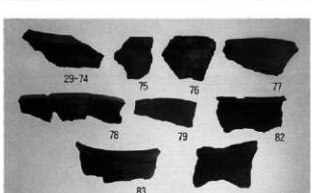
29-65

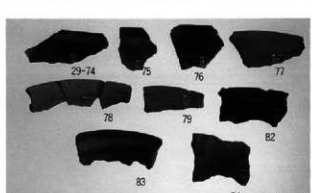
29-66

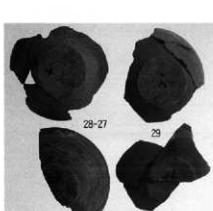
29-67

29-68 29-69 29-70

29-71 29-72 29-73

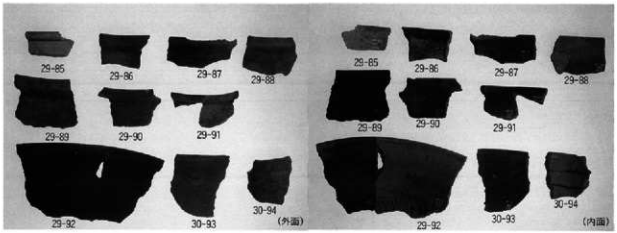






29-80

29-81



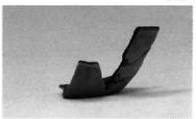
30-95

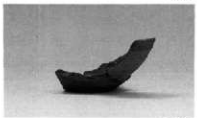
30-96

30-97

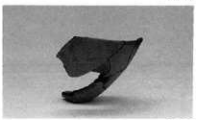
30-95

30-98


30-99


30-100

30-101

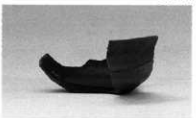

30-102

30-103

30-104

30-105

30-106


30-107

30-108

30-109

30-110

30-111

30-112

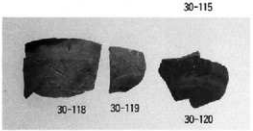
30-113

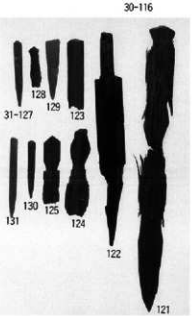
30-114

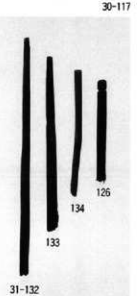
30-115

30-116

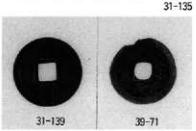
30-117

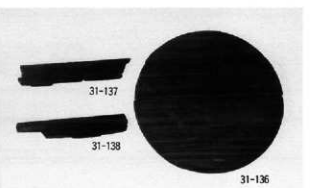


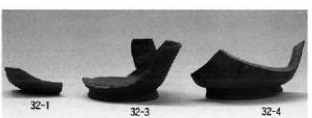




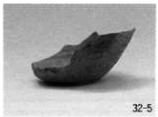
31-135

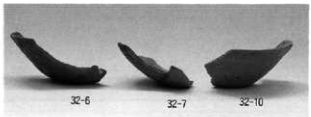




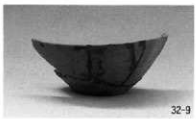


32-2


32-5

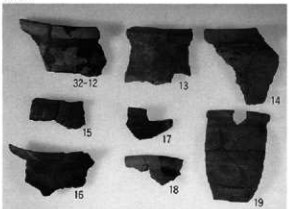

32-6 32-7 32-10

32-8

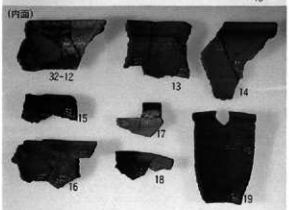

32-9

32-11

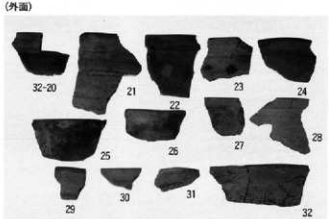
(外面)


32-12 13 14 15 17 16 18 19

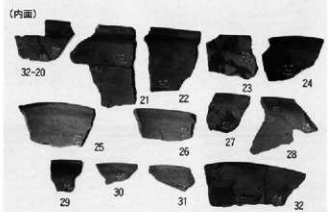
(内面)


32-12 13 14 15 17 16 18 19

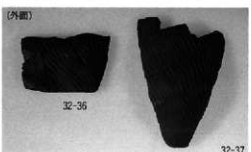
(外面)


32-20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

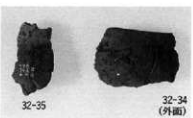
(内面)


32-20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

(外面)


32-36 32-37

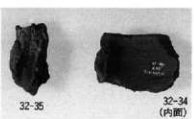
32-33 (外面)


32-35 32-34 (外面)

(内面)

32-36 32-37

32-33 (内面)


32-35 32-34 (内面)

33-1

33-2

33-3

33-4

33-5

33-6

33-7

33-8

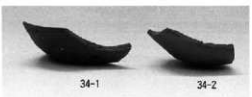
33-9

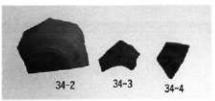
33-10

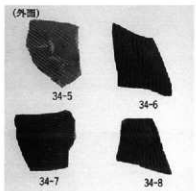
33-11

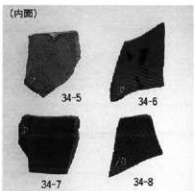
33-12

33-13









34-9

34-10

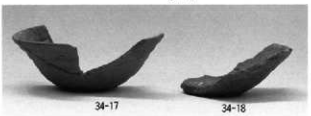
34-11

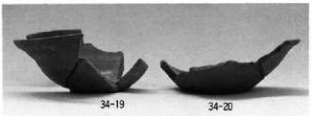
34-12

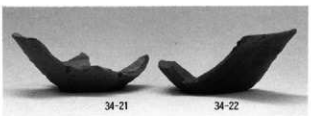
34-13

34-14

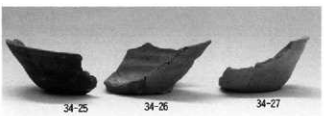
34-15 34-16

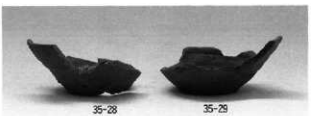

34-17 34-18

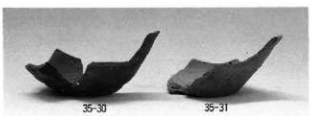

34-19 34-20


34-21 34-22

34-23 34-24


34-25 34-26 34-27


35-28 35-29

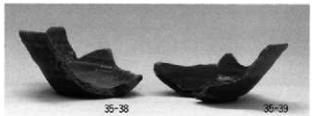

35-30 35-31

35-32 35-33

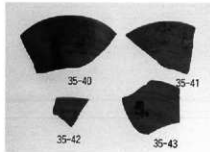
35-34 35-35

35-36 35-37

図版30


35-38

35-39


35-40

35-41

35-42

35-43

35-44

35-45

35-46

35-47

35-48

35-49

35-50

35-51

35-52

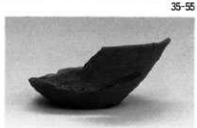
35-53

35-54

35-55

35-56

35-57


35-58

35-59

35-60

35-61

36-62

36-63

36-64

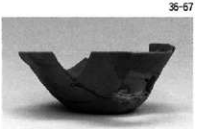
36-65

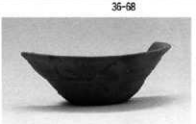
36-66

36-67

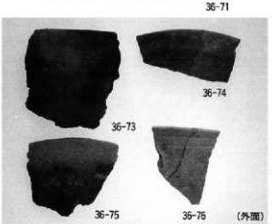
36-68

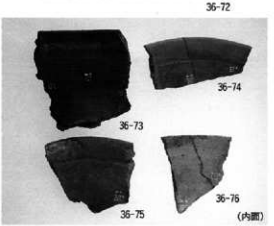
36-69

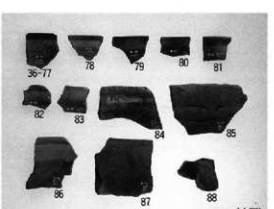

36-70


36-71

36-72



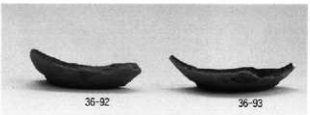




36-89

36-90

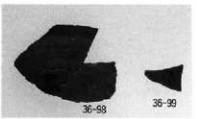
36-91


36-92 36-93

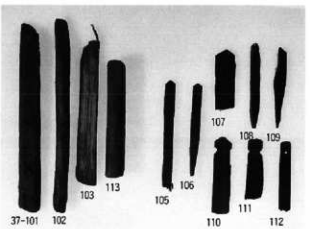
36-96 36-97

36-94

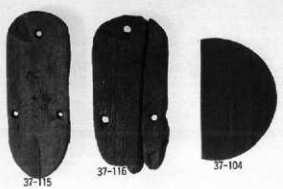
36-95


36-98 36-99

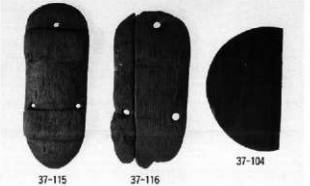
37-100

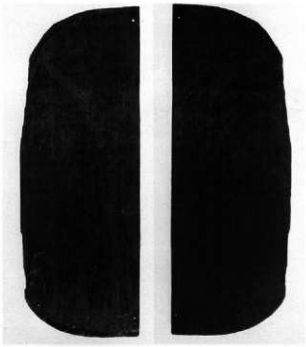


(オモテ)

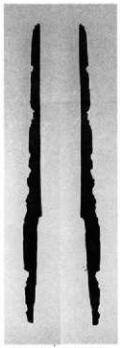

37-115 37-116 37-104

(ウラ)

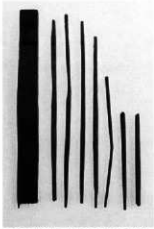

37-115 37-116 37-104



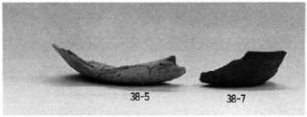
37-114(オモテ)　37-114(ウラ)



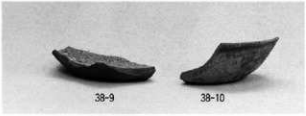
37-120（オモテ）　37-120（ウラ）



SG1 河川跡D-7G抽て場出土木製品



38-5　38-7



38-9　38-10

38-6

38-8

38-11

38-12

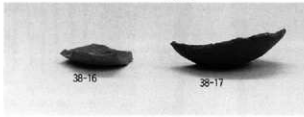
38-13

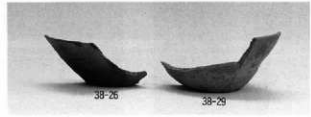
38-14

38-15

38-27

38-28

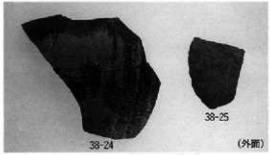


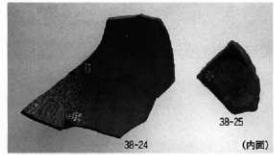


38-20

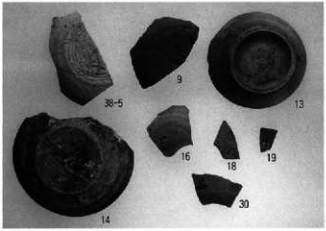
38-21

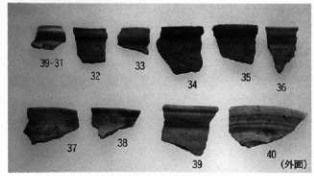
38-22

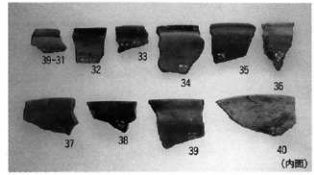


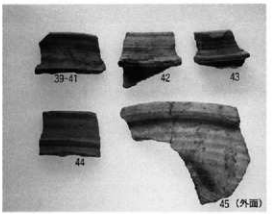


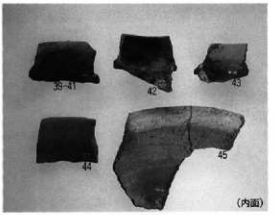
38-23







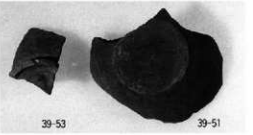


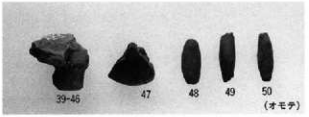


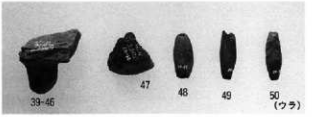
39-51

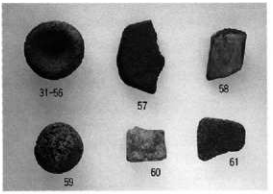
39-52

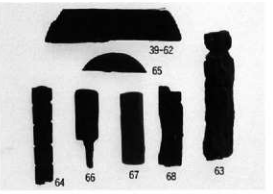
39-54

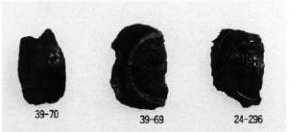


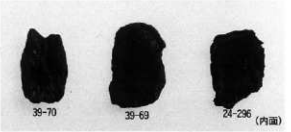












山形県埋蔵文化財センター調査報告書第23集

大坪遺跡第２次発掘調査報告書

1995年３月31日　発行

発 行　財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　0236-72-5301
印 刷　株式会社 田宮印刷所